

上
江
黒
遺
跡

上江黒遺跡

(一)今泉館林線(上江黒工区)社会資本総合整備(防災・安全)(交安・重点)事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

埋蔵文化財発掘調査報告書
群馬県埋蔵文化財調査事業団
調査報告書
第717集

二〇二三

群馬県埋蔵文化財調査事業団
群馬県館林土木事務所



2023

群馬県館林土木事務所
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

上江黒遺跡

(一)今泉館林線(上江黒工区)社会資本総合整備(防災・安全)(交安・重点)事業に伴う
埋 蔵 文 化 財 発 掘 調 査 報 告 書

2023

群馬県館林土木事務所
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

邑楽館林地域は、全体がほぼ平坦地で、県内で最も東京に近い60～70km圏内に位置します。東北方面へのアクセスも良く、近年の高速道路網の充実により栃木・埼玉・茨城の各県とは、住民生活や産業面等で相互に深く繋がっており、県境を越えた交流が多くなっています。しかしながら、通学路の歩道整備率が県内の他地域に比べて低く、交通事故発生件数も多いことから、歩行者の安全な通行を確保するための取組が急務でありました。

明和町上江黒地区を通る一般県道今泉館林線では、近年、とくに大型車の通行が多くなっており、また、カーブが多く、交差点の見通しが悪いにもかかわらず通学路に歩道が無く、たいへん危険であったため、群馬県では歩行者の安全な通行を確保するため、平成28年度から令和5年度にわたって一般県道今泉館林線(上江黒工区)の歩道整備事業を実施することとなりました。

工事対象地には埋蔵文化財の包蔵が認められたため、工事に先立って埋蔵文化財の記録保存の措置が執られることとなり、令和3年度に当事業団が発掘調査を実施しました。その結果、縄文時代の土坑、古墳時代前期から平安時代にかけての竪穴建物、井戸、中・近世の溝などの遺構と土器等の遺物が発見され、令和4年度に発掘調査の成果をまとめる整理作業を実施し、このほど発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

発掘調査から報告書の刊行に至るまでには、群馬県県土整備部、群馬県館林土木事務所、群馬県地域創生部、群馬県教育委員会、明和町教育委員会、地元関係者の方々などに多大なるご支援とご協力を賜りました。ここに篤く御礼を申し上げますとともに、本書が地域における歴史の解明と、豊かな地域社会の形成に役立てられますことを願ひまして、序といたします。

令和5年3月

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

理 事 長 向 田 忠 正

例 言

1. 本書は、(一)今泉館林線(上江黒工区)社会資本総合整備(防災・安全)(交安・重点)事業に伴って発掘調査された上江黒遺跡の発掘調査報告書である。

2. 遺跡は、群馬県邑楽郡明和町上江黒481-3・481-2・484・485-2・486-2・487-2・488-2に所在する。

3. 調査対象面積は1244.56㎡である。

4. 事業主体は群馬県館林土木事務所である。

5. 調査主体は公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団である。

6. 発掘調査の期間と体制は次のとおりである。

名 称：令和3年度(一)今泉館林線(上江黒工区)社会資本総合整備(防災・安全)(交安・重点)事業

履行期間：令和3年7月1日～令和3年11月30日

調査期間：令和3年8月1日～令和3年9月30日

調査担当：田村 博(主任調査研究員)、多田宏太(専門員)

遺跡掘削工事請負：株式会社シン技術コンサル

地上測量委託：技研コンサル株式会社

7. 整理事業の期間と体制は次のとおりである。

名 称：令和4年度(一)今泉館林線(上江黒工区)社会資本総合整備(防災・安全)(交安・重点)事業

履行期間：令和4年9月1日～令和5年3月31日

整理期間：令和4年9月1日～令和5年1月31日

整理担当：高島英之(専門員(総括))

8. 本書作成担当は次のとおりである。

編集・本文執筆：高島英之(専門員(総括))

遺物観察：土師器・須恵器 神谷佳明(専門調査役)

縄文土器 橋本 淳(主任調査研究員・資料統括)

中・近世土器・陶磁器類 大西雅広(専門調査役)

石器・石製品 岩崎泰一(専門調査役)

金属製品 板垣泰之(専門員(主任))

デジタル編集：齊田智彦(主任調査研究員)

遺物写真撮影：縄文土器、土師器、須恵器 高島英之

石器・石製品 岩崎泰一

金属製品 板垣泰之

遺物保存処理：板垣泰之、関邦一(専門調査役)

9. 出土遺物および写真・図面等記録類は、群馬県埋蔵文化財調査センターに保管している。

10. 発掘調査および報告書作成には、次の関係機関にご協力をいただいた。

群馬県県土整備部、群馬県地域創生部、群馬県館林土木事務所、群馬県教育委員会、明和町教育委員会

凡 例

1. 本報告書に用いた遺構名称は、発掘調査時の名称を踏襲したが、整理事業の過程で変更したのものもある。
2. 本報告書に用いた座標・方位は、すべて国家座標第Ⅹ系(世界測地系)による。主軸方位等の計算にもこれを用いた。
3. 本報告書の遺構図版縮尺は以下の通り。ただし、遺構によってはこの限りではない。
遺構平面図・断面図 竪穴建物1/60、竪穴建物竈1/30、溝・柵・土坑・ピット1/40
4. 本報告書の遺物図版縮尺は以下の通り。ただし、遺物によってはこの限りではない。
土師器、須恵器、縄文土器、石器・石製品1/3、金属製品1/1
5. 本報告書中のスクリーントーン表現・記号は以下の通り。
遺構図：攪乱  焼土  炭化物 
遺物図：灰軸  スス  黒色 
遺構図遺物：土器 ● 石器 ▲ 炭 × 鉄 ■ 種 △ 馬骨 ◎
7. 本報告書中の遺構断面図の標高値は、原則として断面図下に「L=○○m」のように表記した。
8. 本報告書における土層断面図及び遺物観察表に記した色調表現は、農林水産省水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所色票監修1988『新版標準土色帳』によった。
9. 本報告書におけるテフラ(火山噴出物)の略号は以下の通り(テフラの名称は町田洋・新井房夫1992『火山灰アトラス』東京大学出版会による)。

As-BP…浅間板鼻褐色テフラ群、AT…始良Tn

目次

序		第3章 発見された遺構と遺物	20
例言		第1節 中・近世の遺跡と遺物	20
凡例		1. 柵	20
目次		2. 溝	23
挿図・表・写真図版目次		3. ビット	32
		第2節 古代の遺構と遺物	33
第1章 調査に至る経緯、方法と経過	1	1. 竪穴建物	33
第1節 調査に至る経緯	1	2. 井戸	36
第2節 発掘調査の方法	2	第3節 古墳時代の遺構と遺物	39
1. 調査区と座標の設定	2	1. 竪穴建物	39
2. 発掘調査の方法	2	2. 土坑	57
3. 遺構測量	3	3. ビット	58
4. 遺構写真撮影	3	第4節 縄文時代の遺構と遺物	59
第3節 発掘調査の経過	4	1. 土坑	59
第4節 整理作業の経過と方法	5	2. ビット	65
第2章 遺跡の地理的・歴史的環境	6	第5節 時期不明の遺構と遺物	67
第1節 地理的環境	6	第6節 遺構外出土遺物	68
1. 地勢	6	第7節 旧石器確認調査	70
2. 地形	6	第4章 調査成果の整理とまとめ	72
第2節 歴史的環境	8	1. 中・近世	72
1. 旧石器時代	8	2. 古代	72
2. 縄文時代	8	3. 古墳時代	73
3. 弥生時代	10	4. 縄文時代	73
4. 古墳時代	10	遺物観察表	75
5. 奈良・平安時代	12	写真図版	
6. 中世	14	報告書抄録	
7. 近世・近代	18		
第3節 基本土層	19		
第1図 遺跡の位置	1	第10図 1号溝出土遺物(1)	27
第2図 調査区設定図	3	第11図 1号溝出土遺物(2)	28
第3図 周辺地形分類図	7	第12図 2号溝	29
第4図 周辺の遺跡	16	第13図 3・4号溝と3号溝出土遺物	30
第5図 基本土層図	19	第14図 5号溝と出土遺物	31
第6図 全体図	21	第15図 6号溝	32
第7図 1号堀	23	第16図 1・2・4・6・9号ビット	33
第8図 1～6号溝全景	24	第17図 1・4号竪穴建物	34
第9図 1号溝	25	第18図 10号竪穴建物と出土遺物	35

挿図目次

第19図	1号井戸と出土遺物	36
第20図	2号井戸と出土遺物	37
第21図	3・4号井戸	38
第22図	4号井戸出土遺物	39
第23図	2号竪穴建物と出土遺物	40
第24図	3号竪穴建物	42
第25図	3号竪穴建物出土遺物	43
第26図	5号竪穴建物と出土遺物	44
第27図	6号竪穴建物(1)	47
第28図	6号竪穴建物(2)	48
第29図	6号竪穴建物土層注記と出土遺物(1)	49
第30図	6号竪穴建物出土遺物(2)	50
第31図	7号竪穴建物出土遺物	52
第32図	8・9号竪穴建物	54
第33図	8・9号竪穴建物土層注記と8号竪穴建物出土遺物(1)	55

第34図	8号竪穴建物出土遺物(2)と9号竪穴建物出土遺物	56
第35図	7号土坑、18・19・21～24号ピット	58
第36図	1号土坑	59
第37図	2号土坑	60
第38図	2号土坑出土遺物	61
第39図	3号土坑	62
第40図	3号土坑出土遺物(1)	63
第41図	3号土坑出土遺物(2)	64
第42図	5・6号土坑と5号土坑出土遺物	65
第43図	10～12・14～16号ピットと12号ピット出土遺物	66
第44図	17・20号ピット	67
第45図	8号土坑	67
第46図	遺構外出土縄文土器	68
第47図	遺構外出土中・近世陶磁器、石器・石製品、金属製品	69
第48図	旧石器確認トレンチ	70

表 目 次

第1表	周辺道路一覧表	17
第2表	検出遺構一覧表	21

第3表	ピット一覧表	71
第4表	遺物観察表	75

写真目次

PL. 1

1. 調査区東側全景(西から)
2. 調査区西側全景(北西から)

PL. 2

1. 1号溝西側全景(東から)
2. 1号溝、3・4号溝全景(西から)
3. 1号溝A-A'断面(東から)
4. 1号溝B-B'断面(東から)

PL. 3

1. 3・4号溝断面(東から)
2. 2号溝全景(西から)
3. 2号溝断面(南から)
4. 5号溝全景(西から)
5. 5号溝全景(南から)
6. 5号溝B-B'断面(北西から)
7. 6号溝全景(東から)
8. 6号溝断面(南から)

PL. 4

1. 8号土坑全景(西から)
2. 8号土坑断面(西から)
3. 1号樺、2・4・6・9号ピット全景(東から)
4. 1号樺P1全景(南東から)
5. 1号樺P1断面(南東から)

PL. 5

1. 1号樺P2全景(南東から)
2. 1号樺P2断面(南東から)
3. 1号樺P3全景(南から)
4. 1号樺P3断面(南から)
5. 1号樺P4全景(南から)
6. 1号樺P4断面(南から)
7. 1号ピット全景(北から)
8. 1号ピット断面(北から)

PL. 6

1. 2号ピット全景(南から)
2. 2号ピット断面(南から)
3. 4号ピット全景(南から)
4. 4号ピット断面(南から)
5. 6号ピット全景(南から)
6. 6号ピット断面(南から)
7. 9号ピット全景(南から)
8. 9号ピット断面(南から)

PL. 7

1. 1号竪穴建物側方全景(北から)
2. 1号竪穴建物断面(南から)
3. 4号竪穴建物側方全景(北東から)
4. 4号竪穴建物断面(北西から)
5. 10号竪穴建物全景(南から)
6. 10号竪穴建物側方全景、断面(南から)
7. 10号竪穴建物遺物出土状況(南から)

PL. 8

1. 1号井戸全景(南から)
2. 1号井戸断面(南から)
3. 2号井戸全景(東から)
4. 2号井戸断面(東から)
5. 3号井戸全景(南から)
6. 3号井戸断面(南東から)
7. 4号井戸全景(北から)
8. 4号井戸断面(南から)

PL. 9

1. 2号竪穴建物側方全景(南西から)
2. 2号竪穴建物断面(南から)
3. 2号竪穴建物P1断面(南東から)
4. 3号竪穴建物遺物出土状況(北西から)
5. 3号竪穴建物遺物出土状況近景(北西から)

PL.10

1. 3号竪穴建物全景(北西から)
2. 3号竪穴建物断面(南西から)
3. 3号竪穴建物側方全景(北東から)
4. 3号竪穴建物P1断面(北西から)
5. 3号竪穴建物P2断面(北西から)

PL.11

1. 5号竪穴建物側方全景(北から)
2. 5号竪穴建物A-A'断面(南東から)
3. 5号竪穴建物P2断面(西から)
4. 5号竪穴建物後土坑範囲(東から)
5. 5号竪穴建物後土坑B-B'断面(西から)

PL.12

1. 6号竪穴建物全景(南東から)
2. 6号竪穴建物側方全景(南東から)
3. 6・7号竪穴建物A-A'断面(南から)
4. 6号竪穴建物遺物出土状況(東から)
5. 6号竪穴建物P1断面(南西から)

PL-13

- 6号整穴建物P 2 全景(南から)
- 6号整穴建物P 3 全景(南西から)
- 7号整穴建物全景(南から)
- 7号整穴建物掘方全景(南から)
- 7号整穴建物P 1 全景(南から)

PL-14

- 8号整穴建物全景(北西から)
- 8号整穴建物遺物出土状況(北西から)
- 8号整穴建物掘方全景(北西から)
- 8・9号整穴建物A-A'断面(北西から)
- 8・9号整穴建物B-B'断面(北東から)

PL-15

- 8号整穴建物P 1 全景(北西から)
- 8号整穴建物P 2 全景(北西から)
- 8号整穴建物P 3 全景(南から)
- 8号整穴建物P 4 全景(南東から)
- 9号整穴建物掘方全景(北西から)

PL-16

- 7号土坑全景(南東から)
- 7号土坑断面(南東から)
- 18号ピット全景(北から)
- 18号ピット断面(北東から)
- 19号ピット全景(北から)
- 19号ピット断面(北から)
- 21号ピット全景(北から)
- 21号ピット断面(北から)

PL-17

- 22号ピット全景(南から)
- 22号ピット断面(南から)
- 23号ピット全景(南東から)
- 23号ピット断面(南東から)
- 24号ピット全景(南から)
- 24号ピット断面(南から)
- 調査状況(南東から)

PL-18

- 1号土坑全景、断面(南から)
- 2号土坑遺物出土状況上面(東から)
- 2号土坑遺物出土状況下面(東から)
- 2号土坑完掘全景(東から)
- 2号土坑断面(東から)
- 3号土坑遺物出土状況上面(東から)
- 3号土坑遺物出土状況下面(東から)
- 3号土坑完掘全景(東から)

PL-19

- 3号土坑断面(東から)
- 3号土坑断面(東から)
- 5号土坑全景(北から)
- 5号土坑断面(北から)
- 6号土坑全景(南から)
- 6号土坑断面(南から)
- 3号土坑作業状況(東から)

PL-20

- 10号ピット全景(南西から)
- 10号ピット断面(南西から)
- 11号ピット全景(南西から)
- 11号ピット断面(南東から)
- 12号ピット全景(南から)
- 12号ピット断面(南から)
- 14号ピット全景(北西から)
- 14号ピット断面(北西から)

PL-21

- 15号ピット全景(南から)
- 15号ピット断面(南から)
- 16号ピット全景(南から)
- 16号ピット断面(西から)
- 17号ピット全景(北から)
- 17号ピット断面(西から)
- 20号ピット全景(北西から)
- 20号ピット断面(北西から)

PL-22

- 谷部基本土層(北から)
- 台地部基本土層(北から)
- 巨石器確認トレンチ全景(南から)
- 巨石器確認トレンチ断面(南から)
- 調査区西端部遺構確認面
- 調査区西端部東側トレンチ(北から)
- 調査区西端部西側トレンチ(北から)

PL-23

- 1・3・5号溝、10号整穴建物、1・2号井戸出土遺物

PL-24

- 4号井戸、2・3・5号整穴建物出土遺物

PL-25

- 6・7・8号整穴建物出土遺物

PL-26

- 8・9号整穴建物出土遺物

PL-27

- 2・3号土坑出土遺物

PL-28

- 3・5号土坑、12号ピット、遺構外出土遺物

第1章 調査に至る経緯、方法と経過

第1節 調査に至る経緯

群馬県の邑楽館林地域は、全体がほぼ平坦地で、県内で最も東京に近い60～70km圏内に位置し、東北方面へのアクセスも良く、栃木・埼玉・茨城の各県とは、住民生活や産業面等で相互に深く繋がっている。また、外国人住民の居住割合が高いことも、この地域の特徴として挙げられる。

この地域においては、市街地を中心に交通渋滞が発生しており、通学路の歩道整備率が県内の他地域に比べて低く、交通人身事事故発生件数も多いことから、歩行者や自転車の安全な通行を確保するための取組が急務であった。

群馬県では、「通学路に歩道が無く、大型車の交通量も多いため、とても危ない」「カーブが多く、交差点の見通しが悪いため、大変危険である」等の地域住民や地域の学校関係者らの強い要望を受けて、歩行者や自転車の安全な通行を確保するため、歩道整備等を推進することを地域における課題を解決するための主要な施策の一つと位置付け、邑楽郡明和町上江黒地内において、平成28年度から令和5年度の8年間、総延長350mに亘る一般県道今泉館林線の歩道設置のための事業が行われることになった。この事業によって、現在、歩道が無く、歩行者は路肩を歩くため、交通事故発生のおそれがあるところが、歩道を設置することで、歩行者の安全な通行空間が確保出来るようになるわけである。



第1図 道跡の位置
(国土地理院200,000分の1地勢図「宇都宮」(平成23年6月1日発行)を加工)

第1章 調査に至る経緯、方法と経過

(一)今泉館林線(上江黒工区)社会資本総合整備(防災・安全)(交安・重点)事業着手に当たっては、まず、群馬県県土整備部建設企画課(以下、県建設企画課と言う)は、令和2(2020)年5月8日、群馬県地域創成部文化財保護課(以下、県文化財保護課と言う)に対して、令和2年度以降の「公共開発関連計画一覧表」を提出した。これを受けた県文化財保護課は、県建設企画課に対し、令和2年5月25日付文財第30004-26号にて「公共開発関連計画に関する埋蔵文化財の判定結果」を発給、同書面において、事業対象地は、明和町の遺跡台帳に登録されている周知の埋蔵文化財包蔵地(明和町遺跡番号0019、古墳・奈良・平安時代の集落)に近接していることから、試掘・確認調査の必要性と、試掘・確認調査の結果、埋蔵文化財の包蔵が確認された場合には、工事に先立って埋蔵文化財発掘調査が必要になる可能性が存在することを回答した。

令和2(2020)年7月28日、県文化財保護課が埋蔵文化財の試掘・確認調査を実施し、古代の竪穴建物・土坑等を確認したため、翌令和3(2021)年1月15日付明生第259号にて明和町教育委員会(以下、明和町教委と言う)は県文化財保護課の試掘・確認調査結果に基づき、上江黒遺跡の範囲変更を県文化財保護課に申請、県文化財保護課は令和3年2月9日付文財第730-30号にて包蔵地の変更を決定した。

こうした試掘・確認調査の結果により、県文化財保護課は、事業地において遺構・遺物が検出されたことから本調査が必要と判断し、県建設企画課に宛てて回答した。

事業地では遺構・遺物が検出され、事業によって埋蔵文化財に破壊が及ぶことは明白であること、また、用地等の制約により、設計変更等による埋蔵文化財保護対応も不可能であることから、発掘調査を実施し、記録保存の措置を執ることが最も適切であるとの結論に至り、発掘調査の実施に向けて、県建設企画課、群馬県館林土木事務所(以下、県館林土木事務所と言う)、明和町教委、発掘調査を実施する公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団(以下、当事業団と称する)、地元等との協議に入った。

調整・協議の結果、令和3年度に当該地における計1244.56㎡を対象とする発掘調査を当事業団が実施することとなり、令和3年4月27日付館土第31453-1号に

て、県館林土木事務所は明和町教委に必要書類(法94条届出、添付書類)を提出、令和3年6月9日付明生第72号にて明和町教委が県文化財保護課に到達した。

発掘調査は、履行期間を令和3年7月1日～令和3年11月30日、調査期間を令和3年8月1日～令和3年9月30日の2箇月間として、実施されることとなったのである。

第2節 発掘調査の方法

1. 調査区と座標の設定

調査対象地は面積1244.56㎡で、調査区は現道に沿って東西に細長く「く」の字に屈曲する範囲である。調査対象範囲内には、沿線住宅への出入り口や水道引込線、電柱等の存在によって、やむを得ず調査が不可能だった場所もある。

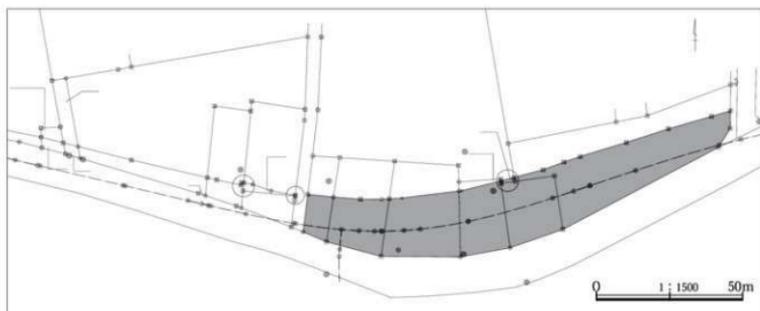
調査区は南側が、交通量の多い道路に面し、北側は宅地及び農地に接しているため、十分な安全対策を行った。

発掘調査に用いた座標は世界測地系(日本測地系2000平面直角座標第IX系)であり、10m×10mを基本とし設定した。遺構図中の座標については、座標値の下3桁を「X軸-Y軸」の順で記し、「X=23900、Y=-24500場合、「900-500」のように略記した。調査区は、世界測地系(日本測地系2011平面直角座標第IX系)のX=23870~905、Y=-24430~535の範囲にそれぞれ収まる(第6図参照)。遺構測量における遺構の位置及び遺物出土位置などはすべて世界測地系の座標によって記録しているため、本報告書でも、遺構外出土遺物を含め、遺構・遺物の位置情報については、世界測地系の座標によって表記する。

2. 発掘調査の方法

発掘調査は、調査範囲を国家座標に載せるための基準点測量から開始し、同時に事務所の設置を行った。発掘調査事務所プレハブは調査区北側に設置した。

その後、駐車場用地確保のため東半部の調査を先に行い、西半部は駐車場とした。東半部調査時の排土は、国道354号線沿いの邑栗部板倉町岩田の排土置き場まで搬出し、西半部の調査時には東半部を埋め戻して駐車場と



第2図 調査区設定図

した。

なお、調査対象地の南側は交通量の多い道路に面しているため、安全柵設置工事を外部委託した。また、調査区には、単管・トラロープで柵を設けると共に「立入禁止」「きけん」の看板を設置し、関係者以外が立ち入らないようにした。

調査範囲確定後、重機による表土掘削を開始し、重機掘削を終了した箇所から、安全を確認した上で発掘作業員を投入し、人力による鉄籠を使用しての遺構確認作業を行い、発見した遺構の掘削調査に着手した。

発掘作業員による遺構の掘り下げ等、調査の詳細な方法や手段、手順等については、遺跡掘削工事請負会社の現場代理人に逐一指示するとともに、常に安全対策を万全とし、作業の安全を十二分に図った上で実際の作業に着手するよう再三に亘って要請した。

埋没土の観察、写真撮影、測量委託業者への図化指示等は担当者が行った。

出土遺物は、遺物収納箱9箱分の土器・陶磁器・石器・石製品・金属製品等で、遺物の洗浄・注記作業は業者委託して実施した。

3. 遺構測量

遺構等の測量は、遺構断面及び平面実測図とも縮尺1/40を基本とし、竪穴建物の竈などを詳細に実測する際には適宜1/20などの縮尺とした。

遺構平面実測図の作成に当たっては、測量会社にデジ

タル測量を委託し、データ収録媒体及び打ち出し図面の提出を受けた。

遺構断面実測図は、原則として発掘現場における発掘作業員によってアナログ実測で作成されたものを元に、測量会社にデジタルデータ化を委託し、遺構平面実測図と同様、データの収録媒体およびデジタルデータによって作成された打ち出し図面の提出を受けた。

上記、委託先測量会社により作成されたデジタルデータ成果品およびアナログ実測された原因等は、調査記録として保存されている。

4. 遺構写真撮影

発掘調査において、すべての遺構の写真は発掘調査担当者が分担して撮影した。担当者により遺構全景、遺物出土状況、掘り方、土層(覆土)及び広視野での遺構写真撮影を行った。写真は、中型カメラによるモノクロフィルムと一眼レフデジタルカメラによるRAWデータでの記録化を行った。

主要な遺構については、中判カメラを用いてiso400モノクロフィルムを6×7cm判サイズで撮影し、撮影記録はネガフィルムの状態で保存し、焼き付け写真を貼付したフィルムの検索台帳を作成した。

また、発掘調査の過程で、調査の進捗状況の記録、及びすべての遺構について、デジタルカメラで撮影を行った。

また、調査記録として、遺構ごとに土層断面、遺物出

第1章 調査に至る経緯、方法と経過

土状態、遺構全景等の撮影を行い、さらに必要に応じて遺構の各部分について、検出および調査の状況について微細な接写を行っている。

なお、撮影した写真のデジタルデータはHD等のメディアに保存し、データのファイル名は、調査区・遺構略号・番号・撮影方向・内容を数値化したものに置き換えるリネーム作業を行った。

第3節 発掘調査の経過

上江黒遺跡は、邑楽郡明和町上江黒地内、東北自動車道館林インターチェンジの南西約1.5km、利根川旧河道左岸の自然堤防上に位置する。標高は約18mである。本遺跡の北から北西にかけて平成3(1991)年度に明和村(現明和町)が村道の改良工事に際して発掘調査を行い、古墳時代～平安時代の遺構・遺物が報告されている。

遺跡地は近・現代の宅地造成及び耕作により、削平を受けていたが、縄文時代から中・近世に至る、各時代の遺構が検出された。また、遺物は収納箱9箱分出土した。

中・近世の遺構としては、溝とピットが検出された。溝のうち1条からは寛永通寶が出土し、他の溝も1号溝に重複しない同様の覆土を有することから、中・近世の遺構と考えられる。また、屋敷の堀割と考えられる箱堀状の大型の溝も検出された。

古代の遺構としては、竪穴建物と井戸が検出された。出土遺物から奈良時代から平安時代の遺構と考えられる。カマドの痕跡と考えられる焼土と粘土が覆土から確認されたものもあった。

古墳時代の遺構としては、竪穴建物と検出された。出土遺物から古墳時代の遺構と考えられる。床上に焼土と炭化物が確認された遺構や床下から土師器が埋められた土坑が検出された遺構もあった。

縄文時代の遺構としては、土坑が複数検出された。そのうち2基からは縄文土器がまとまって出土した。出土遺物から縄文時代中期から後期の遺構と考えられる。

調査日誌抄

令和3年

8月2日(月)担当者2名着任。東半分を先行して掘削開始。表土掘削、

遺構検出、周辺整備。

3日(火)表土掘削、遺構確認、周辺整備。

4日(水)表土掘削、遺構確認、調査区東部の遺構 遺構種別が不明のため、サブト掘削、1号溝掘削、1号ピット平敷。

5日(木)表土掘削、サブトレンチを認定掘削し、溝と坑の判定が立ったため、トレンチを解消して掘削、1・5号溝掘削。

6日(金)1・5号溝掘削精査。

10日(火)1・2・5号溝、土坑、ピット、井戸等掘削精査。土坑のうち2基は井戸と判明。

11日(水)溝、ピット、井戸、土坑、竪穴建物等掘削精査、土層断面実測。土坑2基から縄文土器がまとまって出土。土層断面実測。方形竪穴状遺構は完掘作業の結果満(5号溝)であることが分かった。盆体中の雨に腐食をしっかりとらした。

17日(火)雨天のため待機。降りやんだため、調査区の水を排水。

18日(水)雨天のため作業中止。午前は降雨のため、待機。午後に、調査区の水抜き。周辺整備。

19日(木)遺構掘削精査、遺構検出。2・3号土坑遺物固化終了(明日取り上げ)、5号溝調査完了。

20日(金)遺構掘削、竪穴建物床面検出、2号井戸写真撮影終了。縄文土坑2基遺物固化の後、取り上げ。

23日(月)3号土坑(縄文)平敷終了、3号竪穴建物セクション(ベルト内から裏(手側部分)出土状況)写真、2号竪穴建物掘削完掘写真、1号溝セクションB写真写真撮影

24日(火)3号土坑完掘、2号竪穴建物に切られた縄文土坑・ピット完掘(未測量)、3号竪穴建物掘削写真撮影、出土遺物固化、取り上げ。

25日(水)2号竪穴建物セクション実測、3号竪穴建物掘り方掘削、2号土坑完掘。

26日(木)調査区東側全景写真撮影、3号竪穴建物掘り方セクション実測、4号竪穴建物セクション実測、全景写真撮影。

27日(金)5号竪穴建物セクション実測、14・15号ピット掘削精査、1号溝・4号井戸掘削精査。

30日(月)5号竪穴建物、15・16・17号ピット、4号井戸等完掘、全景写真撮影。

31日(火)調査区西側表土剥ぎ、調査区東側埋戻し(駐車場地確保のため)

9月1日(木)調査区西半分表土掘削。

6日(月)調査区西半分表土掘削、東半分埋戻し反し継続。

10日(金)遺構検出、サブトレンチ掘削(竪穴建物の新旧関係の把握)、北壁竪穴建物床面検出。

13日(月)南壁竪穴建物掘削サブトレンチ掘削(新旧関係の確定)床検出、北壁竪穴建物床面検出。

14日(火)北壁の竪穴建物群6号(新)・7号(旧)、南壁の竪穴建物群8号(新)・9号(旧)、竪穴建物セクション・全景写真撮影。

15日(水)6～9号竪穴建物掘り方掘削、10号竪穴建物完掘、ピット群完掘。

16日(木)6～9号竪穴建物掘り方精査、8号土坑完掘。

17日(金)調査区全景、6～8号竪穴建物掘り方完掘写真撮影。旧石器確認調査着手。

21日(火)埋戻し着手。

28日(火)現場事務所片付け。

29日(水)現地引渡。

30日(木)現場事務所解体、安全フェンス撤去、森林警察署に発掘届提出。調査終了。

第4節 整理作業の経過と方法

整理作業は、令和4年9月1日から令和5年1月31日までの5箇月間にわたって館林土木事務所の委託を受けて、当事業団が実施した。

出土遺物については、まず、報告書に掲載する土器類、石器・石製品類の選別を行い、土器類、石器・石製品類

の写真撮影、接合・復元等の作業を実施した。次いで実測・トレース及び遺物観察表の作成を行い、業務を完了した。なお、今回の調査においては木製品は出土していない。遺構実測図については、まず調査区ごとに順次、各遺構の確認、遺構計測、遺構台帳の整備といった基礎作業とともに、遺構写真との確認作業を行い、その後、図面修正を進め、点検・整理の上、平面図及び土層断面図の編集及び修正、デジタル・トレース原図の作成、土層注記の編集等の作業を行い、デジタル原稿化を行った。

さらに、報告書に掲載する遺構写真を選定した後、レイアウト原案の作成、キャプション原稿の整備等を行い、レイアウト原案及びキャプション原稿をデジタル専業班において遺構写真図版頁のデジタル原稿化を図った。

これらの作業と並行して報告書本文の原稿の執筆を進めた。

それらを経て、デジタル化された遺構図面の校正、本文の原稿執筆及び報告書原稿の総合的なレイアウト等の作業、報告書原稿全体のデジタル組版及び編集作業を行った。

作成された原稿は、落札した業者に委託され、印刷・製本の業務を実施した。なお、業者委託した印刷業務の推移の中で、原稿の校正作業を実施し、完成後、納品を受け、納品された発掘調査報告書は、検品の上、完了検査を実施し、活用に資するために関係各機関へ発送する作業を行った。

また、これらの作業と並行して、調査及び整理業務の過程で作成された遺構・遺物の各種図面・写真等の記録類を収納する作業を実施した。発掘調査及び整理業務の過程で作成された遺構・遺物関連の各種図面及び写真等の調査記録資料は、一括して群馬県埋蔵文化財調査センターに収納・保管されている。

参考文献(第1章)

- 群馬県2013『はばたけ群馬・県土整備プラン2013-2022』
 群馬県2014『はばたけ群馬プラン・第14次群馬県総合計画・重点プロジェクト(平成26年4月1日改訂)』
 群馬県県土整備部道路整備課(道路企画室)2013『群馬がはばたくための7つの交通軸構想』
 群馬県県土整備部2022『令和4年度版 よくわかる公共事業 邑楽・館林編』
 (公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2022『年報』41
 マッピングぐんま
<http://mapping.gunma.pref.gunma.jp/pref/gunma/top>

第2章 遺跡の地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境

1. 地勢

上江黒遺跡は、群馬県邑楽郡明和町上江黒481-2・481-3・484・485-2・486-2・487-2・488-2に所在している。

遺跡が所在する明和町は、群馬県の南東部、邑楽郡の東部に位置し、北は館林市に、東は板倉町に、西は千代田町に、南は利根川を隔てて埼玉県羽生市・行田市にそれぞれ接している。町の南境を利根川が、北境を谷田川が流れ、利根川に沿った東西約11km、南北約3kmの細長い形をした町である。館林都市圏、関東大都市圏に属し、総人口約11000人、世帯数約4000世帯の自治体である。明治22(1889)年の町村制施行により千江田村・梅島村・佐貫村が成立、昭和30(1955)年に3箇村合併の際に、公募により「明朗で平和な村に」という想いから新村名として「明和村」と名付けられた。平成10(1998)年に町制が敷かれた。

町域内の利根川にはかつて7箇所の渡しがあったが、現存しているのは泉道今泉館林線の千津井下の渡しのみである。

かつて、町中心部は日光街道の脇往還宿場町として栄えていた。明治36(1903)年、東武鉄道が利根川右岸に位置していた川俣駅(足利延伸時に左岸に移転)まで開業、その後、明治40(1907)年に足利町駅(現・足利市駅)まで延伸され町域にも鉄道が通った。その後、東武鉄道は明治43(1910)年に伊勢崎駅まで延伸されたが、東武伊勢崎線の開通後、宿場町は衰微した。

東京都心から約60kmと群馬県内の自治体中、最も東京都に近く、交通の便も良いことから、東京へ通勤・通学する住民も多い。1995年と2000年の国勢調査においては、群馬県の自治体の中で唯一、東京特別区部への通勤率が5%を上回る。

主産業は農業で、稲作・野菜・果樹栽培が盛んである。排水事業の進展とともに穀倉地となったが、東京都心から60km圏内にあるため郊型農業に転換し胡瓜、白菜、

トマト等の生産が多い。果樹は田島地区の梨と大輪地区の葡萄が中心で、近年千津井地区を中心に花卉園芸が広まっており、シクラメンのハウス栽培等が行われている。

また、1972年の東北自動車道館林インターチェンジの開設以降、工場の進出も増え、大佐貫地区に工業団地が造られたことによって財政は非常に豊かで、対人口資源は群馬県下上位で、2007年より交付金不交付団体となっており、財政力指数も高い。

2. 地形

現在の館林市及び邑楽郡の地形は、南側を西から東に流れる利根川と、北側を同じく西から東に流れる渡良瀬川とに挟まれ、東西方向に細長く伸びた丘陵性の邑楽台地と、その周辺に広がる低地や沼沢地から形成されている。丘陵性の台地の東側は先細りとなり、西側では太田市街地がある台地へと連なる。

群馬県北西部の大部分は山地であり、栃木県北西部の山地などから流れ出た河川のほとんどが邑楽郡の南北に集まり、雪解け期や雨期には部の大半が水で覆われていたと推測される。平安時代中期に成立した『後名聚賢抄』に掲載された邑楽郡内の郷名には「池田」、「疋太」、「八田」など、低地を意味するものが多いということも当時、至る所に池沼が散在していたであろうことを推測させる。低湿地帯における渡良瀬・利根の両河川の内側には自然堤防上の微高地があり、そこに次第に集落が形成されていった。その内側には、低湿地、微高地、低湿地が帯状に並び、低湿地の中には細長い帯状の沼地が形成された。当地は、渡良瀬川が利根川という大きな河川が合流する地点に当たったため、河水は洪水の度ごとに流路を変えたものと考えられる。現在の館林市や邑楽郡内に多く遺る湖沼は、その流路の名残なのである。湿泥田が連なって稲作が営まれ、沼地では漁業が展開した。温暖・高温で農業、漁業生産が営まれる豊かな地域であった。

当地では、古くから近代に至るまで氾濫・洪水を繰返す大河の水との戦いが続いた。それは同時に氾濫原に取

第2章 遺跡の地理的・歴史的環境

残された河川跡の湖水の悪水抜と新田開発の歴史でもあった。

本遺跡が所在する明和町は、館林台地の南側、利根川北岸の芭菜低地と称される沖積平野に立地し、標高は17.4m～21.14mである。地形は西から東に緩やかに傾斜している。洪積台地はあるが、河川の氾濫によって埋まっている。集落は利根川と谷田川の自然堤防上に立地している。

上江黒遺跡は、芭菜郡明和町上江黒地内、東北自動車道館林インターチェンジの南西約1.5km、標高約18mの利根川旧河道左岸の自然堤防上に立地している。

第2節 歴史的環境

1. 旧石器時代

明和町域では、現在までのところ、旧石器時代から縄文時代早期にかけての遺跡は発見されていない。本遺跡周辺部において旧石器時代の遺跡は、いずれも明和町域の北側、館林市域側に所在している。

館林地域の旧石器時代の遺跡は、いずれも沼を背景にした見晴らしの良い高台上に立地している。各遺跡とも石器の出土量や種類はあまり多くはなく、石器の製作や加工は行われていたものの、長期に亘って定住していたとは考えにくい。石器の出土層は、いずれも暗色帯よりも上の上部ローム層であり、始良Tnテフラ(AT)以降の後期旧石器時代の遺跡である。

いずれの遺跡においても、石器や剥片のみの出土であり、礫群や焼土、炭化物等と言った人間の生活を直接示すような痕跡は確認されていない。また、他の場所から運び込まれた石器などが見られることや、また、ナイフ形石器や小型の尖頭器が多い点も特徴として挙げられる。

(1) 埋没河岸段丘上の遺跡

館林市内高根地区の埋没河岸段丘(館林古砂丘)上に立地する旧石器時代の遺跡としては、本遺跡の北西約8.5kmに位置する水溜第1地点遺跡(第4図範囲外)、同じく水溜第2地点遺跡(第4図範囲外)、本遺跡の北西約7.5kmに位置する山神脇遺跡(第4図範囲外)等が確認されている。いずれも少人数の比較的滞在期間が短いキャンプ

地的なものであったと考えられている。

一方、山神脇遺跡は、水溜第1・第2地点遺跡と同様、短期間のキャンプ地であったと考えられるが、若干の性格の違いが有るように見受けられる。

(2) 城沼南岸の遺跡

本遺跡の北西約2.4～3kmに位置する大袋Ⅰ遺跡(第4図44)、大袋Ⅱ遺跡(第4図45)は城沼南岸の広い高台上に立地している。

大袋Ⅰ遺跡(第4図44)は、現時点において市内において唯一、旧石器時代の人々の生活痕跡を面的に捉えることが出来た遺跡で、少し大きな集団のベースキャンプ的な遺跡と考えられる。尖頭器や細石刃が出土していることから、後期旧石器時代の最終段階のものと考えられる。

大袋Ⅱ遺跡(第4図45)は、大袋Ⅰ遺跡の小支谷を隔てて南西側に隣接しているが、出土した石器の量や種類は少なく、その性格は明らかではない。

(3) その他の遺跡

本遺跡の北西約4kmに位置する笹原遺跡(第4図範囲外)は、茂林寺沼西岸の広い高台上に立地している。ナイフ形石器が単体で出土している他、数点の2次加工が有る剥片が出土した。

本遺跡の北西約5.6kmに位置する北小袋遺跡(第4図範囲外)は近藤沼の谷頭東岸の広い高台上に立地し、チャート等の剥片の小さなまとまりや、黒曜石製の尖頭器の出土が確認されている。他に、剥片や礫が出土している。

本遺跡の北西約1.3kmに位置する間堀Ⅰ遺跡(第4図70)は、蛇沼の東岸の最も高い場所に立地している。

2. 縄文時代

館林市内では多寡はあるものの、縄文時代前期から後期を中心に、人々が生活を営んでいた様子が判明している。縄文時代各時期の遺跡は、各池沼や河川など低地や湿地を望む台地上に立地しているケースが多く、この地域を特色づける池沼、河川、湿地などの存在が集落形成に大きくかかわっていたことわかる。

(1) 縄文時代草創期の遺跡

館林市内では、この時代の遺跡は未だ確認されていない。本遺跡から北西に約2.4kmに位置する大袋Ⅱ遺跡(第4図45)、本遺跡から北西約4.2kmに位置する加法師遺跡

(第4図範囲外)からは縄文時代草創期と考えられる石器が出土しており、今後、これらの遺跡の周辺において縄文時代草創期の遺跡が発見される可能性がある。

(2) 縄文時代早期の遺跡

館林市内では、この時期の集落や竪穴建物は未だに見出されていないが、本遺跡の北西約5.2kmに位置する北小袋遺跡(第4図範囲外)や本遺跡の北西約3kmに位置する下堀工遺跡(第4図範囲外)からは尖底土器や燃糸文が施された丸底の土器片が出土している。また、前掲の大袋Ⅱ遺跡(第4図45)からは、早期末の茶痕文系土器が出土したのが確認されておられ、この時期において人々の生活の営みがあったことが知られる。

(3) 縄文時代前期の遺跡

良く知られているように、縄文時代の早期から前期にかけての時期には気候の温暖化が進み、全国的に縄文海進と呼ばれる海面上昇がみられた。利根川中流である邑楽郡の周辺には標高10～20m内外の低湿地があり、板倉町板倉から海老瀬の台地にかけて淡水産及び海産の貝類が出土する貝塚が約10箇所発見されている。本県のような内陸部では、海産貝類が出土するような貝塚が発見されることはまずない。殆どが縄文時代早期末から前期にかけてのもので、当時は、東京湾が現在の群馬県板倉町から埼玉県加須市付近まで入り込んでいたことを示している。奥東京湾の最奥の貝塚群として知られている。貝塚からは貝類のほかにはシカやイノシシの骨、人骨なども発見されている。

明和町内の遺跡 明和町内では谷田川と利根川に挟まれた南傾斜地に立地し、本遺跡の南東約1.25kmに位置する斗合田稲荷塚遺跡(第4図2)から、縄文時代前期から後期にかけての集落が検出され、土器や石斧等の遺物が出土している。

館林市内の遺跡 館林市内において縄文時代前期の遺物が出土する遺跡は市内各所にある沼辺の高台に立地している。特に城沼周辺に集中しており、前掲の大袋Ⅱ遺跡(第4図45)からは縄文時代前期の竪穴建物が7棟検出されており、集落が営まれていたことが判明している。

渡良瀬遊水地と館林の城沼との距離は約10kmで、当時の館林地帯は、河川の河口に近い場所であったと考えられる。大袋Ⅱ遺跡(第4図45)をはじめとする城沼周辺の遺跡は現在の城沼の西面から約3～5m程度高く広い台

地上に立地しているが、集落の周辺には沼地や小河川、それに続く低湿地が広がっていたものと考えられる。

大袋Ⅱ遺跡では、竪穴建物群は城沼の沼地から続く小支谷に面した台地の縁の頂部に沿うように展開している。台地中央部からは竪穴建物は検出されておらず、広場として使用されていた可能性が考えられる。集落の範囲は、東西約100m、南北約160mの範囲に及んでおり、3次に亘る変遷を想定出来る。検出された7棟の竪穴建物は、いずれも概ね長方形を呈し、屋内に炬が設置されている。

なお、大袋Ⅱ遺跡から小支谷を隔てた北側に立地する前掲の大袋Ⅰ遺跡(第4図44)や、本遺跡の北西約1.7kmに位置する間堀Ⅰ遺跡(第4図70)などからは、竪穴建物は検出されていないものの数箇所の遺物集中箇所が確認されている。

(4) 縄文時代中期の遺跡

縄文時代中期は、前期から続く温暖な気候を反映して人口が増大した時期で、全国的に見ても遺跡数は前期よりも増え、各地で大型の集落が発見されている。館林地帯においても竪穴建物数は増大している様子が看取出来る。縄文時代中期の竪穴建物は、基本的には円形ないし楕円形状を呈し、中央のやや奥まった位置に炬が設けられている。また、貯蔵穴と考えられる袋状土坑が検出されている。

明和町内の遺跡 本遺跡の北西約4.5km、町北西部の谷田川右岸の位置する矢島遺跡群(第4図範囲外)において当時の明和村教育委員会が発掘調査を実施し、縄文時代中期末の集落が検出された。同遺跡からは縄文時代中期～晩期の深鉢型土器、壺型土器、貝輪状土製品、土板、石剣、石棒、石皿等が出土した。その後、同遺跡を千葉大学文学部考古学研究室が発掘調査し、縄文時代晩期の竪穴建物と平安時代の竪穴建物が検出された。さらにその後、送電線鉄塔建設に先立って村教委が発掘調査を実施し、縄文時代中期から晩期にかけての土器や石器等が出土した。また、遺跡の隣接地におけるガス輸送管埋設工事に先立って行われた調査では、縄文時代中期後半から晩期にかけての土坑、炬等が検出され、深鉢などの土器片、石器類等が出土した。

また、先述したように斗合田稲荷塚遺跡(第4図2)でも中期の集落が検出されている。

館林市内の遺跡 館林市内では、前掲の、蛇沼東岸の台地上に立地する間堀1遺跡(第4図70)では、東西約250m、南北約200mの範囲内から2棟以上の竪穴建物が検出された。

同じく前掲の加法師遺跡(第4図範囲外)は、渡良瀬川の沖積地を望む芭楽台地上から斜面にかけての東西約300m、南北約100mの範囲から20棟以上の竪穴建物が検出された。本遺跡からは床面を掘り窪めただけの地床跡ばかりではなく、埋裏¹⁾や石囲²⁾が検出された。

両遺跡とも、周辺の低地との比高は約1～3mで、縄文時代前期の遺跡に比べると低い位置にも形成されるようになってきている。集落の範囲も前期の集落よりも大きくなっているのが特徴である。集落を営む場所や規模が、自然環境がもたらした人口増加に伴って変化したことが解る。

縄文時代中期の遺跡からは多量の遺物が出土する傾向があり、間堀1遺跡及び加法師遺跡においても膨大な量の土器・石器等が出土した。特に石鏝や土鏝の出土が多く見られ、周辺の河川や沼沢において漁撈を行っていた様子が窺える。

(5) 縄文時代後・晩期の遺跡

縄文時代後期になると、それまで温暖だった気候は寒冷化に向かい、全国的にも遺跡数は減少傾向となる。館林地域においても同様の傾向にあり、縄文時代後期から晩期にかけての遺跡は少ない。この時代の遺跡は台地上面から少し下がった斜面から低地にかけて発見される事例が多い。

明和町内の遺跡 先述の通り明和町西北部に位置する矢島遺跡群(第4図範囲外)からは縄文時代晩期の竪穴建物と遺物が出土している。また、同じく先述の通り斗合田稲荷塚遺跡(第4図2)でも晩期の集落が検出されている。

館林市内の遺跡 館林市内では、本遺跡の北西約2.1kmに位置する大原道東遺跡(第4図72)、本遺跡の北西約1.1kmに位置する上ノ前遺跡(第4図68)では、大量の土器が台地斜面から沖積低地にかけて出土している。

芭楽・館林台地の北辺、本遺跡の北西約6.3kmに位置する岡遺跡(第4図範囲外)からは竪穴建物の一部が検出された。また、同じく、芭楽・館林台地の北辺、本遺跡の北西約6kmに位置する大街道遺跡(第4図範囲外)から

も大型土器が纏まって出土したが、竪穴建物は検出されなかった。

この他、芭楽・館林台地の南辺、本遺跡の北東約1kmに位置する道満遺跡(第4図17)や、多々良沼の東岸の館林古砂丘上に立地し、本遺跡の北西約5.4kmに位置する松沼町遺跡(第4図範囲外)でもこの時代の遺物が出土している。

3. 弥生時代

明和町内の遺跡 明和町域における弥生時代の遺跡は極めて少ない。本遺跡の東約1.5kmの斗合田地区において、弥生時代の遺物が採集されている程度である。

館林市内の遺跡 館林市内においても弥生時代の遺跡は非常に少なく、当時の人々の生活の様相を明らかにすることは困難である。

前掲の、城沼南岸に立地する大袋1遺跡(第4図44)以外の遺跡は、いずれも洪積台地に連なる一段下がった微高地上から検出された。

谷田川左岸の微高地上に立地する前掲の道満遺跡(第4図17)からは、集落を囲む溝、竪穴建物、方形周溝墓などが発見され、集落と墓域の一部の様子が判明した。

前掲の大袋1遺跡からは壺型土器の頸部片が出土した土坑が検出された。

4. 古墳時代

(1) 古墳

館林・芭楽地域では、西側の太田市域、北側の足利・佐野市域に比べて古墳数は概して少ない。位置的には利根川、谷田川、矢場川沿いに集中している。この地域における古墳の造営は、大泉町・千代田町では5世紀後半、館林市では6世紀前半に始まり、7世紀まで続いていたと考えられている。なお、本遺跡の北東約6kmに位置する板倉町の赤塚古墳(第4図範囲外)は、4世紀中頃に造営されたと見られる小型の円墳ないし前方後円墳で、三角縁神獣鏡や、中国製の刀身に倭国の指えを装着した鉄大刀が出土しており、この地域では屈指の古い時期の古墳として、また、特異な出土遺物を有する古墳として注目されている。渡良瀬川流域の開発に力を振るった有

力な在り地首長の墳墓と考えられる。

館林・邑楽地域の5世紀後半から6世紀前半の古墳は、利根川北岸の大泉町、千代田町に集中している。

大泉町の古海岸前1号墳(第4図範囲外)からは径20.9cmの画文帯同向式神鏡が出土している。この鏡は倭の五王が中国南朝の宋の皇帝から下賜され、各地の有力首長に分賜された鏡の一つと考えられている。同型の踏返鏡は、栃木県宇都宮市雀宮牛塚古墳から熊本県和水町江田船山古墳まで、全国で26枚出土している。古海岸前1号墳の被葬者は倭王権からみて銅鏡を下賜されるに値する存在であった在り地有力豪族ということになる。

また、同じく大泉町の古高徳寺古墳(第4図範囲外)からは六鈴内行花文鏡と三環鏡が出土している。

明和町の古墳 明和町域では本遺跡の南西約0.2kmには直径10m程の江黒古墳(第4図82)があり、墳丘の保存状態もよく、町の史跡に指定されている。

また、本遺跡の西約1.35～2kmには斗合田富士塚古墳(第4図7)、斗合田愛宕塚古墳(第4図8)、斗合田薬王寺古墳(第4図9)等がある。本遺跡の西約1.3kmに位置していた斗合田稲荷塚古墳は、昭和29(1954)年に群馬大学が発掘調査を行い、古墳時代終末期7世紀後半の横穴式石室を有する古墳であることが判明したが、町の開発行為に伴って令和2(2020)年に撤去された。

館林市内の古墳 昭和13(1938)年に刊行された『上毛古墳総覧』には、現在の館林市域において67基の古墳が掲載されている。昭和57(1982)年から62(1987)年にかけて館林市教委は市内の遺跡分布調査を実施し、25基の古墳と7箇所の推定地が確認された。

館林市内における古墳は、渡良瀬低地を望む台地上、鶴生太川の浸食谷を望む台地上、利根川・谷田川低地を望む台地上など、いずれも低地を望む台地の縁辺部に築造されている。

館林市多々良地区の古墳 館林市北西部の多々良地区では日向古墳群と高根古墳群の2つの大きな古墳群がある。

日向古墳群(第4図範囲外)は本遺跡の北西約8kmに位置し、矢場川に流れ込む多々良川の東の洪積台地上に立地している。矢場川を挟んだ対岸には栃木県足利市瑞穂野地区には中日古墳群が有り、日向古墳群との関連が考えられている。

本遺跡の北西約6～7kmに位置する高根古墳群(第4図範囲外)は、多々良沼東部に連なる埋没河岸段丘(館林古砂丘)の北端部に位置している。その内の、本遺跡の北西約7kmに位置する全長約58mの前方後円墳である天神二子古墳(第4図範囲外)、本遺跡の北東約1.25kmに位置する測ノ上1古墳(第4図19)では発掘調査が行われ、埋葬施設の状態や出土した埴輪の年代観からいずれも6世紀後半頃のものと考えられている。

高根古墳群の内1基である天神二子古墳は、『上毛古墳総覧』に多々良村第4号と記載される古墳で、標高約25mの埋没河岸段丘の台地上に立地する全長58mの前方後円墳である。昭和37(1962)年と昭和46(1971)年に発掘調査が行われ、埋葬施設の粘土郭の一部が検出され、円筒埴輪、形象埴輪が出土した。

谷田川沿いの市内東南端、本遺跡の北東約1.2kmに位置し、谷田川左岸の標高約18mの台地上に造営された測ノ上1古墳は、『上毛古墳総覧』には記載されていない古墳で、墳丘は後世に完全に削平されてしまっている。昭和63(1988)年に市教委によって発掘調査が行われ、権名山二ツ岳から噴出した角閃石安山岩が使用された横穴式石室が検出された。また、鉄大刀、金環、鉄鏝、鉄製馬具、円筒埴輪、形象埴輪が出土した。

館林市赤羽地区の古墳 一方、市城南東部の赤羽地区にも多くの古墳が見られる。

本遺跡の北約2.1kmの城沼南岸の標高約20mの台地上には全長65.8mの前方後円墳であった富士山古墳(第4図53)がある。『上毛古墳総覧』に赤羽村第1号と記載されている。前部分は昭和初期に削平されたが、かつては市域最大の古墳で、埴輪が出土していないことから、埴輪生産が終焉した7世紀前半のものと考えられる。

その対岸、城沼北岸の台地上には、館林市内において最も良く墳丘の形態を遺す山王山古墳(第4図範囲外)がある。『上毛古墳総覧』に郷谷村第1号と記載されている古墳である。本遺跡の北約4kmに位置し、城沼北岸の標高18.5mの台地上に立地する全長約40mの前方後円墳で市史跡に指定されている。明治41(1908)年に前部分が発掘調査され、横穴式石室が確認されたと記録に残るが、埋葬施設が前部分から検出されたという点に疑問が残る。昭和59(1974)年に古墳の保存整備に伴って発掘調査と墳丘の測量が行われ、6世紀後半の円筒埴輪が出土し

た。また、出土遺物と伝えられる鉄大刀が市内の善長寺に保存されている。

(2) 集落

邑楽部は利根・渡良瀬の両川に挟まれた平地で、古来度重なる洪水の度に土砂が運ばれ、自然堤防の小高い丘陵が出来、そこに人々が居住し、荒地や原野を開墾して耕地を広げ、集落を形成していったのである。

明和町内の遺跡 明和町域では、平成2(1990)年に江黒古墳付近の道路拡張工事に伴い上江黒遺跡(第4図1)を発掘調査したところ、古墳時代の石器や土器等遺物が発見された(明和村教委『上江黒遺跡発掘調査概報』1996)。

館林市内の遺跡 これまで館林市内における古墳時代の集落遺跡としては、19箇所が市の遺跡台帳に登録されている。館林市内の古墳時代の集落遺跡は、古墳時代前期から中期の集落が少なく、古墳時代後期になると集落の数が増加し、大規模な集落も出てくる。古墳時代の大規模な集落は邑楽台地の北縁辺(旧矢場川南岸)と邑楽台地の南縁辺(谷田川北岸)のそれぞれ台地上に位置している。台地上に集落が営まれ、その周辺の低地では水田耕作が行われていた様子が窺える。この地域においては、古墳時代後期になって本格的な開発がすすめられ、律令制下の邑楽郡に発展していったものと考えられる。

館林市内及び周辺の古墳時代前期集落 館林市内における古墳時代前期の集落としては、前掲の加法師遺跡(第4図範囲外)、前掲の道満遺跡(第4図17)、本遺跡の北約2kmに位置する大袋4遺跡(第4図54)、本遺跡の北西約8.2kmに位置する大島下悪途遺跡(第4図範囲外)などがある。

館林市内の加法師遺跡、大島下悪途遺跡、道満遺跡、大泉町の御正作遺跡などからはハレス壺やS字状口縁台付甕が出土しており、東海地方からの強い影響を受けた人々による集落と考えられている。

館林市内の道満遺跡や大泉町の御正作遺跡では、集落の中央に方形・円形の周溝墓や礎床墓が検出されており、集落の人々を統率した首長の墓と考えられる。御正作遺跡からは多数の土器と管玉、手捏土器が集積した祭祀場が検出されている。

館林市内の古墳時代中期集落 5世紀中頃になると館林・邑楽地域においても竪穴建物の窟が普及するようになり、土師器甕は竈に架け易いよう長胴化していく。

なり、土師器甕は竈に架け易いよう長胴化していく。

古墳時代中期の集落としては、前掲の加法師遺跡(第4図範囲外)、大島下悪途遺跡(第4図範囲外)、本遺跡の北西約6kmに位置する高根・外和田遺跡(第4図範囲外)、本遺跡の北西約4.8km、旧矢場川南岸の台地上に立地する八方遺跡(第4図範囲外)などがある。

館林市内の古墳時代後期集落 古墳時代後期になると館林市内においても検出される竪穴建物の数は多くなり、集落は大規模になってくる。

館林市内における古墳時代後期以降の大集落が検出された遺跡としては、本遺跡の西北西約5kmに位置する近藤沼北岸の台地上に立地する北近藤第1地点遺跡(第4図範囲外)、前掲の八方遺跡(第4図範囲外)、前掲の加法師遺跡(第4図範囲外)、本遺跡の北北東約3.7kmに位置する当郷遺跡などがある。

5. 奈良・平安時代

(1) 邑楽部の成立

明和町の地は古代には邑楽部に属していた。邑楽部の前身である評の立評は、おそらく他の評と同様、7世紀中葉頃のこと、大宝令制により郡制となったものと考えられる。

大荒城評から邑楽部へ 上野国邑楽部の史料上の初見は、『続日本紀』神護慶雲3(769)年4月27日条の「邑楽部人外大初位上小長谷部宇麻呂が伴部という姓を賜った」との記事である。

奈良県橿原市の藤原宮跡から出土した荷札木簡の削刷に「大荒城評胡麻・・・」と記されたものがあり、評制時代の評名は「大荒城」と表記され、「おあらし」或いは「おはらし」と称されていたものが、『続日本紀』和同6(713)年5月2日条に見える「諸国の郡郷名には良い字を付けよ」との命(明記されていないが、「好字」の使用にとどまらず「二字」表記への統一も併せて命じられたものと考えられている)によって、「邑楽」の部名表記が定着したと考えられる。

『延喜式』民部省式では、版本では「ヲハラキ」、九条家本では「オホアラキ」と訓じている。天正19(1591)年、佐貫庄田島之郷の検地帳(奈良文書)にも「大荒木部」と記されているところから見るならば、現在の「おうら」という

呼称は、近世以降に定着したものと考えられる。

邑楽部家 なお、邑楽部の部家の遺構は、未だ発見されていないが、大泉町の北西端の太田市との市町境近くに「古米」の地名があり、音が「古部」に通じるところから、部家の故地ではないかと考えられている。なお、付近に所在する専光寺付近遺跡からは8世紀後半の土師器底部外側に「邑上厨」と記された墨書土器が出土しており、邑楽部家の厨家に関連する墨書土器と考えられ、付近に部家の存在を裏付ける資料として注目されている。

また、上野国府に近接した場所に当たると考えられている前橋市元総社町の元総社寺田遺跡からは、須恵器杯の底部外面に「邑厨」と墨書された土器が出土している(群馬県埋蔵文化財調査事業編『元総社寺田遺跡』1、1993年、高島英之『古代出土文字資料の研究』、東京堂出版、2000)。上野国府で行われた何らかの行事にかかわる饗宴に際して国内の邑楽部家の厨家が動員されたことに伴い、邑楽部家所属の厨家の土器が上野国に持ち込まれた結果、同地で出土したものと考えられる。

邑楽部 平安時代中期に編纂された『倭名類聚抄』によると、邑楽部は「池田」、「正太」、「八田」、「長柄」の4郷からなる小部であった。

池田郷 池田郷の故地は全く不明であるが、平成27(2015)年3月に刊行された『館林市史通史編1 原始古代・中世』では、邑楽台地の北西部、松本古墳群が所在する邑楽町石打から高根古墳群を含む館林市域を想定している。

正太郎郷 正太郎についても、前掲『館林市史』では「特定は難しい」としながらも邑楽台地東縁部から低地部を含む板倉町一帯を比定している。

なお、大泉町の仙石山遺跡からは、9世紀頃のものと思われる土師器杯の体部外面に「正太」と記された墨書土器が出土している。

八田郷 八田郷の「八田」の地名は、現在、谷田川にその名が残り、流域のいずれかの地と考えられている。

『上野国神名帳』の邑楽部の項の2番目に掲載されている「三位八田明神」が郷内に鎮座していたものと考えられるが、現在、邑楽部内に八田明神を称する神社は存在しておらず、その位置は不明である。

前掲の『館林市史』では、千代田町赤岩の堂山古墳付近から谷田川沿いに東へ延びる利根川の自然堤防と後背

低地とその対岸の邑楽台地南縁部が想定出来るとしている。本遺跡はこの八田郷の故地に所在しているものと考えられる。

長柄郷 長柄郷は、『上野国神名帳』にみえる「邑楽部正一位長柄明神」に因む地名と言われている。同社は、長柄首氏が奉斎したと言われ、後世、藤原氏を称する在地豪族によって藤原長良が祀られ、従来の長柄社と音が通じるところから混同され、「長柄」、「長良」の社名を有する両社が混在し、ときには一社の祭神として祀られるケースも少なくない。

『上野国神名帳』の邑楽部の項では筆頭に「正一位長柄明神」と記されているので、同社は部家所在地付近に存在していたと考えるべきだとする見方がある。先述したように邑楽部家の遺構は全く検出されていないが、遺存地名から見て、大泉町北西端に位置する古米地区が部家所在地と想定されている。

邑楽台地に西南部で、西縁は太田市街地中央部を南北に流れる八瀬川周辺と推定される。

(2) 万葉歌に見える邑楽部の景観

『万葉集』巻14東歌の上野国歌には、「上毛野 可保夜が沼のいはら曼 引かば濡れつつ 吾をな絶えそね」(3416)という一首がある。明和町大輪の、江戸時代に行われた谷田川開削工事に伴って干拓された大輪沼の跡地に遺る「久代谷(くよや)」と呼ばれる地名が、この万葉歌にみえる「可保夜」の語が転訛したと見る説があり、現在の明和町に関わる歌ということになる。また、『万葉集』東歌上野国歌の中には、「上毛野 伊奈良の沼の大藪草よそに見しよは今こそ勝れ」(3417)との歌があり、この歌に詠まれた「伊奈良の沼」板倉町中央部にかつて存在した板倉沼に充てる説が有力であり、古代邑楽部内の沼沢の情景が窺える。

(3) 集落遺跡

古代邑楽部内における集落遺跡は台地の縁辺に立地するものが多い。邑楽部西部の大泉町では古墳時代後期から平安時代にかけての数百棟にも及ぶ竪穴建物が出土された大規模な集落遺跡がいくつも調査されている。

本遺跡周辺で行われた遺跡分布調査によって、本遺跡周辺においても奈良・平安時代の遺物の散布地が数多く発見されているものの、実際に確認された遺構は少ないのが現状である。

第2章 遺跡の地理的・歴史的環境

本遺跡周辺における奈良・平安時代の拠点集落の遺跡は、未調査の部分に存在していたものと見るより他に無いようである。

明和町内の遺跡 明和町内では、本遺跡の西約0.5kmに位置する江黒坂戸遺跡(第4図3)が町の遺跡台帳に奈良・平安時代の遺物散布地として登録されている。

館林市内の遺跡 館林市及び邑楽部内では、古代の官衙、寺院等の遺跡は、現在までのところ本遺跡に比較的近い館林市の中部および東部では、大きく南北に2分される。

北側では、蛇行を繰り返す旧渡良瀬川の河道に沿って散在しているが、概ね奈良・平安時代の竪穴建物は希薄である。

南側では、1～数棟の奈良・平安時代の掘立柱建物や竪穴建物が検出された遺跡はあるものものの拠点的な集落の遺跡は検出されていない。古墳時代後期には90棟近くの竪穴建物が検出された前掲の館林市の北近藤第1地点遺跡においても、奈良・平安時代の竪穴建物は僅かに1棟しか検出されていない。

6. 中世

中世の邑楽部では、郡域に佐貫荘が立荘され、佐貫荘は成立後に、西側の上佐貫荘、東側の下佐貫荘に分かれる。西側の上佐貫荘には、12世紀末頃までには郡名を冠する伊勢神宮領邑楽御厨が成立(現・大泉町域)し、東側の下佐貫荘は、永仁元(1293)年に伊豆山権現(現・静岡県熱海市)に荘内板倉郷を寄進された佐貫荘(館林市を中心に邑楽町、千代田町、明和町、板倉町)があり、さらに一部ではあるが足利荘に属する地域も存在していた。

(1) 伊勢皇大神宮領邑楽御厨

邑楽御厨の成立 建久3(1192)年の『神宮雜書』の中に「邑楽御厨は往古の建立なり」とあることから、すでに平安時代には邑楽部西部を中心に神宮領邑楽御厨が成立していたものと考えられる。正平15(1360)年の『神威抄』には「邑楽御厨布五十段歩十六丁」とあり、56町の田数で布50反を納めていたとされる。このように中世には、邑楽部の西部は邑楽御厨に、その他は佐貫荘に入った。佐貫荘は、永仁元(1293)年に伊豆山権現に寄進されている。

鎌倉時代 『吾妻鏡』元暦元(1184)年条には佐貫広綱の名がみえる。赤岩郷(現・千代田町)の佐貫四郎広綱は、平

家追討の功によって地頭職に補されると、文治4(1188)年に現在の館林市南部に当たる青柳に館を構え、その一族郎党は佐貫荘内に威を振るった。地蔵信仰板碑としては県内最古といわれる千代田町赤岩の光恩寺の文永8(1217)年銘板碑や、鎌倉時代の作と推定される半丈六の阿彌陀三尊像、板倉町岩田の内満寺観音堂本尊手観音像などはいずれも佐貫氏一族の寄進にかかるものと伝えられる。

室町時代前期 室町期になるとこの地域においては、佐貫氏の支族である舞木氏、さらにはその被官であり、同じく佐貫氏の支族と称する赤井氏などが台頭する。邑楽御厨は、佐貫氏、舞木氏、赤井氏が現地支配を委任されていたものと考えられるが、詳細は不明である。

富岡氏による支配 戦国時代に入ると下野国の豪族である小山氏の一族にして下総結城氏の子孫で、下野国在野荘内阿曾沼郷内の富岡に所領を有する富岡氏が入部して小泉領を形成し、支配権を確立した。小泉城(第4図範圍外)は、邑楽台地の北西部に位置しており、方約100m規模の本丸と方約300mの二の丸とを回字状に巡らせ、その外側に総曲輪を置く構造で、堅固な構えをとっている。毛呂権蔵の『上野国志』には「結城氏朝臣長子七郎持朝父子結城戦場に戦死す。持朝が子、小太郎持光逃れて上州甘栗郡富岡に隠れ、富岡主税令と号す。延徳元(1489)年己酉始て小泉に城を築いて移住す。」と見えるが、真偽のほどは不詳で、前述したようにこの富岡氏は、下野国出身で、富岡の苗字は下野国内の地に由来している可能性が高い。ただ、小泉城は、下総結城氏系の人物による築城の可能性は十分に考えられる。

城主富岡氏に関する記録は「富岡家文書」として残る。富岡氏は96点に及ぶ大量の文書を残しており、戦国動乱期における富岡氏の動静を知ることが出来る。それらによると富岡氏は、永禄5(1562)年から同10(1567)年にかけては上杉氏に従っていたことが判明するが、永禄12(1569)年8月には富岡家当主富岡清四郎秀親は北条氏政から「上郷」支配を任ざされており、さらに天正12(1584)年6月14日には北条氏直から館林領・新田領内の所領21箇所を宛行われ、小田原北条氏に従っていたことがわかる。

丁度、この時期は、北条氏による上野国の支配体制がほぼ確立した時期に該当しており、小泉城に拠った富岡

氏による支配も、北条氏支配下において確立したものと考えられ、堅固に修築した城構はこの時期に北条氏系の城郭修築技術によって整備されたものと考えられている。

富岡氏は小泉城を拠点とし、上杉、武田、北条らの三つ巴の争覇を生き延びたが、近世大名へと転身することは叶わなかった。

(2) 佐貫荘

佐貫荘の成立 本遺跡の所在地は、中世には佐貫荘に含まれている。

佐貫荘の起こりは11～12世紀頃、在地豪族佐貫氏が、自領を開墾したことに始まると言われているが、いかなる本所、領家に属したものであるのかについては、現在もなお定かではない。

『吾妻鏡』に拠れば、上野国邑楽郡赤岩郷(現代田町)の住人である佐貫広綱が、平家追討の功によって鎌倉幕府より地頭職に補され、治文4(1188)年に現在の館林市南部に当たる青柳の地に居館を構えたこと、長楽寺文書に拠れば、その一族郎党が佐貫荘内に分派繁栄したことが知られる。地藏信仰板碑としては県内最古といわれる千代田町赤岩の光恩寺にある文永8(1271)年の伝弘法大師彫板碑や、鎌倉時代の作と推定される半丈六の阿弥陀三尊像、板倉町岩田の円満寺観音堂本尊の千手観音像などはいずれも佐貫氏の寄進にかかるものと伝えられる。佐貫氏は家伝文書を遺しておらず、佐貫氏のことを知るには他の文書の断片的な記述に頼らざるを得ず、全容を知ることが困難である。

このように、中世には、邑楽郡の西部は邑楽御所に、その他は佐貫荘に入った。佐貫荘は、先述したように、永仁元(1293)年に伊豆山権現に寄進されている。

支配者の変遷 鎌倉幕府と北条得宗家の滅亡に伴って惣領家の佐貫氏は姿を消し、支族の舞木氏が室町幕府の支配下において当地にて活躍するようになる。舞木氏は上州白旗一揆のリーダーとして邑楽郡の地に威勢を振るったが、やがて下剋上によって家臣の赤井氏に実権を奪われ、戦国期にはこの赤井氏が活躍する。赤井氏は丹波国赤井を苗字とし、足利・上杉両氏に従って上野国佐貫荘に下向したと考えられているが、詳細は不明である。

中世文書に見える室町期の佐貫荘 なお、応永4(1397)年、佐貫荘羽織村(現・館林市)大袋の住人九弥九郎は、知

行所の「江黒郷之内御堂かいたの在家」を世良田(現・太田市)の了清に売渡しており(同年12月25日「弥九郎在家売券写」正文書)、江黒郷近藤原村が同33年12月19日の青柳綱政高売券写(同文書)他にも見えている。

戦国期佐貫荘の変遷 享徳5(1456)年1月27日、岩松持国は足利成氏より下野佐野荘、武蔵太田荘の敵を討つために当地への出陣を命じられている(「足利成氏書状写」正文書)。

永禄3(1560)年以後の上杉謙信の関東侵攻に対して、赤井氏は小田原北条氏方として抵抗を続けていたが、永禄5(1562)年に上杉謙信が館林城を攻略し、落城。城主赤井氏は館林城を退去した。その後、謙信配下の長尾景長が佐貫荘の支配を命じられて館林城に入城した。

天正13(1585)年、館林城は小田原北条氏によって落城せられ、城主長尾景長は下野国足利に退去させられた。

小田原北条氏支配下の館林城主には、新たに小田原北条氏連枝の北条氏規がなったが、事実上の城主はその重臣南条則親であった。しかし南条則親も天正18(1590)年、豊臣秀吉による小田原城攻略に伴い、豊臣方の石田三成及び長束正家軍に敗れ、館林城は落城、小田原北条氏による支配に終符が打たれた。

(3) 邑楽郡内の中世城館

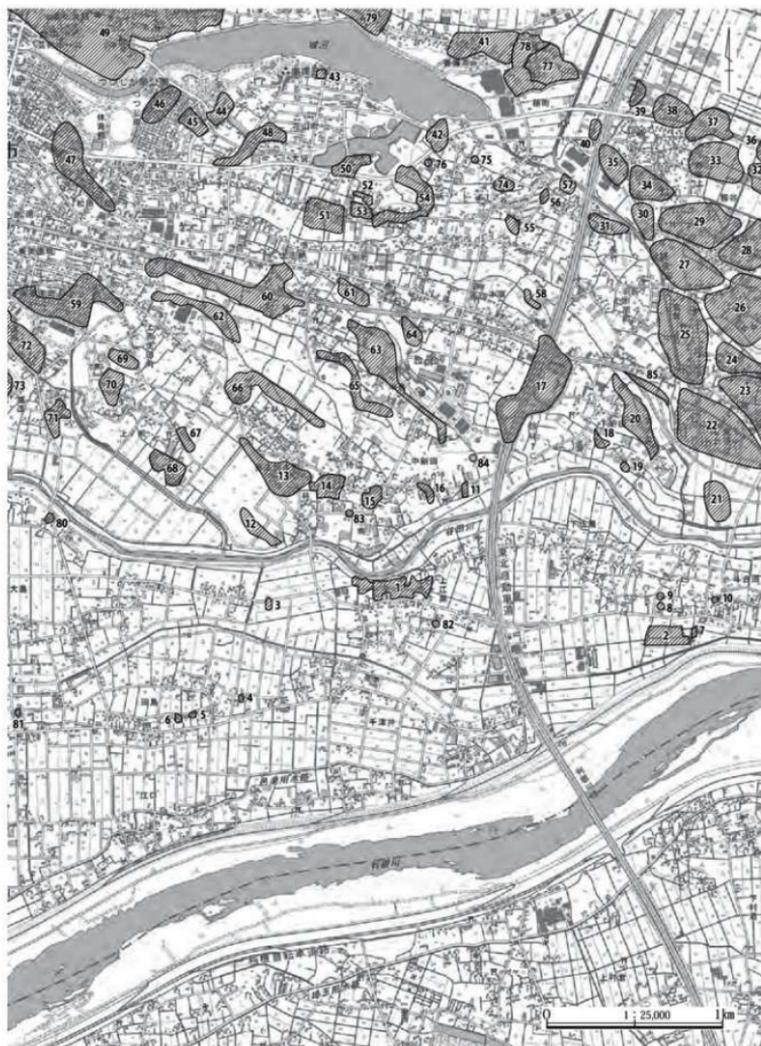
本遺跡の周辺にはいくつかの中世城館遺跡が点在している。ただし、その殆どは発掘調査されておらず、全容が不明なものが多い。

邑楽郡内の中世の城館跡としては、大泉町の小泉城、仙石城、邑楽町の鶴城、千代田町の赤岩城・舞木城、本遺跡の西南西約4kmに位置する明和町の大佐貫館(第4図範囲外)などがあ

館林市内の城館 館林市内では、軍事的な色彩が強い水辺の城館と、集落と結びついた地域における政治拠点である台地上の城館とに分けられる。

本遺跡の北西約3.1kmに位置する館林城(第4図49)の史料上の初見は文明3(1471)年で、その頃に在地豪族赤井氏によって築城されたと考えられている。城沼に張り出した台地上に立地し、城沼南岸の大袋城(第4図50)や南山屋敷(第4図51)などと連動していたものと考えられる。

館林城や大袋城では一部において発掘調査がなされているが、調査範囲が狭く、中世の様相にはまだ不明な点が少ない。大袋城ではこれまでに4度にわたって発



第4図 周辺の遺跡
(国土地理院25,000分の1地形図「館林」(平成14年9月1日発行)を加工)

掘調査が行なわれ、土塁や堀の一部、溝、井戸などの遺構が検出されている。堀は、小田原北条氏の城館に特有な隙子堀であった可能性が判明し、小田原北条氏の支配下だった時期があることは明らかであるが、築城当初はそれよりも遡るようで、築城者などについても不明な点が多い。

7. 近世・近代

館林藩の成立 天正18(1590)年、徳川家康の重臣である榊原康政が上野国邑楽・勢田及び下野国梁田の3部の内の10万石の知行を宛行われ、館林城を居城として入封した。邑楽郡周辺における近世幕藩体制の確立である。榊原康政は入封直後に検地を行っており、天正19(1591)年のものとして田島村(現・明和村)等の検地帳が残っている。また榊原康政は、文禄4(1595)年に利根・渡良瀬両川の築堤を命じており、湖沼の干拓も同時に進められ、新しい村が作られていった。近世初期には下野国安蘇郡に属していた除川村(現・板倉町)の開発記録(飯塚文書)によれば、全国各地から浪人が集まり、定住していった様子が窺える。

寛永2(1625)年、榊原氏館林藩3代藩主である榊原忠次は、邑楽郡東部にある板倉沼周辺の湿地帯(内蔵新田)開発の功により1万石を加増されたが、寛永20(1643)年、榊原氏の転封によって旧館林藩領が幕府領となった約7ヵ月間、館林城は上野国小幡藩主織田信昌、下野国太田原藩主太田原政清、上野国七日市藩主前田利倉らが交互に番を勤めている。

館林藩の変遷 正保元(1644)年、松平(大給)乗寿が6万石を宛行われて館林藩に入封、大給松平氏が2代に亘って藩主をつとめた。

寛文元(1661)年、4代将軍徳川家綱の弟である綱吉が25万石で入封したが、綱吉は定府大名で、実際には館林の地に赴任していない。徳川綱吉が藩主であった寛文年間には下野国都賀郡・安蘇郡との国境変更があり、数箇村が邑楽郡に編入されている。「寛文郷帳」では、邑楽郡は全部が「館林宰相領分」で74村、高57865石6斗余、うち田方25103石4斗余・畑方32762石1斗余であった。

延宝8(1678)年、4代将軍家綱の死去に伴って、弟の館林藩主徳川綱吉が将軍職を継承すると、綱吉の嗣子で

僅か1歳の徳松丸が館林城主とされたが、天和3(1683)年、徳松丸の死去によって館林城は廢城となり、藩領は幕府の領するところとなった。その後、綱吉藩主時代の藩領の一部は、宝永4(1707)年、改めて置かれた館林藩領に復している。

近世幕藩体制下の邑楽郡 現在の邑楽郡域は、天和2(1682)年以来、旗本の相給地が多い。「元禄郷帳」では、邑楽郡全部で村数85、高78965石余。多い村では20人も旗本に相知されている。「天保郷帳」では村数85、高80504石余。「旧高田領取調帳」では村数92、高80503石余、うち旧幕府領と旗本領の岩鼻支配分が高44445石余、館林藩領が32732石余であった。

江黒村 本遺跡の所在地は、近世には江黒村の範囲内である。江黒村は千津井村の北、谷田川右岸に位置し、伝承では、康平5(1082)年に源義家の軍馬江黒が病死し、当地宝寿寺に埋めたことに由来するという。

「鶴足寺世代血脈」によると、鶴足寺(現:栃木県足利市)29世尊誉は、永和2(1376)年、「佐貫江黒宝寿寺」で大日経疏を誦誦している。

寛文元(1661)年の領内1村1人宛出頭方申渡(大島文書)に村名がみえ、館林藩領とされた。

「寛文郷帳」によると江黒村は田方266石余・畑方563石余。同10年の大洪水の後、下野宇都宮藩の西原ヶヶ村新田開発に村内の一部が参加し、江黒新田を開いている(『明和村誌』)。

天和2(1682)年の分郷配当帳では1486石余が旗本6家に分給されている。江戸後期の御改革組合村高帳でも旗本六家の相給地で、家数123とある。

明治期の邑楽郡 邑楽郡域は、明治4(1871)年の廢藩置縣によって館林県に属し、同年中に栃木県に合併した。栃木県庁は下野国都賀郡栃木町(現:栃木県栃木市)に置かれた。

明治9(1876)年、邑楽・新田・山田3郡は群馬県管轄となり(第2次群馬県)、明治11(1878)年、県布達により従来の大区小区制を廃して県下17郡とし、各部に郡役所が設けられた。なお、明治21(1888)年発布の町村制により、翌明治22年には2町20箇村となった。

穀倉地帯の邑楽地方は米麦の主産地で、明治31(1898)年、画期的な機械製粉が多々良村(現:館林市)において始められ、明治33(1900)年には館林製粉株式会社(現:

日清製粉株式会社)が館林町に設立された。

また、明治10(1877)年以降、わが国の公害問題の原点と言われる足尾銅毒事件が表面化し、渡良瀬川下流の現：板倉町付近における被害が甚大であった。

第3節 基本土層

谷部基本土層は調査区南西寄りの南壁X=23876.2、Y=-24507.5付近において、また台地基本土層は調査区の東寄りの中央付近X=23897.8、Y=-24448.3付近において記録した。

参考文献(第2章)

吉本裕美ほか2012『戦国史・上州の150年戦争-』。上毛新聞社
 飯森康広2022『戦国期上野の城・砦と地域変容』。岩田書院
 井上定幸・近藤義雄・西畑晴次編1988『角川日本地名大辞典10 群馬県』。
 角川書店

尾崎喜佐雄監修1987『日本歴史地名大系10 群馬県の地名』。平凡社
 京都大学文学部国語学国文学研究室編1968『諸本集成後名類聚抄』本文編
 編川書店

熊谷市史編纂委員会編2018『熊谷市史通史編上巻 原始・古代・中世』

群馬県編1938『上毛古墳総覧』

群馬県教育委員会編1988『群馬県の中世城跡踏査』

群馬県教育委員会編2017『群馬県古墳総覧』

群馬県史編纂委員会編1981『群馬県史』資料編3

群馬県史編纂委員会編1986『群馬県史』資料編2

群馬県史編纂委員会編1990『群馬県史』通史編1

群馬県史編纂委員会編1990『群馬県史』資料編6

群馬県史編纂委員会編1990『群馬県史』資料編7

群馬県総務部市町村課編2015『平成27年度群馬県市町村要覧』

群馬県文化事業振興会編1977『上野国郡村誌』1

群馬県埋蔵文化財調査事業団編1999『群馬県遺跡大事典』

館林市史編纂委員会編2011『館林市史資料編1 原始古代』

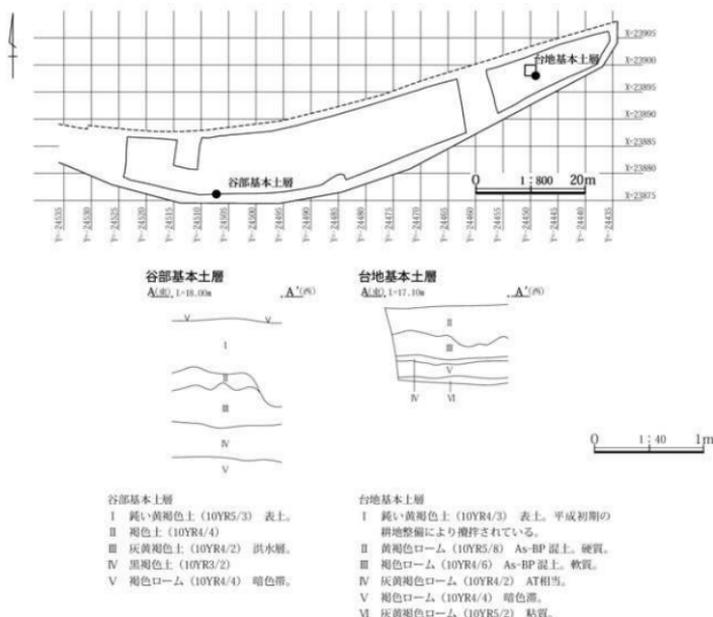
館林市史編纂委員会編2015『館林市史通史編1 館林の原始古代・中世』

山崎一1971・72『群馬県古城墓地の研究』上・下。群馬県文化事業振興会

マッピングぐんま。道跡まっぷ

http://mapping-gunma.pref.gunma.jp/pref-gunma-iseki/Portal

明和町教育委員会編2020『明和町の歴史と文化財』



第5図 基本土層図

第3章 発見された遺構と遺物

遺跡地は近・現代の宅地造成及び耕作により、削平を受けていたが、縄文時代、古墳時代前期・後期、古代、中・近世の各時代の遺構が検出された。旧石器時代、弥生時代、古墳時代中期の遺構・遺物は全く検出されなかったため、この地においては縄文時代以来、人の営が連続と存続していたというわけではなく、断続的に土地利用がなされていた様子が覗える。

中・近世の遺構としては、1基の櫓、6条の溝、5基のピットが検出された。溝のうち1号溝からは寛永通寶が出土した。他の溝も1号溝に重複しない同様の埋土であることから、ほぼ同時期のものと考えられるので、中・近世の遺構と考えられる。また、屋敷等の堀割と考えられる箱堀状の大型の5号溝も検出された。

古代の遺構としては、3棟の竪穴建物と4基の井戸が検出された。出土遺物から奈良時代から平安時代の遺構と考えられる。竪穴建物の埋土からは竈の痕跡と考えられる焼土や粘土が検出されたものもあったが、検出されたこの時期の3棟の竪穴建物から竈が検出出来た事例は1棟も無かった。

古墳時代の遺構としては、古墳時代後期6世紀前半の竪穴建物1棟、古墳時代前期の竪穴建物6棟、土坑1基、ピット6基が検出された。検出された竪穴建物の中には古墳時代前期の土器群が一括して良好な状態で出土したものがあつた。

縄文時代の遺構としては、5基の土坑と8基のピットが検出された。5基の土坑のうち2・3号土坑の2基からは縄文時代中期から後期の土器がまとまって出土し、その時期の遺構と考えられる。

以上のように、本遺跡からは、縄文時代から中・近世に至る遺構が発見されている。

なお、これら各時代の遺構は、確認面毎に層をなして検出されたわけではなく、同一の確認面から検出されている点が、本遺跡における遺構検出上の特徴である。

以下では、遺構の年代順に、検出された各遺構について述べる。なお、検出された遺構については、第2表検出遺構一覧表にまとめた。また、出土した遺物の詳細に

ついては、第4表遺物観察表も併せて参照されたい。

なお、4号土坑、3・5・7・8・13号ピットは欠番である。

第1節 中・近世の遺構と遺物

本遺跡において検出された中・近世の遺構は、調査区の北東端付近から検出された1号櫓、調査区の東側部分から検出された6条の溝(1～6号溝)と5基のピット(1・2・4・6・9号ピット)であつた。なお、ピットについては後掲の第3表ピット一覧表を参照されたい。

調査範囲が狭く、遺構数が少ないため、本遺跡における中・近世の土地利用の在り方については不明な点が多いと言わざるを得ない。

1. 櫓

櫓は、調査区東端寄りの位置から1条検出された。東西1間×南北2間で、北を上に見た場合、逆L字形の平面形態を呈している。南北2間の東側からは西側で検出された柱穴に対応するようなピットが全く発見されないため、掘立柱建物ではなく櫓と判断した。

1号櫓(第7図、PL. 4・5)

位置 調査区の東端寄り。3号井戸、4号ピットの北西側、2号溝の東側に隣接する。P3は6号ピットの西側に近接する。X=23901~903、Y=-24442~444。

重複 なし。

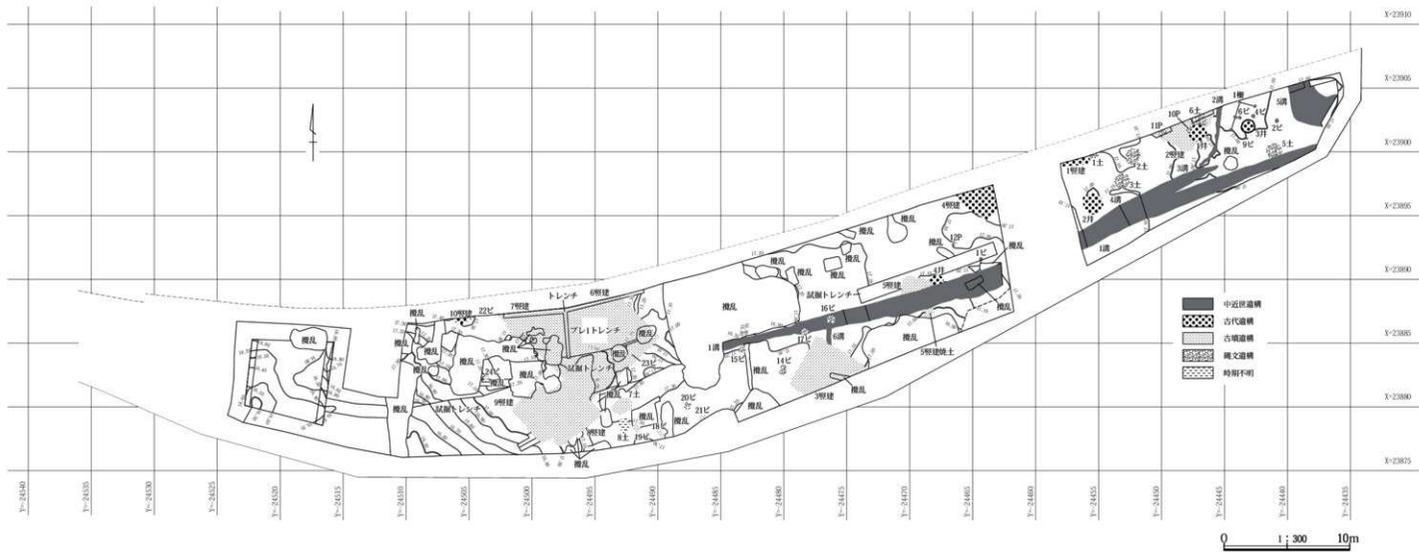
主軸方位 N-18°-E。

規模 南北2間×2.25m、東西1間×1.25m、東西P1-P2間1.25m、南北P2-P3間1.15m、P3-P4間1.10m。

平面形状 東西1間×南北2間の逆L字状を呈する。

柱穴 4基が検出された。

P1:北東隅柱穴。平面形態は不整隅丸方形を呈する。主軸方位はN-18°-E。法量は長径0.25m・短



第2表 検出遺構一覧表

時代	検出遺構	溝	土坑	井戸	欄	ピット	計	内訳
中・近世		6			1	5	12	1～6溝、1欄、1・2・4・6・9ピット
古代	3			4			7	1・4・10竪建、1～4井戸
古墳	7		1			6	14	2・3・5～9竪建、7土坑、 18・19・21～24ピット
縄文			5			8	13	1～3・5・6土坑、 10～12・14～17・20ピット
不明			1				1	8土坑
計	10	6	7	4	1	19	47	

1欄 3・5・7・8ピットで構成
4土坑、13ピット 欠番

径0.24m・深さ0.25m。断面は逆凸形状を呈し、比較的しっかりとした掘方を有している。

P 2：北西隅柱穴。平面形態は東西にやや長い楕円形状を呈する。主軸方位はN-61°-E。法量は長径0.26m・短径0.21m・深さ0.20m。断面は上辺がやや開いたU字形状を呈し、比較的しっかりとした掘方を有している。

P 3：西辺中央柱穴。平面形態は東西にやや長い楕円形状を呈する。主軸方位はN-35°-W。法量は長径0.32m・短径0.29m・深さ0.30m。断面は上辺がやや開いたU字形状を呈し、比較的しっかりとした掘方を有している。

P 4：南西隅柱穴。平面形態は南北にやや長い隅丸長方形形状を呈する。主軸方位はN-65°-W。法量は長径0.29m・短径0.26m・深さ0.35m。断面は上辺がやや開いたU字形状を呈する。深くしっかりとした掘方を有している。

埋土 ローム粒子を約10%程度含み、粘性・締まり普通の黒褐色土。

遺物 なし。

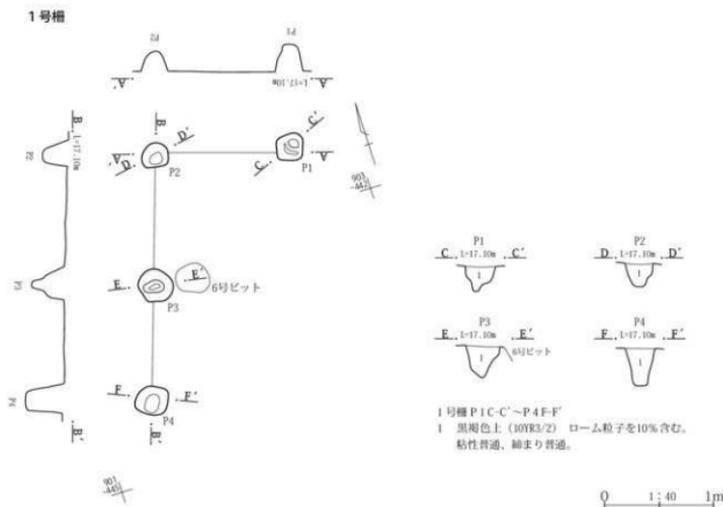
所見 調査区の東端寄りの位置に、北を上にするれば逆L字状を呈する欄で、障壁的な機能を有していたものと推測されるが、何を何から遮蔽しようとしたか、建造の意図は明確にしがたい。各柱穴は比較的しっかりとした掘方を有しているものの、構造物としての規模は小さく、仮設的なものである可能性が高いと考えられる。

時期 中・近世のものと考えられる。

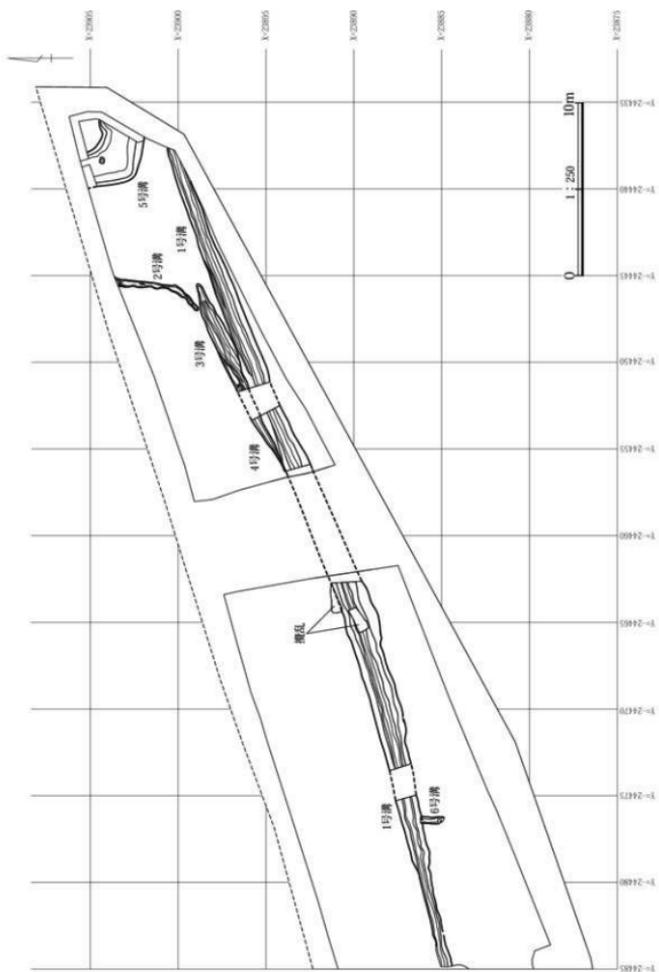
2. 溝

調査区の東半部分から6条の溝が検出された。

本遺跡から検出された溝の中で最も長大な溝は、調査区の東半部ほぼ全域に亘って検出された、南西-北東方向の1号溝である。調査区の東寄りから検出された3・4号溝は、南東側を1号溝に掘り込まれ、破壊された溝であるが、両溝とも1号溝と主軸方位が比較的類似しており、1号溝に先行する同種の溝と考えられる。



第7図 1号溝



第8図 1～6号溝全景

5号溝は調査区東端から南西隅の屈曲部のみが検出された規模が大きな溝で、居館や集落を区画する環壕の一部である可能性が想定される。

2・6号溝は、1・3・4号溝とは主軸方位を全く異なる溝で、主軸方位も南北方向ないし南西-北東方向の小規模な溝である。

なお、いずれの溝においても水流の痕跡は検出することが出来なかった。

(1) 1号溝(第9~11回, PL. 2・23)

位置 調査区の東半部。2号竪穴建物、2・5号溝、1~3号井戸、2・3号土坑等の南側、3号竪穴建物の北側に位置する。X=23884~900, Y=-24437~484。

重複 5号竪穴建物、3・4・6号溝、4号井戸、5号土坑、16・17号ピットを掘り込む。

主軸方位 N-69°76'-W。

規模 検出全長49.92m、上幅0.47~1.95m、下幅0.13~0.41m、深さ0.38~0.89m。

埋土 径約1~5mm程度のロームブロックおよびローム粒子を約1%程度含み、粘性普通、締まりやや強い暗褐色土をベースとする。

遺物 出土遺物28点を図化・掲載した。

①**土器・瓦** 土器は埋土中より出土した19点を図化・掲載した。古代の土器が1~3の3点、古代の瓦が4の1点、古墳時代の土器が5~14の10点、縄文時代の土器が15~20の6点で、いずれも遺構の年代観とは齟齬があり、流入した遺物と考えられる。

古代の土器3点の内、1は8世紀後半の土師器杯口縁~底部1/5片、2は9世紀後半光ヶ丘1号窯式灰軸陶器皿の口縁部~体部片、3は須恵器甕口縁部片である。

4は古代の丸瓦上位片である。本遺跡周辺には古代の瓦が出土する遺跡はこれまで確認されておらず、僅か1点の出土とは言え、本来使用されていた場所の解明が今後の課題となろう。

古墳時代の土器10点はいずれも土師器で、古墳時代前期のものであった。5~8は壺口縁~肩~胴部片で同一個体の可能性がある。9は壺口縁部~頸部片である。10はS字甕口縁部片、11・12はいずれも壺底部片で、11は底部1/2片、12は底部片である。13は台部の一部を欠く器台で、台付甕制作途中から転用したものと考えられる。

14は壺底部1/3片である。

縄文時代の土器6点は縄文時代中期後葉~後期前葉のものであった。15は後期初頭称名寺1式の浅鉢口縁部片である。16・17は共に後期前葉制之内1式の深鉢で、16は胴部片、17は口縁部片である。18は中期後葉加曾利E3式の深鉢胴部片。19・20は共に中期後葉加曾利E4式深鉢口縁部片である。

②**金属製品** 金属製品は21~23の3点を図化・掲載した。

21は中央からやや東寄りの溝底から約0.21m上から出土した淳熙元寶(南宋・淳熙元(1180)年初鑄)、22は同じく中央よりやや東寄りの溝底から約0.05m上から出土した寛永通寶(新寛永、寛文13(1668)年以降)、23も同じく中央からやや東寄りの溝底から約0.04m上から出土した寛永通寶(新寛永)である。遺構の年代観を示す遺物と考えられる。

③**石器・石製品** 石器・石製品はいずれも埋土中から出土した24~28の5点を図化・掲載した。

24は砥石片である。25・26は、いずれも緑色片岩製板碑片である。25は下半部片で3文字の記載が認められる。1・2文字目の「衆生」の判読は可能であるが、3文字目の判読は不可能であった。碑面の摩滅は少なく記された「衆生□□」の文言は隅の一部と考えられる。26には1文字の記載が認められるが判読不能である。27は粗粒輝石安山岩製石臼片で近世のものと考えられる。28はチャート製石礮未製品で、縄文時代のもと考えられ、流入した遺物であろう。

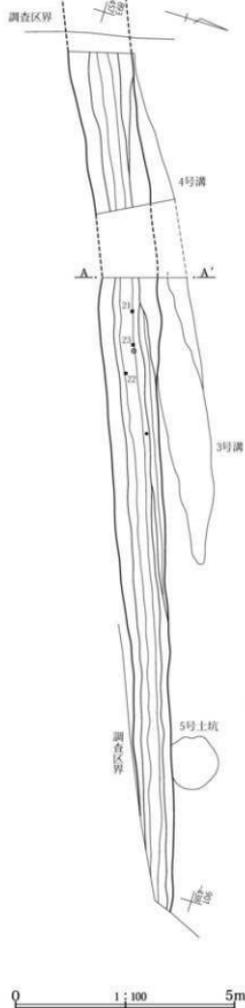
④**非掲載出土遺物** なお非掲載であるが、埋土中から砂岩製加工礮片1点、鉄製品小片3点、馬歯1点、チャート剥片1点(44.2g)等が出土している。

所見 調査区の東半部を西南西-東北東方向に走向する。東端は調査区外へと延びており、西端はX=23885・Y=-24485付近で攪乱され、それ以西からは検出されなかった。中央付近を、道路内側に位置する個人住宅への進入路及びライフライン引き込み線のため確保せざるを得ず、幅約6mに亘って調査不可能な部分が存在した。

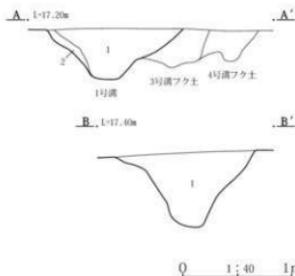
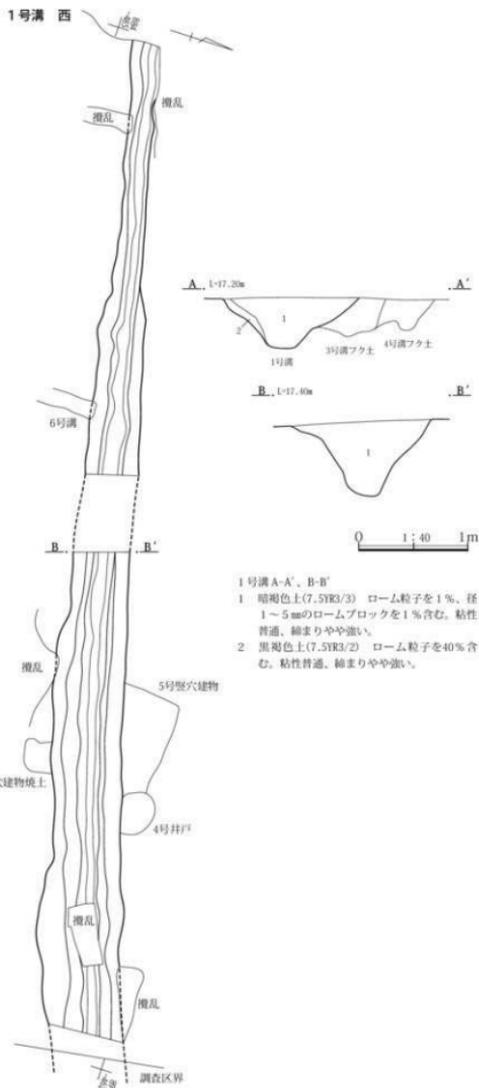
溝東半の溝底の標高は16.5~16.6m前後、溝西半の溝底の標高は16.3~16.7m前後で、中央付近がやや深くなっているが、溝底はほぼ平坦である。しっかりとした掘方を有し、断面は口がやや大きく開いた逆台形状を呈する。

第3章 発見された遺構と遺物

1号溝 東



1号溝 西



1号溝 A-A'、B-B'

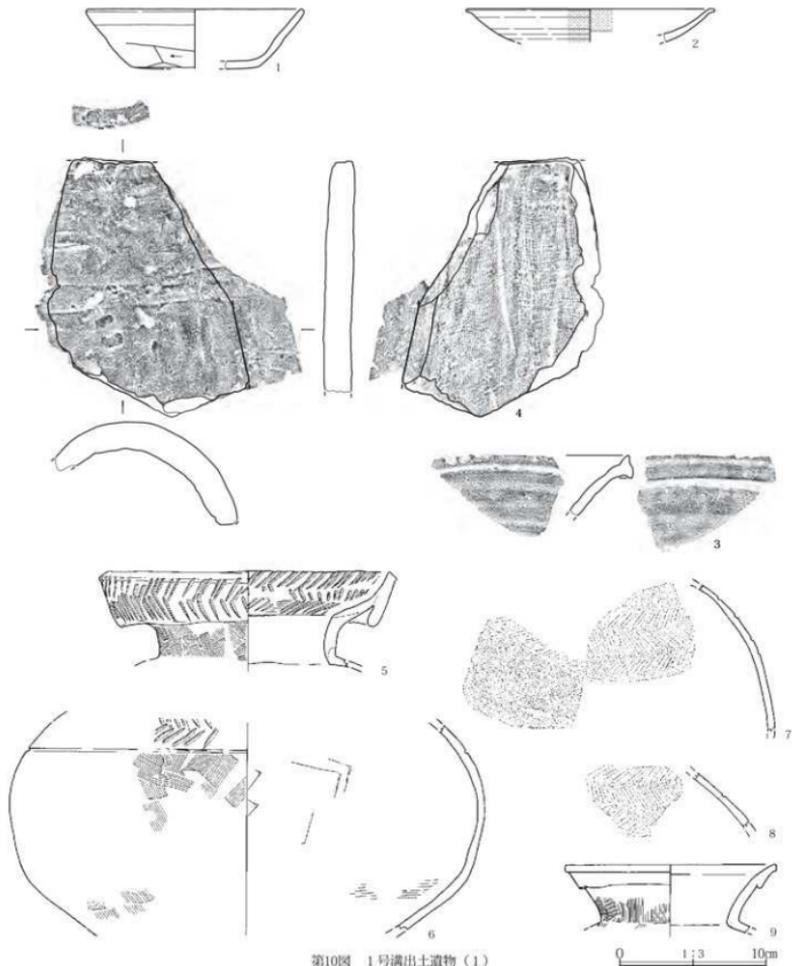
- 1 暗褐色土(7.5YR3/3) ローム粒子を1%、径1~5mmのロームブロックを1%含む。粘性普通。締まりやや強い。
- 2 黒褐色土(7.5YR3/2) ローム粒子を40%含む。粘性普通。締まりやや強い。

第9図 1号溝

第1節 中・近世の遺跡と遺物

土層断面の状況から、水流の痕跡は確認することが出来ず、土地利用の区画を明示するための溝であった可能性が高いと考えられる。

なお、1号溝東半部の南西端付近において、南西側を1号溝に掘り込まれ、破壊されている3・4号溝は、1号溝に掘り込まれ、破壊された溝であるが、両溝とも1



第10図 1号溝出土遺物(1)

第3章 発見された遺構と遺物

写溝と主軸方位が比較的類似しており、1号溝に先行する同種の溝と考えられる。

時期 中・近世のものと考えられる。



第11図 1号溝出土遺物(2)

(2) 2号溝(第12図、PL. 3)

位置 調査区の東端寄り、2号竪穴建物、1号井戸、6号土坑の東側、1号櫓の西側、3号溝の北側に近接する。
X=23898~903, Y=-24445~447。

重複 なし。

主軸方位 N-5~47°-E。

規模 検出全長5.19m、上幅0.17~0.43m、下幅0.06~0.26m、深さ0.02~0.14m。

埋土 ローム粒子を約10%含む、粘性普通、締まりやや強い暗褐色土をベースとする。

遺物 なし。

所見 調査区の東端を北から南南西-北北東方向に走向し、X=23900.25・Y=-24445.7付近で北東-南西方向へと屈曲する。北端は調査区外へと延びており、南端は3号溝の手前、X=23898.85・Y=-24447付近で止まる。

土坑連結状に溝底が部分的に掘り込まれているが、溝底の標高は16.88~16.99m前後で、中央付近がやや高くなっているが、高低差は平均的で、傾斜はない。断面は浅い逆台形状を呈する。

1号溝同様、土層断面の状況から、水流の痕跡は確認することが出来ず、土地利用の区画を明示するための溝であった可能性が高いと考えられる。

時期 中・近世のものと考えられる。

(3) 3号溝(第13図、PL. 2・3・23)

位置 調査区の東半部。2号竪穴建物、2号溝、1号井戸の南側に位置する。X=23896~898, Y=-24445~451。

重複 1号溝に掘り込まれる、4号溝を掘り込む。

主軸方位 N-64°-E。

規模 検出全長6.68m、上幅0.30~1.01m、下幅0.11~0.24m、深さ0.06~0.30m。

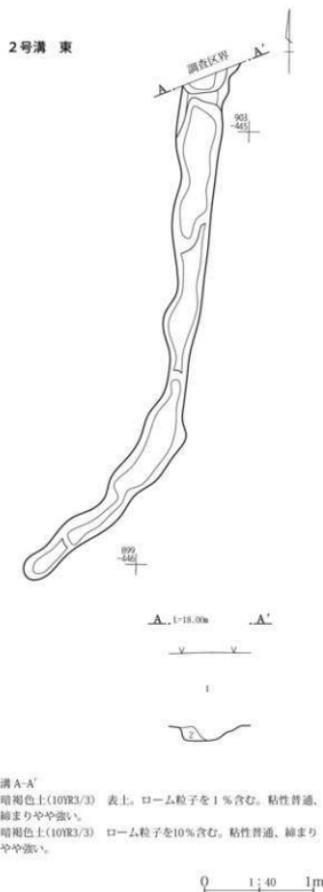
埋土 ローム粒子を約3%程度含む、粘性・締まり普通の黒褐色土をベースとする。

遺物 埋土中から縄文時代後期初頭称名寺Ⅱ式深鉢胴部片が1点出土した。遺構の年代観とは齟齬があるので、流入した遺物と考えられる。

所見 調査区の東半部を西南西-北北東方向に走向する。東端はX=23988.9・Y=-24445.5付近で止まり、西端は1号溝に掘り込まれる。

溝底の標高は16.73~16.75m前後で、溝底はほぼ平坦で、傾斜はない。断面は幅広い不整逆台形状を呈しているものと考えられる。

1・2号溝と同様、土層断面の状況から、水流の痕跡は確認することが出来ず、土地利用の区画を明示するた



第12図 2号溝

第3章 発見された遺構と遺物

めの溝であった可能性が高いと考えられる。先述したように、1号溝と主軸方位が比較的類似しており、1号溝に先行する同種の溝と考えられる。

時期 中・近世のものと考えられる。

(4) 4号溝(第13図、PL. 2・3)

位置 調査区の東半部。2号井戸の南側に近接し、2・3号土坑の南側に位置する。X=23893~897、Y=-24449~456。

重複 1・3号溝に掘り込まれる。

主軸方位 N-63°-E。

規模 検出全長7.40m、上幅0.07~0.56m、下幅0.05~0.39m、深さ0.06~0.13m。

埋土 ローム粒子を約10%程度含む、粘性普通、締まりやや強い黒褐色土をベースとする。

遺物 なし。

所見 調査区の東半部を西南西-東北東方向に走向する。東端は3号溝に、西端は1号溝に掘り込まれ、破壊されている。

溝底の標高は16.97~17.03m前後で、溝底はほぼ平坦で、傾斜はない。

1~3号溝と同様、土層断面の状況から、水流の痕跡は確認することが出来ず、土地利用の区画を明示するための溝であった可能性が高いと考えられる。

なお、先述したように、1号溝と主軸方位が比較的類似しており、1号溝に先行する同種の溝と考えられる。

時期 中・近世のものと考えられる。

(5) 5号溝(第14図、PL. 3・23)

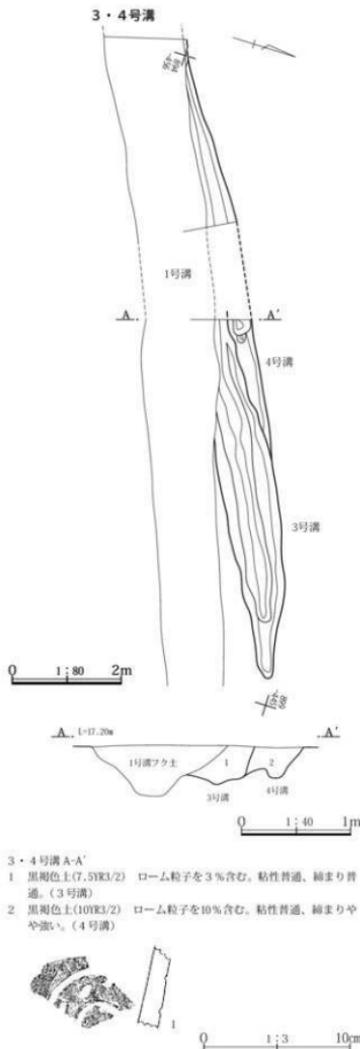
位置 調査区の東端隅部。1号櫓、3号井戸、2・4・9号ピットの東側に位置する。X=23901~905、Y=-24436~439。

重複 なし。

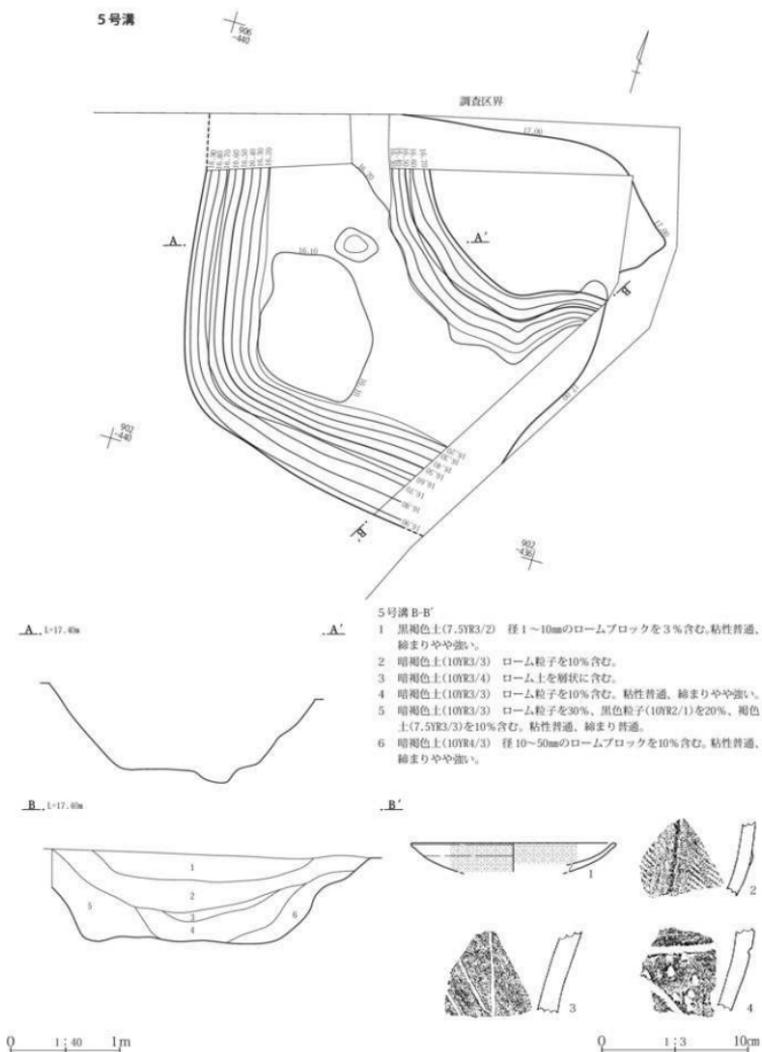
主軸方位 東西軸N-82°-W、南北軸N-16°-W。

規模 検出全長3.90m、上幅2.60m、下幅1.50m、深さ0.91m。

埋土 上層に径約1~10mm程度のローム粒子を約3%含む黒褐色土が、中層にはローム粒子を約10%含む暗褐色土が、下層にローム粒子、ロームブロックを10~30%程度含む暗褐色土が堆積している。



5号溝



第14図 5号溝と出土遺物

第3章 発見された遺構と遺物

遺物 1～4の4点を図化・掲載した。いずれも遺構の年代層とは距離があり、流入した遺物と考えられる。

1は埋土中から出土した9世紀後半の須置器杯口縁部片である。

2～4は縄文時代中期後葉～後期初頭の土器片である。2は中期後葉加曾利E4式の深鉢胴部片、3・4は共に後期初頭称名寺II式の深鉢胴部片である。

なお、非掲載であるが、埋土中からチャート剥片2点(20.4g)が出土した。

所見 調査区の北東隅部から検出され、平面形状L字状を呈しており、 $X=23903.6$ ・ $Y=-24438.5$ 付近にて直角に屈曲し、北東側を区画した居館・屋敷ないし集落の掘削の一部と考えられる箱状の大型溝である。

溝底の標高は16.06～16.16m前後で、溝底はほぼ平坦で、傾斜はない。溝底のやや北寄りに、長径0.36m、短径0.26m、深さ0.10mの東西に長い楕円形状のピット状の掘り込みが検出された。断面は逆台形状を呈している。

1～4号溝と同様、土層断面の状況から、水流の痕跡は確認することが出来ず、土地利用の区画を明示するための溝であった可能性が高いと考えられる。

時期 中・近世のものと考えられる。

(6) 6号溝(第15図、PL. 3)

位置 調査区の中央からやや東寄りの位置。1号溝の南側、3号竪穴建物の北側に接する。 $X=23884$ ～886、 $Y=-24476$ 。

重複 なし。

主軸方位 $N-1^{\circ}E$ 。

規模 検出全長1.31m、上幅0.39m、下幅0.22m、深さ0.09～0.17m。

埋土 ローム粒子を約10%含む、粘性・締まり普通の暗褐色土が堆積している。

遺物 なし。

所見 南北方向の小規模な溝で、北側は1号溝に接している。1号溝との新旧関係はなく、同時併存で1号溝に合流するものと考えられる。南側は3号竪穴建物に接するところで検出できなくなる。古墳時代の遺構である3号竪穴建物とは明らかに時期が異なっているため、3号竪穴建物を掘り込んでいたとしても自然であるが、3号竪穴建物と接する部分から南側では検出することが出来

なかった。3号竪穴建物の埋土が脆弱で、本溝の掘り込みを中止した可能性も考えられる。

溝底の標高は、北端で17.07m、南端で17.00m、北側から南側にかけての傾斜が認められる。

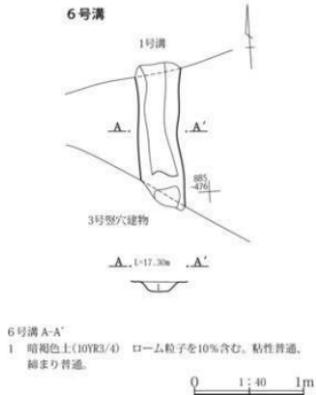
1～5号溝と同様、土層断面の状況から、水流の痕跡は確認することが出来ず、土地利用の区画を明示するための溝であった可能性が高いと考えられる。

時期 中・近世のものと考えられる。

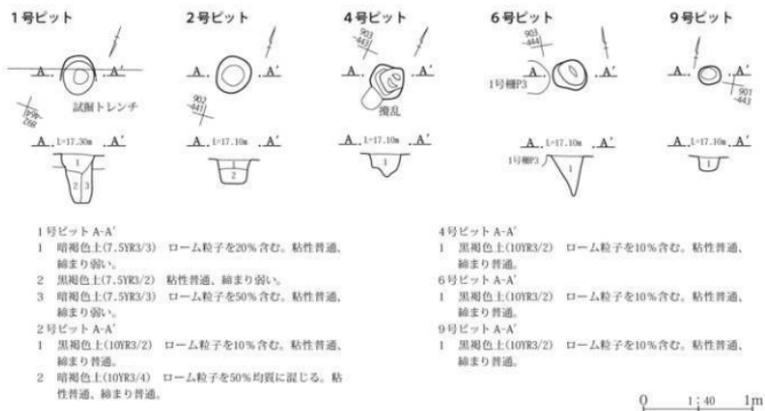
3. ピット(第16図、PL. 5・6)

中・近世のものと考えられるピットは、調査区の東半部分から検出された1・2・4・6・9号ピットである。1号ピットのみが、調査区東半部のほぼ中間の位置から、2・4・6・9号ピットは調査区東端付近の、1号柵周辺から隣まって検出された。これらピットは、掘立柱建物や柵の柱穴を構成するものではなく、用途・機能は不明である。

なお、各ピットの詳細については、後掲の第3表ピット一覧表に、全時代のピットを纏めて掲載したので、参照されたい。



第15図 6号溝



第16図 1・2・4・6・9号ビット

第2節 古代の遺構と遺物

古代の遺構としては、1・4・10号の竪穴建物3棟と1～4号の4基の井戸が検出された。出土物から奈良・平安時代の遺構と考えられるが、10号竪穴建物は埋土の状態から見れば古代の遺構と判断されるが、古墳時代前期の土器しか出土せず、遺構の時期判定について問題点が無いわけではない。検出範囲が竪穴建物のごく一部に過ぎなかったため、この竪穴建物の年代は不明と言わざるを得ない。

検出された竪穴建物の竈は、いずれも調査区外に存在していたと考えられ、実際には検出することは出来なかったところであるが、竈の存在を示唆するような焼土や粘土の小片や粒子が埋土中から検出出来たものも存在した。

本遺跡の調査範囲が道路幅に限定されたものとはいえ、客観的に見れば検出された遺構数自体は少ないものの、調査範囲東端から西寄りへ亘る約75mの範囲に亘って遺構が点在しており、奈良・平安時代には、この地には集落的な景観が存在していた様子が窺える。

1. 竪穴建物

本遺跡から検出された奈良・平安時代の竪穴建物は、1・4・10号竪穴建物の計3棟である。いずれも竈を有する時期のものであるが、調査区の縁辺部から検出されており、竈そのものは検出出来なかった。

検出された3棟の竪穴建物は、調査区の東寄り位置で2棟、西寄りの位置から1棟が検出された。いずれも調査区北壁に掛かっており、当遺跡地における奈良・平安時代の集落は、調査対象範囲よりも北側に展開していたものと推測される。

いずれの竪穴建物も、それらの隅部のごく一部が検出されたに過ぎないので、規模は不明である。主軸方位もまちまちであり、集落を構成するに際して、あまり計画的な配置がなされていたとは考えにくい。

(1) 1号竪穴建物(第17号, PL. 7)

位置 調査区東寄り。調査区北壁に掛かる。2号井戸の北側に位置する。X=23898～899, Y=-24455～458。

重複 なし。

平面形状 竪穴建物の北辺と西辺の全てと東辺の殆どが

第3章 発見された遺構と遺物

調査区外に出、南辺も西側の一部が調査不能箇所当たっているため、全容は全く不明である。

主軸方位 N-85°-E。

規模 検出長径2.37m、検出短径0.57m、床面までの深さ約0.10m。確認面の標高は17.06~07m、床面の標高は16.96~98m。

検出面積 0.901㎡。

埋土 ローム粒子および径1~5mmのロームブロックを共に約5%程度含む、粘性普通で、締まりやや強い黒褐色土。

床面 地山を比較的平坦に削り出して床面を形成している。

竈 調査範囲においては検出されなかった。

貯蔵穴 調査範囲においては検出されなかった。

柱穴 調査範囲においては検出されなかった。

周溝 調査範囲においては検出されなかった。

掘方 全体に地山は比較的平坦に削り出されており、掘方と床面とは一致しているものと考えられる。

遺物 なし。

所見 竪穴建物の南西隅部と南辺のごく一部が検出され

たのみで、大部分は北側の調査区外に当たっている。全容は全く不明である。

時期 埋土の状態から奈良・平安時代のもものと想定出来る。

(2) 4号竪穴建物(第17図、PL. 7)

位置 調査区東寄り。調査区北壁に掛かる。X=23894~897、Y=-24463~466。

重複 なし。

平面形状 竪穴建物の北東辺と北西辺の全てと南東辺の殆どが調査区外に出、南辺も西側の一部が調査区外に出るため、全容は全く不明である。

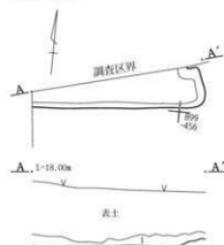
主軸方位 N-57°-W。

規模 検出長径3.15m、検出短径2.60m、床面までの深さ約0.10m。確認面の標高は17.26~30m、床面の標高は17.14~23m。

検出面積 5.152㎡。

埋土 ローム粒子を約10%程度、径5~20mmのロームブロックを約5%程度、黒褐色土を約15%程度含む暗褐色土。

1号竪穴建物



1号竪穴建物 A-A'

1 黒褐色土(10YR3/2) ローム粒子を5%、径1~5mmのロームブロックを5%含む。粘性普通、締まりやや強い。

4号竪穴建物 A-A'

1 黒褐色土(10YR3/2) ローム粒子を10%含む。粘性普通、締まりやや強い。(4号竪穴建物P1埋土)
2 暗褐色土(10YR3/3) ローム粒子を10%、径5~20mmのロームブロックを5%、黒褐色土(10YR3/1)を15%含む。

0 1:60 2m

4号竪穴建物



第17図 1・4号竪穴建物

床面 地山を比較的平坦に削り出して床面を形成している。

竈 調査範囲においては検出されなかった。

貯蔵穴 調査範囲においては検出されなかった。

柱穴 調査範囲においては検出されなかった。

P1 : 検出面の南東隅付近から検出された。不整圓丸方形状を呈し、長径0.37m、短径0.36m、深さ0.37mで、しっかりとした掘方を有し、断面は幅が狭く深い逆台形状を呈する。土層断面の観察から、竪穴建物が埋没した後に掘り込まれた、竪穴建物よりも新しい時期のピットである。

周溝 調査範囲においては検出されなかった。

掘方 全体に地山を比較的平坦に削り出されており、掘方と床面とは一致しているものと考えられる。

遺物 なし。

所見 竪穴建物の南隅部と南西辺および南東辺の一部が検出されたのみで、大部分は北側の調査区外に当たっている。全容は全く不明である。

時期 埋土の状態から奈良・平安時代のもものと想定出来る。

(3) 10号竪穴建物(第18図、PL. 7・23)

位置 調査区西寄り。調査区北壁に掛かる。X=23886~887、Y=-24504~506。

重複 なし。

平面形状 竪穴建物の南隅部が辛うじて調査出来た程度であり、全容は全く不明である。

主軸方位 N-50°-E。

規模 検出長径1.36m、検出短径0.90m、床面までの深さ約0.39m、掘方までの深さ0.48m。確認面の標高は17.27~31m、床面の標高は17.01~08m、掘方底面の標高は16.92~17.00m。

検出面積 0.437㎡。

埋土 ローム粒子を約5%程度含み、粘性・締まり普通の暗褐色土。

床面 地山を比較的平坦に削り出した上に、約0.06~0.12m褐色土を貼って平坦な床面を形成している。

竈 調査範囲においては検出されなかった。

貯蔵穴 調査範囲においては検出されなかった。

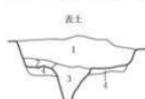
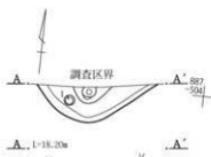
柱穴 調査区北壁際から柱穴かと考えられるピットが1基検出された。平面形状は北東-南西方向に長い楕円形状を呈し、長径0.45m、短径0.30m、深さ0.5mで、断面は深い漏斗状を呈している。埋土はローム粒子および焼土粒を各5%含み、粘性、締まり共に普通の暗褐色土が堆積している。

周溝 調査範囲においては検出されなかった。

掘方 全体に地山を比較的平坦に削り出されている。

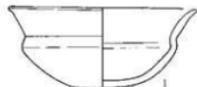
遺物 古墳時代前期の土師器2点を図化・掲載した。1は竪穴建物南隅付近の南西壁際の床面から0.26m上から出土した完形の土師器鉢である。2は、埋土中から出土

10号竪穴建物



10号竪穴建物 A-A'

- 1 暗褐色土(10YR3/4) ローム粒子を5%含む、粘性普通、締まり普通。
- 2 暗褐色土(10YR3/3) 焼土粒子を20%、炭化物を10%含む、粘性普通、締まり普通。
- 3 暗褐色土(10YR3/3) ローム粒子を5%、焼土粒子を5%含む、粘性普通、締まり普通。
- 4 褐色土(10YR4/4) 粘性普通、締まりやや強い。



0 1:60 2m

0 1:3 10m

第18図 10号竪穴建物と出土遺物

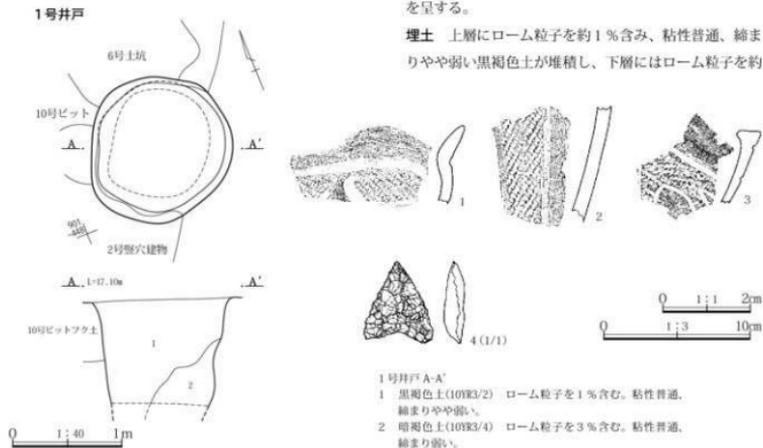
第3章 発見された遺構と遺物

した古墳時代前期の土師器鉢口縁部片である。いずれも調査時に想定された遺構の年代観とは齟齬がある遺物と言える。

所見 竪穴建物の南隅部と南西辺および南東辺のごく一部が検出されたのみで、殆どの部分は北側の調査区外に当たっている。全容は全く不明である。

埋土の状態からは奈良・平安時代の竪穴建物と考えられるが、出土遺物は古墳時代前期の土師器鉢が完形のものを含めた2点のみであり、古墳時代前期の竪穴建物である可能性も十分考えられる。検出範囲が狭小であるため、現時点においてはいずれとも断定は出来ず、どちらの可能性も否定出来ない。

時期 発掘調査時には、埋土の状態から奈良・平安時代の遺構との想定の上で調査したが、奈良・平安時代の遺物の出土は無く、先述の通り、古墳時代前期の土師器が出土した。古墳時代前期の竪穴建物である可能性も拭いきれないが、検出範囲が狭小であるため、詳細を明らかにすることは不可能であった。よって、奈良・平安時代の遺構として仮にここに掲載するが、遺構の年代観は不明である。



第19図 1号井戸と出土遺物

2. 井戸

本遺跡から検出された奈良・平安時代の井戸は1～4号井戸の計4基である。本遺跡から、井戸はこれら4基しか検出されなかったため、本遺跡から検出された井戸の全てが奈良・平安時代のものと言ふことになる。

検出された4基の井戸は、いずれも調査区の東寄りの位置から検出された。これら4基の井戸はそれぞれ若干の差異が有るものの、規模・形状は比較的類似している。

本遺跡からは、古墳時代の竪穴建物が奈良・平安時代のものよりも多い7棟が検出されているにも拘わらず、古墳時代の井戸は検出されていない。

(1) 1号井戸(第19図, PL. 8・23)

位置 調査区 東寄り。X=23889～902, Y=-24446～447。

重複 2号竪穴建物、6号土坑、10号ピットを掘り込む。
主軸方位 N-34°-E。

規模 長径1.35m、上幅1.29m、下幅0.88m、検出範囲内の深さ0.97m。

平面形状 北東-南西やや長い楕円形状を呈する。

断面形状 上端が少し広がった円筒形状に近い漏斗状を呈する。

埋土 上層にローム粒子を約1%含む、粘性普通、締まりやや弱い黒褐色土が堆積し、下層にはローム粒子を約

- 1号井戸 A-A'
- 1 黒褐色土(10YR3/2) ローム粒子を1%含む。粘性普通、締まりやや弱い。
 - 2 暗褐色土(10YR3/4) ローム粒子を3%含む。粘性普通、締まり弱い。

3%含み、粘性普通で締まりやや弱い暗褐色土が堆積している。

遺物 埋土中から出土した4点を図化・掲載した。いずれの遺物も遺構の年代観とは齟齬があり、流入した遺物と考えられる。

①**土器** 縄文時代中期後葉～後期初頭の土器片3点を図化・掲載した。1・2は中期後葉加曾貝E3式の深鉢で、1は口縁部片、2は胴部片である。3は後期初頭称名寺1式の深鉢口縁部片である。

②**石器** 1点を図化・掲載した。4はチャート製石獣である。

なお、非掲載であるが、埋土中からはチャート石核1点と同剥片1点(3.1g)が出土している。

所見 径が狭いため、安全確保のため、確認面から0.97mの部分までしか調査出来なかった。

周辺部の標高は16.98m前後、調査した底部の標高は16.04m前後である。しっかりとした掘方を有している。

時期 遺構の重複状況や埋土の状態等から奈良・平安時代のものと考えられる。

(2) 2号井戸(第20図、PL. 8・23)

位置 調査区東寄り。1・3・4号溝の北側に近接する。X=23895～896、Y=-24454～456。

重複 なし。

主軸方位 N-19°-W。

規模 長径1.58m、上幅1.50m、下幅1.23m、検出範囲内の深さ0.92m。

平面形状 北西-南東やや長い楕円形状を呈する。

断面形状 上端が少し広がった円筒形状に近い漏斗状を呈する。

埋土 ローム粒子を約10%、径約1～10mmのロームブロックを約5%含み、粘性普通、締まりやや強い黒褐色土が堆積している。

遺物 埋土中から出土した1点を図化・掲載した。遺構の年代観とは齟齬があり、流入した遺物と考えられる。

1は縄文時代後期前葉の堀之内1式の深鉢口縁部片である。

所見 径が狭いため、安全確保のため、確認面から0.92mの部分までしか調査出来なかった。

周辺部の標高は17.00～17.05m前後、調査した底部の

標高は16.17m前後である。しっかりとした掘方を有している。

時期 遺構の重複状況や埋土の状態等から奈良・平安時代のものと考えられる。

(3) 3号井戸(第21図、PL. 8)

位置 調査区東端寄り。1号槽の南東側に隣接する。X=23901～902、Y=-24442～443。

重複 なし。

主軸方位 N-0°。

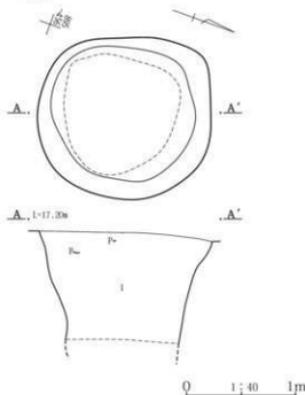
規模 長径1.02m、上幅1.02m、下幅0.94m、検出範囲内の深さ1.05m。

平面形状 ほぼ円形状を呈する。

断面形状 ほぼ円筒形状を呈する。

埋土 径約1～10mmのロームブロックを約1%含み、粘性普通、締まりやや強い黒褐色土が堆積している。

2号井戸



2号井戸A-A'

1 黒褐色土(10YR3/2) ローム粒子を10%、径1～10mmのロームブロックを5%含む。粘性普通。締まりやや強い。



第20図 2号井戸出土遺物

第3章 発見された遺構と遺物

遺物 なし。

所見 径が狭いため、安全確保のため、確認面から1.05mの部分までしか調査出来なかった。

周辺部の標高は17.00～17.02m前後、調査した底部の標高は15.97m前後である。しっかりとした掘方を有している。

時期 遺構の重複状況や埋土の状態等から奈良・平安時代のもと考えられる。

(4) 4号井戸(第21・22図、PL. 8・24)

位置 調査区東寄り。X=23889～890、Y=-24467～468。

重複 1号溝に南側を掘り込まれる。5号竪穴建物の北東隅部を掘り込む。

主軸方位 N-65°-W。

規模 長径1.10m、上幅0.87m、下幅1.11m、検出範囲内の深さ0.87m。

平面形状 北西-南東方向に長い楕円形状を呈する。

断面形状 ほぼ円筒形状を呈するが、下側の壁面が崩落し、オーバーハングしている。

埋土 径約1mmの焼土粒子を約1%含む、粘性普通、締まりやや強い暗褐色土が堆積している。

遺物 埋土中より出土した古代の土器8点を図化・掲載

した。

1は10世紀前半の黒色土器椀で口縁部～体部片。2は9世紀第4四半期～10世紀初頭頃の土師器小型鉢の口縁部～体部片。3も同じく9世紀第4四半期～10世紀初頭頃の土師器椀の口縁部～体部片1/4片。4は8世紀後半の土師器鉢底部片。5は9世紀第4四半期の須恵器椀1/4片。6は同じく9世紀第4四半期の須恵器杯口縁部片。7は9世紀第4四半期～10世紀初頭頃の土師器椀底部～体部下位片。8は同じく9世紀第4四半期～10世紀初頭頃の須恵器椀底部～体部下位片である。

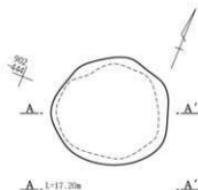
いずれも古代の土器であるが、8世紀後半のものから10世紀前半の比較的幅広い時期のものが含まれている。中心となるのは、9世紀第4四半期から10世紀初頭頃のものである。

所見 径が狭いため、安全確保のため、確認面から0.87mの部分までしか調査出来なかった。

周辺部の標高は17.09m前後、調査した底部の標高は16.23m前後である。しっかりとした掘方を有している。

時期 遺構の重複状況や埋土の状態、出土遺物等から9世紀第4四半期～10世紀初頭頃には廃絶したものと考えられる。機能していたのは遅くとも9世紀第3四半期以前ということになる。

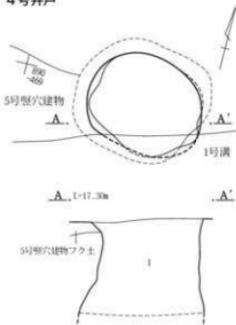
3号井戸



3号井戸 A-A'

1 黒褐色土(10YR3/2) 径1～10mmのロームブロックを1%含む。粘性普通、締まりやや強い。

4号井戸

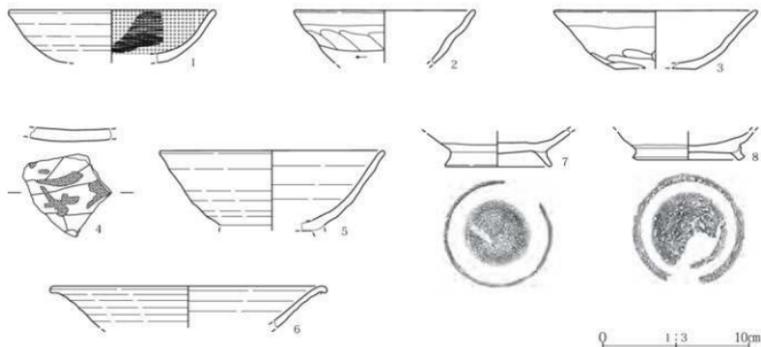


4号井戸 A-A'

1 暗褐色土(10YR3/3) 焼土粒子を1%含む、粘性普通、締まりやや強い。

第21図 3・4号井戸

0 1:40 1m



第22図 4号井戸出土遺物

第3節 古墳時代の遺構と遺物

本遺跡において検出された古墳時代の遺構は、竪穴建物¹は2・3・5～9号竪穴建物の7棟、土坑は7号土坑1基、ピットは18・19・21～24号ピットの6基である。なお、ピットについては後掲の第3表ピット一覧表を参照されたい。出土した土器から見て、3号竪穴建物のみが古墳時代後期のもので、それ以外は古墳時代前期のものと考えられる。

本遺跡の調査範囲が道路幅に限定され、客観的に見ても検出された古墳時代前期の遺構数自体は決して多くはないものの、調査範囲のほぼ全域に亘って古墳時代前期の遺構が検出されており、この地には集落的な景観が展開していた様子が窺える。ただ、調査対象地の全域に亘って古墳時代前期の遺構が検出されているとは言っても、この時期のピットは、調査区の西側の部分からのみ検出されているなど遺構別に若干のばらつきが認められる。

1. 竪穴建物

本遺跡から検出された古墳時代の竪穴建物は、2・3・5～9号竪穴建物の計7棟である。先述したように出土遺物から見て、3号竪穴建物のみが古墳時代後期6世紀前半代のもので、それ以外のものは古墳時代前期のもの

と考えられる。3号竪穴建物以外の竪穴建物は、いずれも竈を有しない時期のものであるが、多くは調査区の縁辺部から検出されており、全容が検出出来た8号竪穴建物においても明瞭な炉は検出することが出来ず、結局、炉が検出出来た竪穴建物は皆無であった。

検出された7棟の竪穴建物は、調査区の東寄り位置から1棟、調査区の中央部から2棟、調査区の中央から西寄りの位置で4棟が重複して検出された。5号竪穴建物を除く6棟の竪穴建物は北西-南東方向を主軸とし、6号竪穴建物と7号竪穴建物、8号竪穴建物と9号竪穴建物はそれぞれ重複しており8号竪穴建物は9号竪穴建物を建て替えたものと考えられる。8号竪穴建物は6号竪穴建物の南西隅を掘り込んでおり、調査区中央から西に寄った位置で重複して検出された6～9号の4棟の竪穴建物の中では最も新しい時期の竪穴建物である。

本遺跡から検出された7棟の古墳時代前期の竪穴建物は、いずれも調査区の壁に掛かるか、他の遺構によって破壊されており、全容が調査出来た事例は1例も無い。

検出件数も多くは無く、空閑地も大きいので、本遺跡地における古墳時代前期の集落の中心部分も、奈良・平安時代の集落と同様、調査対象範囲外に展開していたものと推測される。

調査範囲が限定されているため、集落内における竪穴建物の配置が計画的になされていたのか否かについても断定できるような材料はなかった。

(1) 2号竪穴建物(第23図、PL. 9・24)

位置 調査区東寄り。調査区北壁に掛かる。2号溝の西側に近接し、3号溝の北側に位置する。X=23900～903、Y=-24445～450。

重複 南東辺を1号井戸に掘り込まれる。6号土坑、10・11号ピットを掘り込む。

平面形状 竪穴建物の北隅及び西隅、北西辺の全て、北東辺の殆どと南西辺の一部が調査区外に出、東隅と南隅が検出された。北西-南東方向に長い形状を呈していたものと考えられる。

主軸方位 N-33°-E。

規模 検出長径3.65m、検出短径2.90m、掘方までの深さ約0.21m。確認面の標高は16.97～17.08m前後、掘方底面の標高は16.83～94m。

検出面積 6.970㎡。

埋土 上層にローム粒子および径1～5mmのロームブロックを共に約10%程度含み、粘性やや弱く、締まり普通の黒褐色土が、下層にローム粒子を約3%程度、径2～3mmのロームブロックを約5%程度含み、粘性・締まり共に普通の暗褐色土が堆積している。

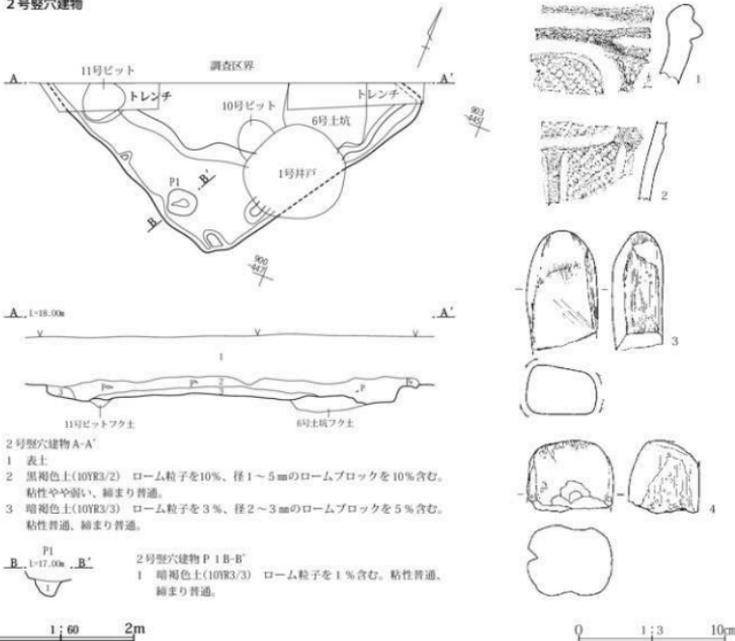
床面 調査範囲においては検出されなかった。

炉 調査範囲においては検出されなかった。

貯蔵穴 竪穴建物南隅付近から検出されたP1が貯蔵穴に該当するものと考えられる。北西-南東方向に長い不整形円形状を呈し、長径0.40m、短径0.35m、深さ0.26mで、ローム粒子を約1%程度含み、粘性・締まり共に普通の暗褐色土が堆積している。

柱穴 調査範囲においては検出されなかった。

2号竪穴建物



第23図 2号竪穴建物と出土遺物

周溝 南壁際に沿って北東-南西方向に、長さ約2.78m、幅約0.25m、深さ0.06~0.09mの規模の溝状の掘り込みが検出され、床面に掘り込まれた周溝の痕跡の可能性が考えられるが、竪穴建物の西壁際からは同様の溝状の掘り込みは検出されていない。

掘方 全体に凹凸が見られるが、西壁側が一段と深く掘り込まれている。

遺物 埋土中から出土した縄文土器片2点、石器・石製品2点の計4点を図化・掲載した。いずれも竪穴建物の年代層とは距離があり、流入した遺物と考えられる。

①**土器** 2点を図化・掲載した。1・2いずれも縄文時代中期後葉加曾利E3式の深鉢口縁部片である。

②**石器・石製品** 2点を図化・掲載した。3は砂岩製磨石、4は粗粒輝石安山岩製四石片である。

なお、非掲載ではあるが、埋土中からチャートの2次加工のある剥片2点、チャート剥片3点(2.8g)が出土した。

所見 検出されたのは隅丸長方形の竪穴建物の南東側約半分弱の部分と考えられ、全容は不明である。掘方の状態で検出された。調査範囲内において検出された古墳時代前期の竪穴建物の中で、本竪穴建物のみが他の同時期の竪穴建物群と離れ、調査区の東端寄りの位置から単独で検出された。

時期 埋土の状態から古墳時代前期のものと想定出来る。

(2) 3号竪穴建物(第24・25図、PL.10・24)

位置 調査区ほぼ中央の南寄りの位置。調査区南壁に掛かる。1号溝と16・17号ピットの南側、14号ピットの南東側にそれぞれ隣接する。X=23880~885、Y=-24474~479。

重複 6号溝に北東側壁を掘り込まれる。

平面形状 竪穴建物の南隅、南東辺の全て、南西辺の殆ど、北東辺の一部が調査区外に出、北隅、東隅、北東辺の殆ど、北西辺の全て、南西辺の一部が検出された。北西-南東方向に長い形状を呈していたものと考えられる。

主軸方位 N-57°-W。

規模 検出長径4.80m、検出短径4.46m、床面までの深さ0.41m、掘方までの深さ約0.58m。確認面の標高は17.07~17.26m前後、床面の標高は16.83~91m前後、

掘方底面の標高は16.64~83m前後。

検出面積 14.309㎡。

埋土 灰黄褐色粒子、ローム粒子等を含む黒褐色土をベースとし、底面付近にローム粒子と黒褐色土を含む暗褐色土が堆積している。

床面 ローム粒子を約10%程度、径1~10mmのロームブロックを約15%程度、暗褐色土を約5%程度含み、粘性普通で締まり強い鈍い黄褐色土を0.1~0.2m貼り付けて平坦な床面を形成している。

竪 調査範囲内においては検出されなかった。

貯蔵穴 調査範囲内においては検出されなかった。

柱穴 竪穴建物北隅寄りの位置から検出されたP1と西隅寄りの位置から検出されたP2が、それぞれ柱穴と考えられる。

P1

形状 ほぼ円形形状の平面形態を呈する。

規模 南北径0.29m、東西径0.28m、深さ0.28m。

断面形状 深くしっかりとした掘方を有しており、深い逆台形状を呈する。

埋土 粘性・締まり共に普通の暗褐色土が堆積する。

P2

形状 南北にやや長い楕円形状の平面形態を呈する。

規模 長径0.45m、短径0.39m、深さ0.15m。

断面形状 掘方は比較的浅く、扁平な長方形形状を呈する。

埋土 P1と同様、粘性・締まり共に普通の暗褐色土が堆積する。

周溝 調査範囲内においては検出されなかった。

掘方 全体に凹凸激しく掘り込まれている。

床下土坑 P1・2を結んだラインのすぐ内側の中央付近から、床面に掘り込まれたP3が検出された。床下土坑と考えられる。

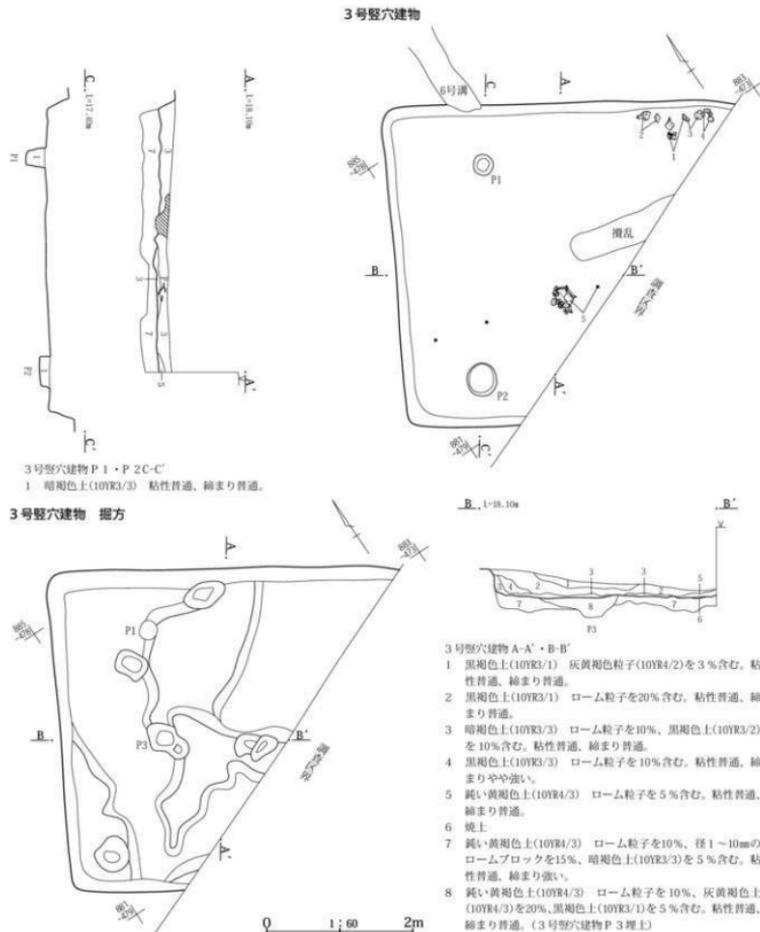
P3は、南北に長い不整形の平面形態で、長径0.66m、短径0.42m、深さ0.12m、断面はやや浅く扁平な逆台形状を呈している。ローム粒子を約10%程度、灰黄褐色土を約20%程度、黒褐色土を約5%程度含み、粘性・締まり普通の鈍い黄褐色土が堆積している。

遺物 出土遺物10点を図化・掲載した。1~6はいずれも土師器で、そのうちの1~4が検出範囲の北東隅壁際から纏まって出土した。その他に埋土中から縄文土器片2点と石器1点が出土した。

第3章 発見された遺構と遺物

①土器 竪穴建物北東辺壁際の南東寄りの位置から出土した土器は1～4の4点で、1は床面から約0.08m上から出土した口縁部のごく一部が欠失したほぼ完形の杯で、6世紀前半頃のものと考えられ、中毛以西では見られ

ない形態を呈している。2は床面から0.07m上から出土した腰口縁部～胴部上位片で、同じく6世紀前半頃のものと考えられる。3は床面から0.07m上から出土した小型壺胴部下位～底部片で、同じく6世紀前半頃のものと考え



第24図 3号竪穴建物

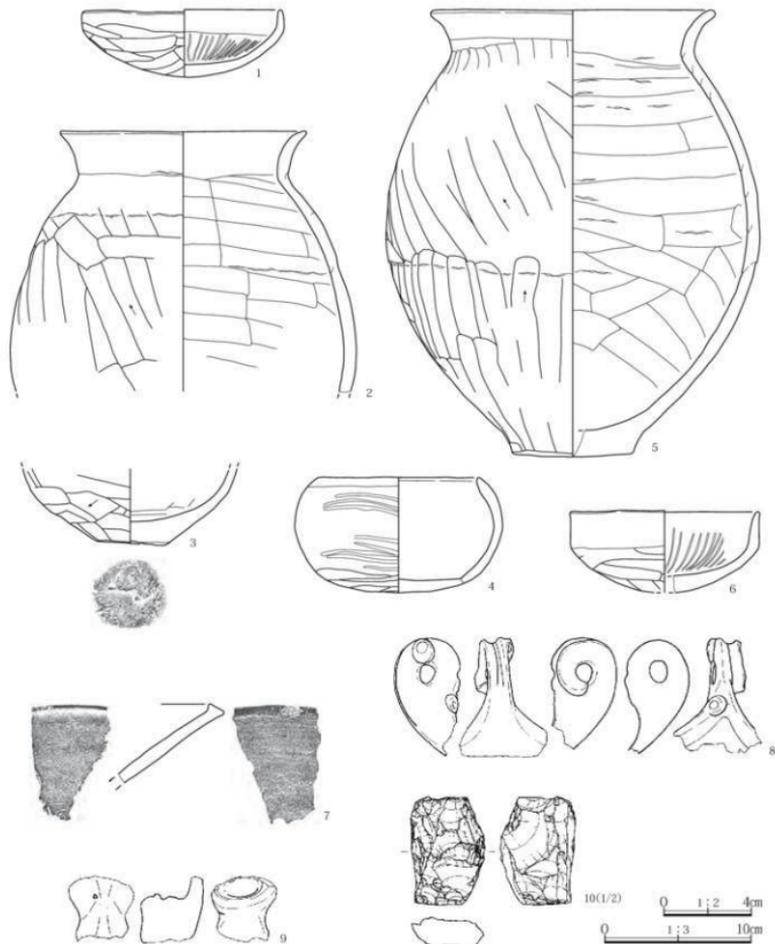
第3節 古墳時代の遺構と遺物

られる。4も床面から0.08m上から出土した6世紀前半頃の鉢の1/2片である。

竪穴建物中央部の床面直上から出土した5は甕1/2片

で、同様に6世紀前半頃のものと思われる。

これらの他に埋土中から出土した4点の土器を図化・掲載した。6は土師器杯1/2片である。須恵器蓋を模倣



第25図 3号竪穴建物出土遺物

第3章 発見された遺構と遺物

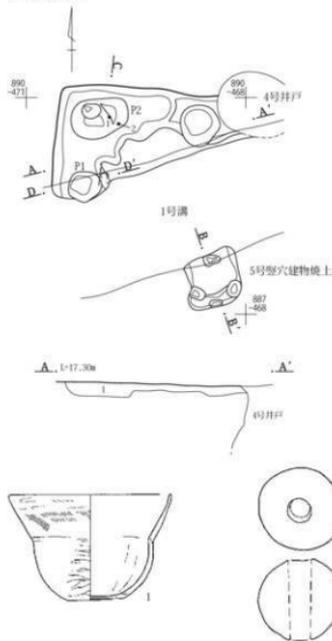
したのか、口縁部が直立し、機構が高いことから6世紀前半代のもと考えられる。

7は在地系中世土器片口鉢口縁部片、8・9は縄文時代後期初頭の称名寺式の深鉢口縁部片である。7～9は遺構の年代観とは齟齬があり、流入した遺物であると考えられる。

②石器 10は埋土中から出土したチャート製楔形石器で、この遺物も遺構の年代観とは齟齬があり、流入した遺物であると考えられる。

所見 中央部の南壁側の位置を溝状に北西～南東方向に攪乱されている。上半を削平され、検出状況はあまり良好とはいえない。検出されたのは隅丸長方形の竪穴建物の北西側約半強の部分と考えられ、全容は不明である。

5号竪穴建物



調査範囲内において検出された古墳時代前期の竪穴建物の中で、本竪穴建物と5号竪穴建物が調査区の中央部から検出された。

時期 出土遺物から古墳時代後期6世紀前半頃のもので想定出来る。

(3) 5号竪穴建物(第26図、PL.11・24)

位置 調査区ほぼ中央のやや東寄りの位置。X=23888～890, Y=-24468～470。

重複 1号溝、4号井戸に掘り込まれる。

平面形状 竪穴建物の南側大部分を1号溝によって掘り込まれたり、攪乱されたりしているため、全容は不明である。

主軸方位 N-85°-W。

規模 検出長径2.15m、検出短径1.64m、掘方までの深

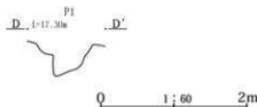


5号竪穴建物焼土 B-B'

1 暗褐色土(10YR3/4) ローム粒子を20%、焼土を10%、黒褐色土(10YR3/2)を40%含む。粘性普通、締まりやや強い。

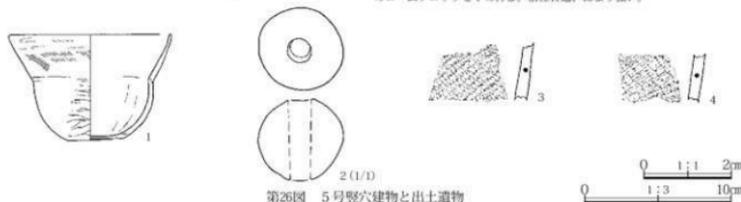
5号竪穴建物 P 2 C-C'

1 暗褐色土(10YR3/3) ローム粒子を20%、径1～5mmのロームブロックを20%、黒褐色粒子(10YR3/1)を5%含む。粘性普通、締まりやや強い。



5号竪穴建物 A-A'

1 暗褐色土(10YR3/3) ローム粒子を2%、焼土粒子を5%、径10～15mmのロームブロックを1%含む。粘性普通、締まり強い。



第26図 5号竪穴建物と出土遺物

さ約0.22m。確認面の標高は17.09～14m前後、掘方底面の標高は16.92～17.08m。

検出面積 3.11㎡。

埋土 ローム粒子を約2%程度、径10～15mmのロームブロックを約1%程度、焼土粒を約5%程度含み、粘性普通で締まり強い暗褐色土が堆積している。

床面 調査範囲においては検出されなかった。

炉 1号溝の南側X=23887、Y=24468の地点付近から焼土坑が検出された。北側を1号溝によって破壊されているため全容は不明であるが、全体に凹凸激しく掘り込まれている。炉の痕跡としては規模が大きい点に疑問が残る、機能は不明と言わざるを得ない。

形状：不整形形状。

規模：径0.74m、深さ0.06m。

主軸方位：N-13°-W。

断面形状：不整形。

埋土：黒褐色土を約40%程度、ローム粒子を約20%程度、焼土を約10%程度含み、粘性普通で締まりや強い暗褐色土が堆積している。

縁辺部ビット状掘り込み：南西隅、南端中央、南東隅、検出範囲おける北端中央の4箇所から浅く小規模なビット状の掘り込みが検出された。

北側：不整形、0.24×0.15×0.10m。

南東側：楕円形、0.23×0.18×0.11m。

南西側：ほぼ長方形、0.21×0.16×0.07m。

南側：ほぼ長方形、0.18×0.10×0.10m。

貯蔵穴・柱穴・床下土坑 調査範囲においては検出されなかったが、北西隅からP2が、1号溝に掘り込まれ破壊されている検出範囲の南端、西壁際からP1が検出された。床面が検出されていないため、P1・P2の掘り込みがどこからであるか不明なので、用途・機能を特定することは難しいが、P2は床下土坑、P1は貯蔵穴か床下土坑か柱穴のいずれかの可能性がある。

P1

形状：北東-南西方向に長い不整形丸長方形を呈する。
主軸方位：N-68°-E。

規模：長径0.46m、短径0.42m、深さ0.32m

断面形状：比較的深く、しっかりとした掘方を有しており、断面は不整逆台形状を呈している。

埋土：暗褐色土が堆積している。

P2

形状：東西に長い楕円形状を呈する。

主軸方位：N-71°-E。

規模：長径0.80m、短径0.54m、深さ0.35m。

断面形状：深く、しっかりとした掘方を有しており、断面は不整逆台形状を呈している。

埋土：ローム粒子及び径1～5mm程度のロームブロックを約20%程度、黒褐色土を5%程度含み、粘性普通、締まりや強い暗褐色土が堆積している。

溝溝 調査範囲においては検出されなかった。

掘方 全体に凹凸激しく掘り込まれている。

遺物 出土遺物4点を図化・掲載した。

1・2は共にP2埋土から出土した。1はP2の南東隅付近の底面から約0.2m上から出土した古墳時代前期の土師器用1/2片である。2は中央からやや東側に寄った位置の床面から約0.15m上から出土した完形の土製丸玉で、1と同様、古墳時代前期のものと考えられる。

4・5は共に埋土中から出土した縄文時代前期前葉黒浜式の深鉢胴部片である。遺構の年代観としては齧船があり、流入した遺物と考えられる。

所見 上半を削平され、検出状況は悪く、掘方のみが検出された。

南側を1号溝に、北東隅を4号井戸に破壊され、さらに1号溝以南の部分も大きく攪乱されていて、元の形状は不明である。

時期 出土遺物から古墳時代前期のもの想定出来る

(4) 6号竪穴建物(第27～30図、PL.12・13・25)

位置 調査区中央から西寄りの位置。調査区北壁に掛かる。7号土坑の北西側に隣接する。X=23880～888、Y=24489～500。

重複 南隅と南西壁の一部を8号竪穴建物に、竪穴建物南東側の南東壁に近い位置を23号ビットに、それぞれ掘り込まれる。7号竪穴建物の南東側を大きく掘り込む。

平面形状 北東側が調査区外に出るが、北西-南東方向に僅かに長い隅丸長方形形状を呈していたものと考えられる。

主軸方位 N-45°-W。

規模 検出長径7.80m、検出短径7.70m、床面までの深さ0.27m、掘方までの深さ約0.41m。確認面の標高は

第3章 発見された遺構と遺物

17.01～36m前後、床面の標高は16.87～17.20m前後、掘方底面の標高は16.76～17.14m前後。

検出面積 50.725㎡。

埋土 ローム粒子を約5%程度、黒褐色土を約10%程度含み、粘性・締まり共に普通の暗褐色土をベースとする。

床面 ローム粒子を約10%程度含み、粘性普通、締まりやや弱い暗褐色土を約0.01～0.2m程度貼り付けて平坦な床面を形成している。

炉 調査範囲においては検出されなかった。

貯蔵穴 調査範囲においては検出されなかった。

柱穴 調査範囲においては検出されなかった。

その他のビット 検出範囲中央の北壁際からP1が検出された。床面から掘り込まれている。位置から見て柱穴とは考えにくく、用途・機能は不明である。

形状：南北に長い不整形形状を呈する。

主軸方位：N-40°-W。

規模：長径0.73m、短径0.54m、深さ0.16m。

断面形状：比較的浅いレンズ状を呈する。

埋土：上層に焼土を約40%程度含み、粘性普通で締まりやや弱い黒褐色土が、下層に焼土粒を約3%程度、粘性・締まり共に普通の暗褐色土が堆積する。

周溝 調査範囲においては検出されなかった。

掘方 全体に凹凸激しく掘り込まれている。とくに北西隅側が不整形の土坑状に、さらに南壁際及び東壁際及び北壁際が、幅約0.6～1.18m前後、深さ約0.05～0.1m程度の溝状に、それぞれ一段と深く掘り窪められている。

床下土坑 竪穴建物の中央から見て北西寄りの位置からP2が、北西隅付近からP3がそれぞれ検出された。共に床下土坑としては小規模であるが、掘方から検出されたものであるため、ここに記載する。

P2

形状：北西側と南東側とを攪乱されているため、全容は不明である。

規模：検出南北長0.62m、検出東西幅0.35m、深さ0.23m。

断面形状：浅く比較的扁平な逆台形状を呈する。

埋土：上層にローム粒子と焼土粒をそれぞれ約5%程度含み、粘性普通で締まりやや弱い黒褐色土が、下層に径約10mm程度のロームブロックを約1%程度、焼土粒を約20%程度含み、粘性普通で締まりやや強い褐色土が堆積する。

P3

形状：南北に僅かに長い楕円形状を呈する。

主軸方位：N-3°-E。

規模：長径0.35m、短径0.32m、深さ0.32m。

断面形状：不整逆台形状を呈する。

埋土：調査記録が無く不明。

遺物 出土遺物29点を図化・掲載した。

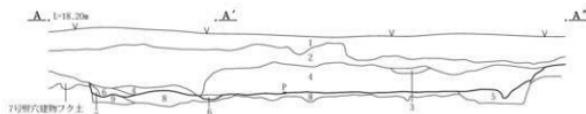
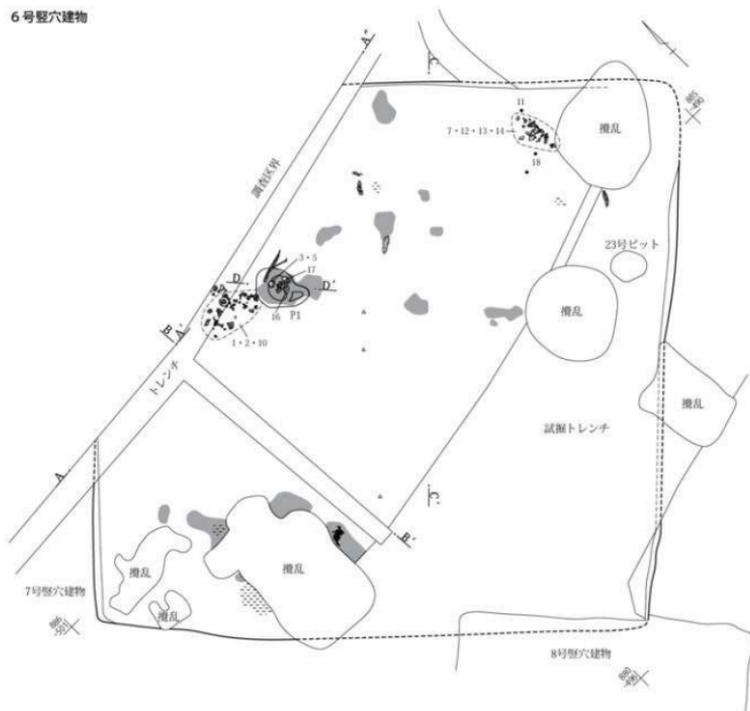
①**土器・土塊・土製品** 竪穴建物の南東寄りの北東壁際付近と検出範囲中央北壁際付近から纏まって古墳時代前期の土師器・土塊・土製品等が出土した。これらのうち、下記の20点を図化・掲載した。

検出範囲中央部北壁際付近床面直上から出土した1・2・3は土師器S字甕口縁～肩部片。埋土中から出土した4は土師器直口壺の口縁部を欠く1/2片。検出範囲中央部北壁際付近床面直上から出土した5は土師器台付甕体部下位片。埋土中から出土した6も土師器台付甕脚結合部。竪穴建物北東壁際南東寄り付近床面直上から出土した7は土師器鉢口縁部片。埋土中から出土した8は土師器有孔鉢底部片で、底面に穿孔が施される。同じく埋土中から出土した9は土師器器台/2片。検出範囲中央部北壁際付近床面直上から出土した10は土師器器台受け部1/4片。竪穴建物北東壁際南東寄り付近床面直上から出土した11は土師器杯1/4片、12・13・14は共に土師器高杯杯部1/4片。掘方埋土中から出土した15は土師器器台脚部上1/2片。検出範囲中央部北壁際付近床面直上から出土した16・17は円筒状土塊の破片と考えられる用途不明土製品である。18は竪穴建物南東側東壁際付近の床面直上から出土した一部欠の土玉で、全体に粗いミガキ、孔口部は未整形である。検出範囲中央部北壁際付近床面直上から出土した20は土師器甕口縁～胴部1/2片。埋土中から出土した19は土師器直口壺口縁部片である。

②**縄文土器** 掘方埋土から出土した縄文時代前期前葉と後期初頭の土器片21～27の7点を図化・掲載した。これらの遺物は遺構の年代観とは相違があり、流入した遺物と考えられる。

21・22は共に前期前葉関山Ⅱ式の深鉢片で、21は口縁部片、22は胴部片である。23～25はいずれも前期前葉黒浜式の深鉢片で、24・25は胴部片、23は口縁部片である。26・27は共に後期初頭称名寺式の深鉢片で、26は称名寺Ⅰ式の胴部片、27は称名寺Ⅱ式の口縁部片である。

6号竪穴建物



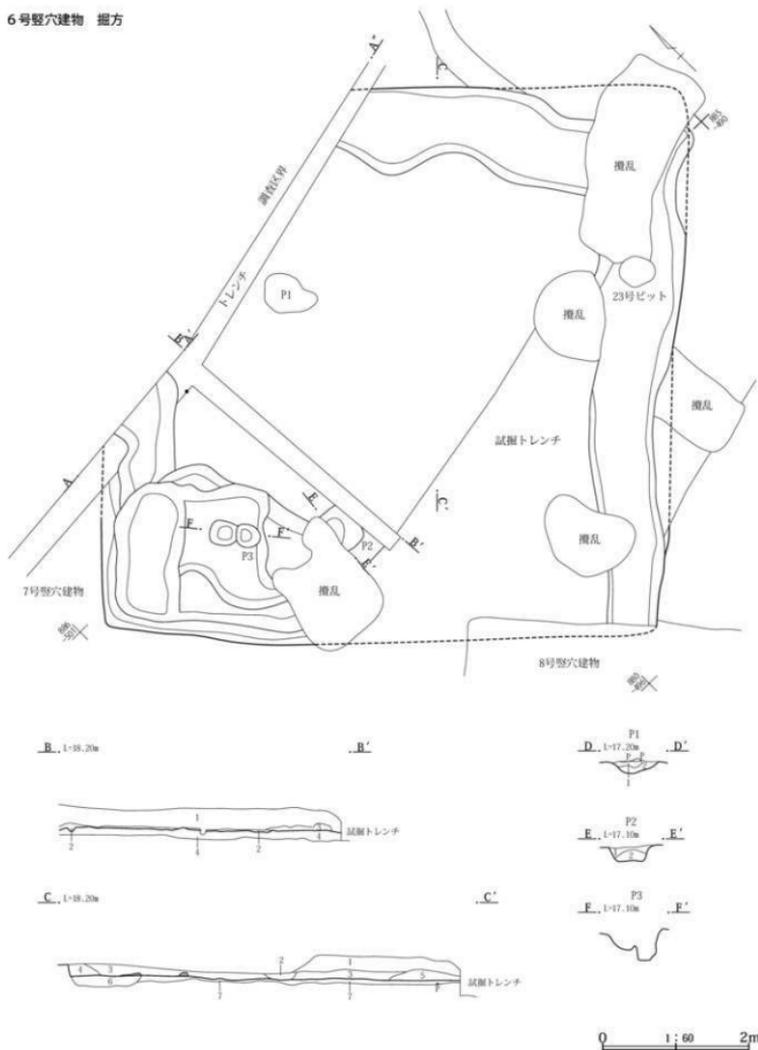
6号竪穴建物 A-A'

- 1 礫層。(掘丸層)
- 2 褐灰土を含む暗褐色土。(掘丸層)
- 3 褐灰土、ローム粒子を含む暗褐色土。(掘丸層)
- 4 暗褐色土(10YR3/3) ローム粒子を5%、黒褐色土(10YR3/2)を10%含む。粘性普通。締まり普通。(B-B' 1層)
- 5 黒褐色土(10YR3/2) ローム粒子を10%、褐色土を30%含む。粘性普通。締まり普通。
- 6 黒褐色土(10YR3/1) ローム粒子を5%、暗褐色土(10YR3/1)5%をブロック状に含む。(B-B' 2層)
- 7 黒褐色土(10YR3/2) ローム粒子を20%含む。粘性普通。締まり普通。
- 8 暗褐色土(10YR3/3) ローム粒子を10%含む。粘性普通。締まりやや弱い。(B-B' 4層)
- 9 褐色土(10YR4/4) 暗褐色土(10YR3/3)を20%含む。粘性普通。締まり普通。

0 1:60 2m

第27図 6号竪穴建物(1)

6号竪穴建物 掘方



第28図 6号竪穴建物(2)

第3節 古墳時代の遺構と遺物

6号竪穴建物B-B'

- 1 暗褐色土(10YR3/3) ローム粒子を5%、黒褐色土(10YR3/2)を10%含む。粘性普通。締まり普通。(A-A' 4層)
- 2 黒褐色土(10YR3/2) ローム粒子を5%、暗褐色土(10YR3/3)5%をブロック状に含む。(A-A' 6層)
- 3 暗褐色土(10YR3/3) 炭と焼土を層状に含む。粘性普通。締まりやや弱い。(A-A' 8層)
- 4 暗褐色土(10YR3/4) ローム粒子を10%含む。粘性普通。締まりやや弱い。(A-A' 8層)

6号竪穴建物C-C'

- 1 暗褐色土(10YR3/3) ローム粒子を5%、黒褐色土(10YR3/2)を10%含む。粘性普通。締まり普通。
- 2 黒褐色土(10YR3/2) ローム土40%を下層部に含む。粘性普通。締まり普通。
- 3 黒褐色土(10YR3/1) ローム粒子を5%、暗褐色土(10YR3/3)5%をブロック状に含む。焼土含む。

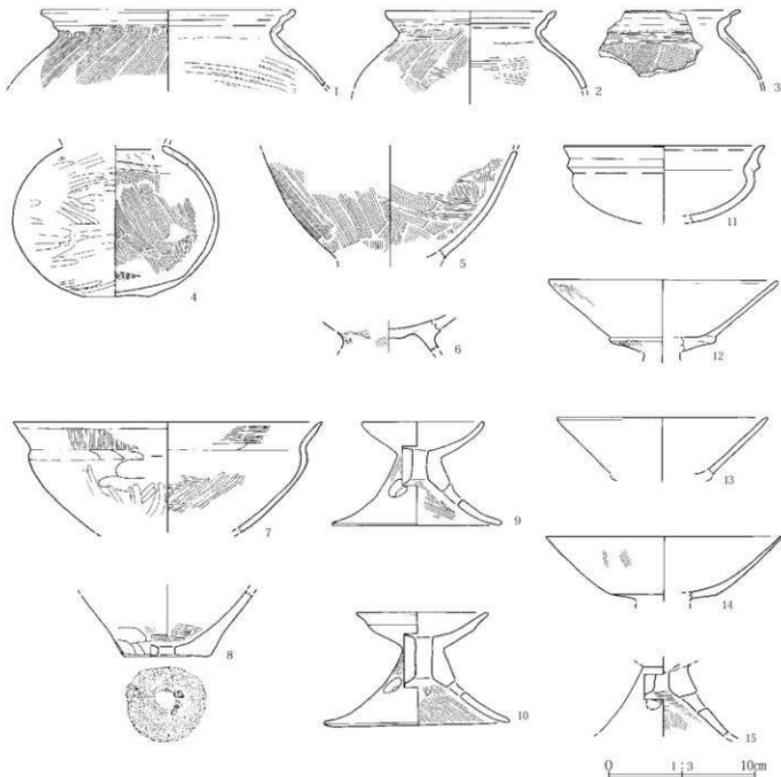
- 4 褐色土(10YR3/2) ローム粒子を10%含む。粘性普通。締まり普通。
- 5 暗褐色土(10YR3/3) ローム粒子を5%含む。粘性普通。締まり普通。
- 6 暗褐色土(10YR3/3) ローム粒子を5%含む。粘性普通。締まり普通。
- 7 褐色土(10YR4/6) 暗褐色土(10YR3/3)を10%含む。粘性普通。締まり普通。

6号竪穴建物P1D-D'

- 1 黒褐色土(10YR2/1) 焼土を40%含む。粘性普通。締まりやや弱い。
- 2 暗褐色土(10YR3/4) 焼土粒子を3%含む。粘性普通。締まり普通。

6号竪穴建物P2E-E'

- 1 黒褐色土(10YR3/2) ローム粒子を5%、焼土粒子を5%含む。粘性普通。締まり普通。
- 2 褐色土(10YR4/4) 径10mmのロームブロックを1%、焼土粒子を20%含む。粘性普通。締まりやや強い。



第29図 6号竪穴建物土層注記と出土遺物(1)

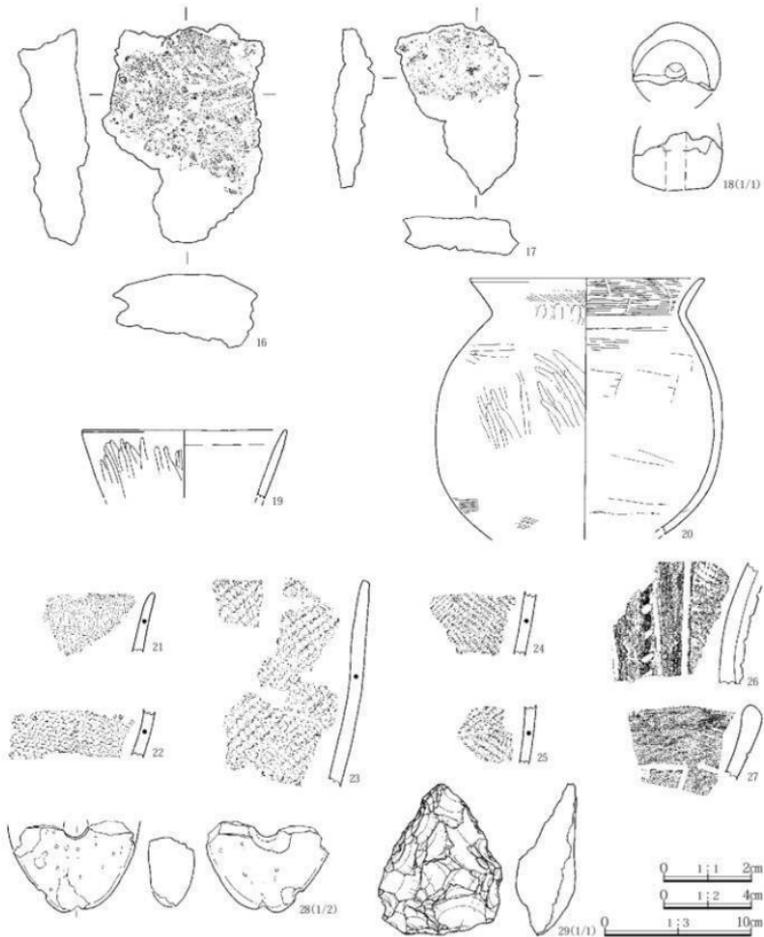
第3章 発見された遺構と遺物

③**石器・石製品** 石器・石製品はいずれも埋土からの出土であった。28・29の2点を図化・掲載した。

28は軽石製用途不明石製品、29はチャート製の石礫片である。29は遺構の年代観とは齟齬があり、流入した遺

物と考えられる。

④**非掲載出土遺物** なお、非掲載ではあるが、埋土から縄文土器(時期不明)有孔鉢口縁部片1点、用途不明の鉄製品片1点、炭化物片3点、種別不明の種子4点、珪



第30図 6号竪穴建物出土物(2)

質頁岩剥片1点(1.8g)、チャート剥片1点(4.9g)、ホルンフェルス剥片1点(9.0g)、黒色頁岩剥片1点(21.7g)が、床面直上からチャート剥片2点(13.7g)が、掘方から黒曜石剥片1点(0.1g)が出土している。

所見 本遺跡において検出された7棟の古墳時代前期の竪穴建物のうち、本竪穴建物と本竪穴建物が南東側大部分を掘り込んで破壊している7号竪穴建物、本竪穴建物の南隅部と南西辺を掘り込んで破壊している8号竪穴建物、さらに8号竪穴建物が南東側大部分を掘り込んで破壊している9号竪穴建物の4棟の竪穴建物が、調査区の西寄りの位置から纏まって検出された。この4棟はいずれもほぼ同一ないし類似した主軸方位をとっており、一連のものと考えられる。

本竪穴建物は、本遺跡から検出された竪穴建物の中で最大規模の竪穴建物であるが、北隅を含む北東側約1/5が調査区外に出、上部を削平され、また、竪穴建物の東隅付近、中央部南寄り付近、西隅付近、南西寄り付近など何箇所も攪乱されているので、検出状況はあまり良好とは言えない。

竪穴建物の北東辺の北寄り一部～北隅～北西辺の北寄り一部は調査区外に出ており、また、上部を削平されたり、8号竪穴建物に掘り込まれたり、攪乱されたりして、南西辺及び南東辺の一部、東隅などの部分も明瞭には検出されなかった。

このように残存状態は決して良好とは言いがたかったが、調査範囲内において検出された最大規模の竪穴建物に相応しく、古墳時代前期の纏まった土器の資料群を得ることが出来た。

時期 出土遺物から古墳時代前期のものと想定出来る。

(5) 7号竪穴建物(第31図、PL.12・13・25)

位置 調査区中央から西寄りの位置。調査区北壁に掛かる。22号ピットの東側に隣接する。X=23885～887、Y=-24499～502。

重複 南東側大部分を6号竪穴建物に掘り込まれる。

平面形状 北東・北西側が調査区外に出、南東側大部分を6号竪穴建物に掘り込まれて破壊され、南西側を攪乱されているため、全容は不明である。

主軸方位 N-33°-W。

規模 検出長径3.15m、検出短径2.15m、床面までの深

さ0.10m、掘方までの深さ約0.22m。確認面の標高は17.37～40m前後、床面の標高は17.29～35m前後、掘方底面の標高は17.11～31m前後。

検出面積 3.882㎡。

埋土 黒褐色土を約20%程度含み、粘性・締まり共に普通の褐色土をベースとする。

床面 黒褐色土を約5%程度含み、粘性・締まり共に普通の暗褐色土を約0.03～0.27m程度貼り付けて平坦な床面を形成している。

炉 調査範囲内においては検出されなかった。

貯蔵穴 調査範囲内においては検出されなかった。

柱穴 調査範囲内においては検出されなかった。

周溝 調査範囲内においては検出されなかった。

掘方 全体に地山を平坦に削り出しているが、細かな凹凸は見られる。

床下土坑 検出範囲の南隅付近の位置からP1が検出された。床下土坑としては小規模であるが、掘方から検出されたものであるため、ここに記載する。

形状 北西-南東方向に長い楕円形状。

主軸方位 : N-11°-E。

規模 : 長径0.52m、短径0.50m、深さ0.36m。

断面形状 : 比較的深く、しつかりとした逆台形状を呈する。

埋土 : 暗褐色土を15%程度、粘性・締まり普通の褐色土が堆積する。

遺物 古墳時代前期の土師器1・2・3の3点と縄文時代前期前葉の土器片1点を図化・掲載した。

古墳時代前期の土師器である1は竪穴建物西壁際の調査区北壁に懸かる位置の床面直上から出土した二重口縁の壺の口縁～頸部片で、口縁は東海西部系加藤壺に類似する形状を呈する。2は埋土中から出土した凸帯のある土師器壺の頸部片で、3も同じく埋土中から出土した土師器壺口縁部片である。

縄文土器片の4は埋土中から出土した。前期前葉の関山Ⅱ式の深鉢胴部片である。遺構の年代観とは齟齬があり、流入した遺物と考えられる。

所見 先述したように、北東・北西側が調査区外に出、南東側大部分を6号竪穴建物に掘り込まれ、南西側を攪乱されているため全容は不明である。また、6号竪穴建物同様、上部を削平されているため、残存状態も不良で

第3章 発見された遺構と遺物

ある。

6号竪穴建物が、位置を若干南東側にずらせたような場所に建てられているので、6号竪穴建物の前身建物であった可能性が考えられるが、出土遺物の年代観は、6・7号竪穴建物であり変わらない。

時期 出土遺物から古墳時代前期のものと想定出来る。

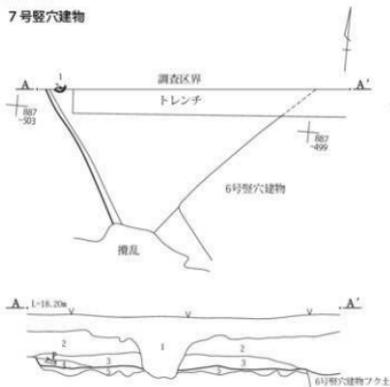
(6) 8号竪穴建物(第32~34図, PL.14・15・25・26)

位置 調査区中央から西寄りの位置。調査区南壁際。7号土坑の西側に隣接する。X=23876~882, Y=-24494~500。

重複 6号竪穴建物の南隅と南西辺の一部、9号竪穴建物の南東側大部分を掘り込む。

平面形状 北東-南西方向に僅かに長い隅丸長方形形状を呈する。

7号竪穴建物



7号竪穴建物 A-A'

- 1 礫層。(掘乱層)
- 2 相成土を含む暗褐色土。(掘乱層)
- 3 褐色土(10YR4/4) 黒褐色土(10YR3/2)20%をブロック状に含む。粘性普通、締まり普通。
- 4 黒褐色土(10YR3/2) 暗褐色土(10YR3/3)を20%含む。粘性普通、締まり普通。
- 5 暗褐色土(10YR3/3) 暗褐色土(10YR3/2)を5%含む。粘性普通、締まり普通。



7号竪穴建物 P1 B-B'

- 1 褐色土(10YR4/4) 暗褐色土(10YR3/3)を5%含む。粘性普通、締まり普通。

0 1:60 2m

主軸方位 N-55°E。

規模 検出長径4.22m、検出短径3.98m、床面までの深さ0.50m、掘りまでの深さ約0.60m。確認面の標高は16.88~17.22m前後、床面の標高は16.49~64m前後、掘り底面の標高は16.39~54m前後。

検出面積 16.138㎡。

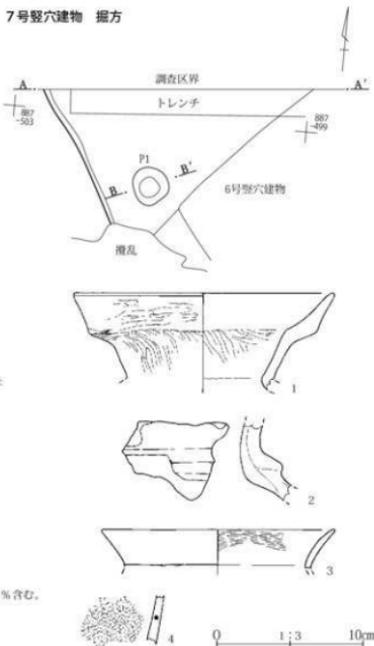
埋土 ローム粒子・ブロック等を含み、粘性・締まり共に普通の暗褐色土をベースとする。

床面 ローム粒子及び焼土粒を約1%程度含む、粘性・締まり共に普通の黒褐色土を約0.08~0.25m程度貼り付けて平坦な床面を形成している。

竪穴建物の中央から南西隅にかけて、部分的に焼土が集中的に検出出来る範囲が点々と見られた。

炉 竪穴建物の中央から北西寄りの位置、X=23880.5、

7号竪穴建物 掘方



第31図 7号竪穴建物と出土遺物

Y=24498付近から、主軸方位N-33°-W、長径0.79m、短径0.73mの不整形の平面形状を呈し、深さ0.13m程度で、黒褐色土の埋土に約20%程度の焼土を層状に含む掘り込みが検出され、P2として調査された。

位置的には埴がであってもおかしきはないものの、埴にしては焼土の含有量が少な過ぎるきらいがあり、また、石などで囲われていた形跡も全く無く、炭化物の検出も無いので、調査状況から見れば埴とは考えにくい要素も少なくない。しかしながら、一応、ここに報告しておく。

底部に薄く、ロームブロックを約10%程度、粘性普通で締まりやや弱い暗褐色土が部分的に堆積する。

断面は浅く薄い不整なレンズ状を呈する。

貯蔵穴 竪穴建物の北隅付近に位置し、床面から掘り込まれたP1が貯蔵穴であると考えられる。なお、本貯蔵穴からの遺物の出土は皆無であった。

規模：長径1.25m、短径0.97m、深さ0.27m。

主軸方位：N-37°-W。

形状：北西-南東方向に長い楕円形状を呈する

断面形状：深くしかりとしたレンズ状を呈する。

埋土：焼土粒を含み、粘性やや有る暗褐色土が堆積している。

柱穴 検出されなかった。

周溝 検出されなかった。

掘方 全体に凹凸激しく掘り込まれている。とくに南東壁際、南西壁際、北東壁際が、幅約0.25~1.16m前後、深さ約0.12~0.21m程度の溝状に、それぞれ一段と深く掘り込まれている。

床下土坑 竪穴建物の南隅からP3が、東隅からP4がそれぞれ検出された。

P3

形状：北西-南東方向に長い不整楕円形状を呈する。

主軸方位：N-46°-W。

規模：長径0.60m、短径0.46m、深さ0.16m。

断面形状：浅いが、比較的しかりとした掘方を有し、逆台形状を呈する。

埋土：上層にローム粒子を約5%程度、焼土粒を約10%程度含み、粘性やや強く、締まりやや弱い黒褐色土が、下層にローム粒子を約5%程度含み、粘性・締まり共に普通な暗褐色土が堆積する。

所見：完形の土器3点(11~13)が出土しており、床下取

納のための土坑であった可能性が考えられる。

P4

形状：北西-南東方向に長い隅丸長方形形状を呈する。

主軸方位：N-36°-W。

規模：長径0.85m、短径0.51m、深さ0.16m。

断面形状：上辺が広く比較的浅い逆台形状を呈する。

埋土：ローム粒子を約5%程度含み、粘性・締まり共に普通の暗褐色土が堆積する。

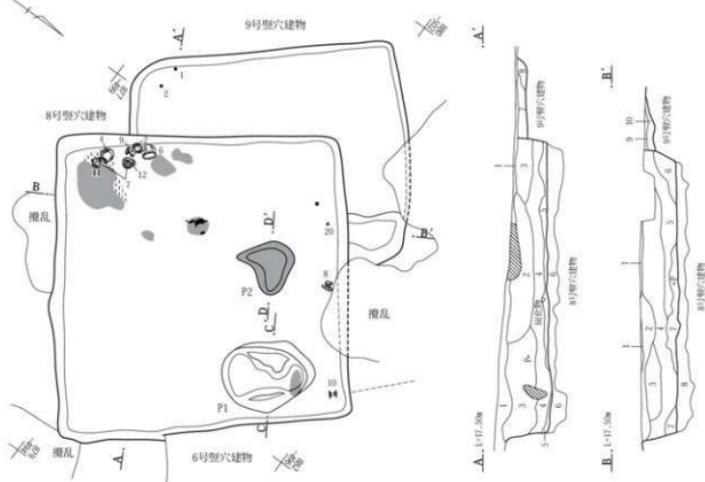
所見：遺物の出土は無かったが、整った形態であり、P3同様、床下取納のための土坑であった可能性が考えられる。

遺物 出土遺物20点を図化・掲載した。

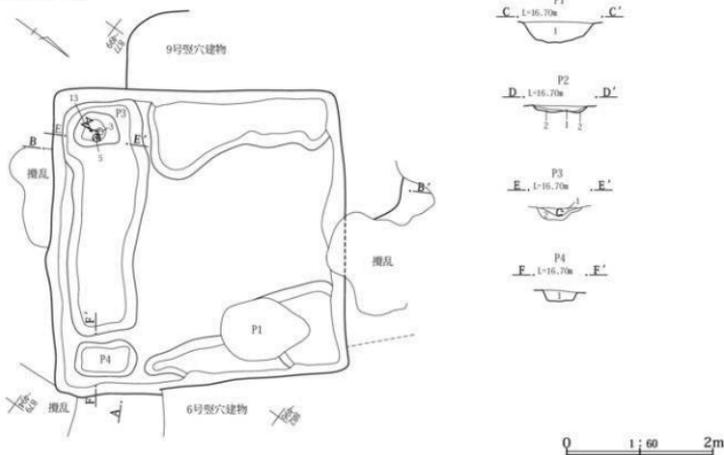
①**古墳時代前期の土器** いずれも土師器で、竪穴建物の南隅南西壁際付近から完形のものが出土した。また、北西壁際中央付近及び北隅付近の床面直上からも完形のものが出土している。南隅床下土坑P3からも3点の完形ないしほぼ完形に近い土器が出土した。

埋土中から出土した1は土師器壺肩部~底部片。竪穴建物南隅南西壁際付近から出土した2は床面から約0.22m上から出土した完形の土師器直口壺。掘方埋土から出土した3は口縁部を一部欠いた土師器直口壺。竪穴建物南隅南西壁際付近から出土した4は床面から約0.02m上から出土した完形の土師器甕で、体部外面3箇所へ煤が付着。掘方から検出された床下土坑P3の底部から出土した5は完形の土師器小型壺。竪穴建物南隅南西壁際付近から出土した6は4と同様、共に床面から約0.02m上から出土した完形の土師器甕で、体部内面片側に淡褐色付着物があり、体部内面中に水平の噴水ラインが見られる。同じく竪穴建物南隅南西壁際付近の床面から約0.3m上から出土した7は土師器直口壺底部片。8は竪穴建物北西壁際中央付近の床面直上から出土した完形の土師器器台である。竪穴建物南隅南西壁際付近から出土した9は床面から約0.24m上から出土した完形の土師器器台。竪穴建物北隅付近壁際の床面直上から出土した10も完形の土師器器台で、9と同巧である。竪穴建物南隅南西壁際付近から出土した11は床面から約0.04m上から出土した完形の土師器S字甕である。体部外面は炭化物吸着、体部内面は剥離している。竪穴建物南隅南西壁際付近から出土した12は床面から約0.65m上から出土した完形の土師器高杯。掘方から検出された床下土坑

8・9号竪穴建物



8号竪穴建物 掘方



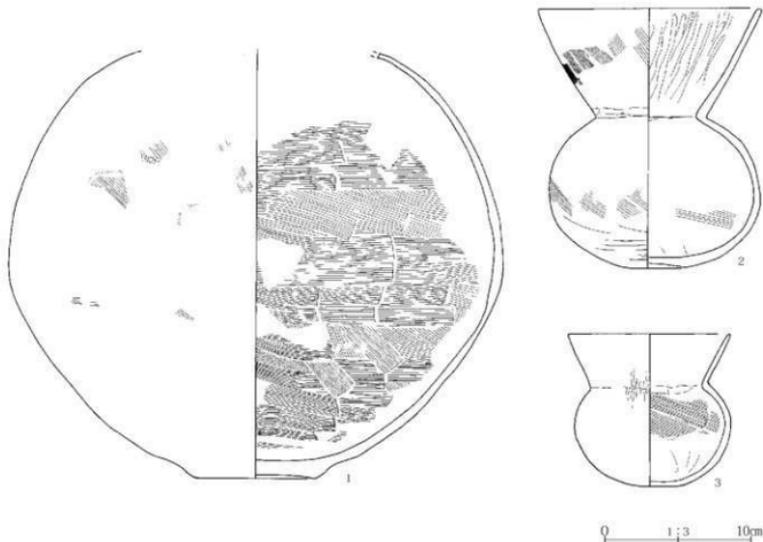
第32図 8・9号竪穴建物

第3節 古墳時代の遺構と遺物

8・9号竪穴建物A-A'

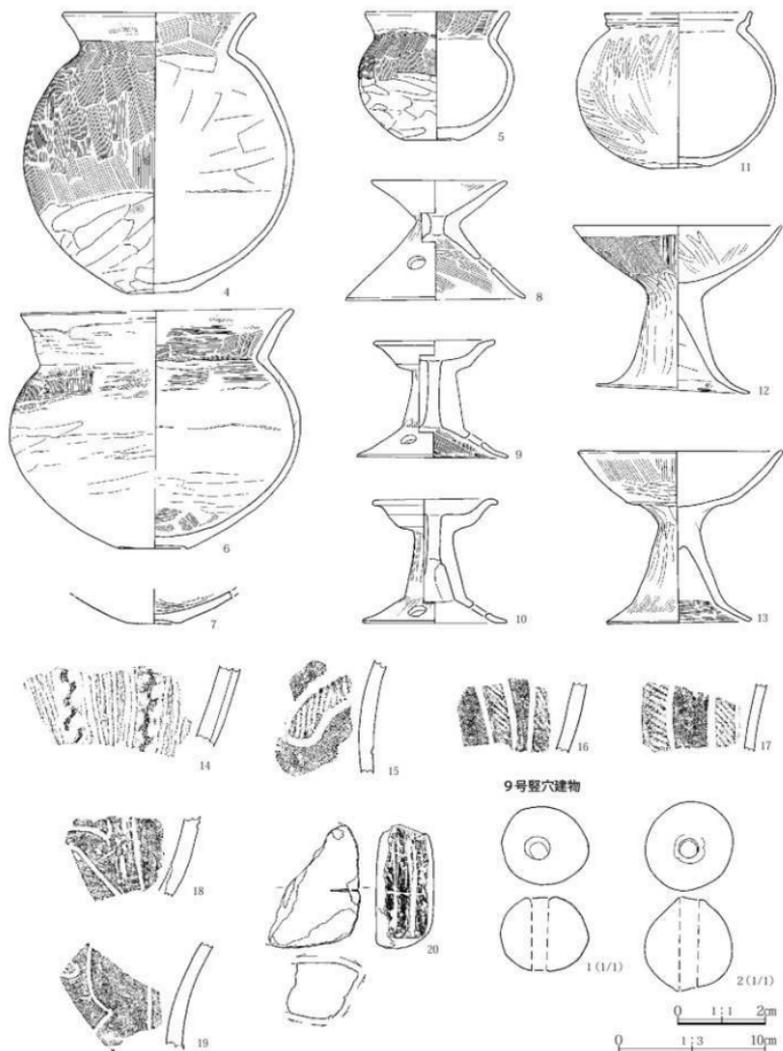
- 1 褐灰色土(10YR4/1) 炭を5%、白色粘土(10YR7/1)を5%含む。粘性やや強い、締まりやや強い、攪乱上。(B-B' 1層)
 - 2 暗褐色土(10YR3/4) 粘性普通、締まり普通。(B-B' 2層)
 - 3 暗褐色土(10YR3/3) ローム粒子を10%、炭を1%含む。粘性普通、締まり普通。
 - 4 暗褐色土(10YR3/3) ローム粒子を5%、径1~10mmのロームブロックを3%含む。粘性普通、締まり普通。(B-B' 4層)
 - 5 暗褐色土(10YR3/3) 径1~5mmのロームブロックを3%、炭を3%、焼土粒子を3%含む。粘性普通、締まりやや強い。(B-B' 7層)
 - 6 黒褐色土(10YR3/2) ローム粒子を1%、焼土粒子を1%含む。粘性普通、締まり普通。(B-B' 8層)
 - 7 暗褐色土(10YR3/4) 粘性普通、締まり普通。
 - 8 暗褐色土(10YR3/4) ローム粒子を20%含む。粘性普通、締まり普通。
- #### 8・9号竪穴建物B-B'
- 1 褐灰色土(10YR4/1) 炭を5%、白色粘土(10YR7/1)を5%含む。粘性やや強い、締まりやや強い、攪乱上。(A-A' 1層)
 - 2 暗褐色土(10YR3/4) 粘性普通、締まり普通。(A-A' 2層)
 - 3 褐色土(10YR4/4) ローム粒子を5%含む。粘性普通、締まり普通。
 - 4 暗褐色土(10YR3/3) ローム粒子を5%、径1~10mmのロームブロックを3%含む。粘性普通、締まり普通。(A-A' 4層)
 - 5 暗褐色土(10YR3/3) ローム粒子を5%、焼土粒子を1%含む。粘性普通、締まり普通。

- 6 黒褐色土(10YR3/2) ローム粒子を1%、焼土粒子を1%含む。粘性普通、締まり普通。
 - 7 暗褐色土(10YR3/3) 径1~5mmのロームブロックを3%、炭を3%、焼土粒子を3%含む。粘性普通、締まりやや強い。(A-A' 5層)
 - 8 黒褐色土(10YR3/2) ローム粒子を1%、焼土粒子を1%含む。粘性普通、締まり普通。(A-A' 6層)
 - 9 暗褐色土(10YR3/3) 焼土20%を粒状、ブロック状を含む。粘性普通、締まりやや強い。
 - 10 褐色土(10YR4/4) 焼土粒子を40%含む。粘性普通、締まり普通。
- #### 8号竪穴建物P 1C-C'
- 1 暗褐色土(10YR3/3) 焼土粒子を含む。粘性やや有り。
- #### 8号竪穴建物P 2D-D'
- 1 黒色土(10YR2/1) 焼土20%を屑状を含む。粘性普通、締まりやや強い。
 - 2 暗褐色土(10YR3/4) ロームブロックを含む。粘性普通、締まりやや強い。
- #### 8号竪穴建物P 3E-E'
- 1 黒褐色土(10YR3/1) ローム粒子を5%、焼土を10%含む。粘性やや強い、締まりやや強い。
 - 2 暗褐色土(10YR3/4) ローム粒子を5%含む。粘性普通、締まり普通。
- #### 8号竪穴建物P 4F-F'
- 1 暗褐色土(10YR3/4) ローム粒子を5%含む。粘性普通、締まり普通。



第33図 8・9号竪穴建物土層注記と8号竪穴建物出土遺物(1)

第3章 発見された遺構と遺物



第34図 8号竪穴建物出土遺物(2)と9号竪穴建物出土遺物

の底部から出土した13は完形の土師器高杯。

②**縄文土器** 埋土中から縄文時代中期後葉～後期初頭の土器片14～19の6点が出土した。いずれも遺構の年代観とは相離があり、流入した遺物であると考えられる。14は中期後葉加曾利E2式の深鉢胴部片である。

その他の15～19は、縄文時代後期初頭称名寺式の深鉢胴部片である。15～17は称名寺I式、18・19は称名寺II式である。

③**石器・石製品** 20は埋土中から出土した砥石片である。切り砥石で3面使用。左辺側の分割面にも部分的に研磨面が認められる。

④**非掲載出土遺物** なお、非掲載ではあるが、埋土中から用途不明の金属製品片が1点、黒色頁岩剥片1点(4.8g)、P1埋土よりホルンフェルス剥片1点(72.3g)、掘方埋土から土師器腹口縁部片が出土している。

所見 調査区の西寄りの位置から纏まって検出された、主軸方位をほぼ同じくする4棟の古墳時代前期の6～9号竪穴建物のうちの一棟で、重複関係からこれら竪穴建物群の中では最も新しいものと考えられる。

北西辺中央部の一部の上側を攪乱されているが、本遺跡から検出された10棟の竪穴建物中で唯一、その全容が検出出来た竪穴建物で、残存状態は良好である。

先述した通り、多くの完形の土器が出土しており、本遺跡から検出された7棟の古墳時代前期の竪穴建物群の年代決定の指標になるような資料が纏まって得られた点においても注目できる。

時期 出土遺物から古墳時代前期のものと想定出来る。

(7)9号竪穴建物(第32・34図、PL.14・15・26)

位置 調査区中央から西寄りの位置。調査区南壁際。

X=23877～881、Y=-24498～501

重複 8号竪穴建物の南東側大部分を掘り込まれる。

平面形状 北西-南東方向に長い隅丸長方形形状を呈していたものと推測される。

主軸方位 N-42°-W。

規模 検出長径3.78m、検出短径3.06m、掘方までの深さ約0.15m。確認面の標高は16.93～17.05m前後、掘方底面の標高は16.88～17.00m前後。

検出面積 5.776㎡。

埋土 粘性・締まり共に普通の暗褐色土をベースとし、

壁際にローム粒子を約20%程度含む粘性・締まり共に普通の暗褐色土が三角堆積している。

床面 調査範囲においては検出されなかった。

炉 調査範囲においては検出されなかった。

貯蔵穴 調査範囲においては検出されなかった。

柱穴 調査範囲においては検出されなかった。

周溝 調査範囲においては検出されなかった。

掘方 全体に凹凸激しく掘り込まれている。

床下土坑 調査範囲においては検出されなかった。

遺物 出土遺物2点を図化・掲載した。1・2いずれも竪穴建物南隅付近の掘方底面直上から出土した完形の土製丸玉である。いずれも古墳時代前期のものと考えられる。

所見 調査区の西寄りの位置から纏まって検出された、主軸方位をほぼ同じくする4棟の古墳時代前期の6～9号竪穴建物のうちの一棟で、規模や重複関係から8号竪穴建物の前身竪穴建物であったと考えられる。

上面を甚だしく削平されている上に、北西辺中央部の一部を攪乱され、南東側の大部分を8号竪穴建物に掘り込まれて破壊され、残存状態は不良である。掘方のみが検出された。

時期 出土遺物から古墳時代前期のものと想定出来る。

2. 土坑

本遺跡から検出された古墳時代前期の土坑は調査区の中央から西寄りの位置から検出された7号土坑1基のみである。

7号土坑(第35図、PL.16)

位置 調査区の中央から西寄りの位置。8号竪穴建物の東側、8号土坑及び19号ピットの北側に隣接する。

X=23879～880、Y=-24492～493。

重複 なし。

主軸方位 N-62°-E。

規模 全長1.66m、上幅1.08m、下幅0.87m、深さ0.51m。

平面形状 北東-南西方向に長い不整形円形形状を呈する。

断面形状 しっかりとした掘方を有しており、幅の広い逆台形状を呈する。

埋土 主体となるのは径1～5mmのローム粒子を約5%

第3章 発見された遺構と遺物

程度含み、粘性やや有る暗褐色土。壁際に径1～5mmのローム粒子を約10%程度含み、粘性やや有る暗褐色土が三角堆積している。

遺物 なし。

所見 上面の一部を攪乱されているが、残存状態は比較的良好である。底面の中央部南西寄りの位置に、長径0.33m、短径0.29m、深さ0.07mの北東-南西方向に長い楕円形状の平面形態を呈するピット状の小さな掘り込みが検出された。土坑の用途や機能は不明である。

土坑周辺部の標高は17.31～36m前後、坑底の標高は16.90～17.04m前後である。

古墳時代前期の竪穴建物群やピット群との新旧関係あるいは同時併存かという点は、それらの遺構との重複関係が無いため明らかにすることが出来なかった。

時期 埋土の状態から古墳時代前期のものと考えられる。

7号土坑



7号土坑 A-A'

- 1 暗褐色土(10YR3/4) 径1～5mmのローム粒子を5%含む。粘性やや有り。
- 2 暗褐色土(10YR3/4) 径1～5mmのローム粒子を10%含む。粘性やや有り。

18号ピット A-A'

- 1 暗褐色土(10YR3/3) 炭化物粒子を含む。
- 2 黒褐色土(10YR2/3) 径1～3mmのローム粒子を2%、炭化物粒子、焼土粒子を含む。

19号ピット A-A'

- 1 暗褐色土(10YR3/3) 径1～5mmのローム粒子を5%含む。

21号ピット A-A'

- 1 暗褐色土(10YR3/4) ローム粒子を含む。

22号ピット A-A'

- 1 暗褐色土(10YR3/3) 焼土粒子を含む。

23号ピット A-A'

- 1 暗褐色土(10YR3/3) 粘性やや有り。

24号ピット A-A'

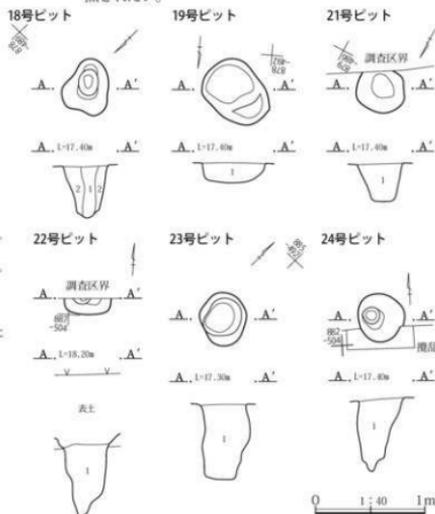
- 1 暗褐色土(10YR3/4) ローム粒子を含む。

3. ピット(第35図、PL.16・17)

古墳時代前期のものと考えられるピットは、いずれも調査区の西側から検出された18・19・21～24号ピットの5基のピットである。遺物の出土は皆無であるが、埋土の状況から古墳時代前期のもの判断された。

調査区の中央から少し西側に寄った位置の南壁際から18・19・21号ピットの3基が、調査区西寄りの6～9号竪穴建物群が集中する場所よりもさらに西側から22・24号ピットの2基が検出され、23号ピットは先述した通り6号竪穴建物の南東側を掘り込んだ状態で検出されている。少なくとも23号ピットのみは6号竪穴建物よりも新しいことは判明したが、他の古墳時代前期のピット群と、竪穴建物群や7号土坑との新旧関係ないし同時併存かという点を明らかにすることは出来なかった。

また、これらのピットは、掘立柱建物や櫛の柱穴を構成するものではなく、用途・機能についても不明である。なお、各ピットの詳細については、後掲の第3表ピット一覧表に、全時代のピットを纏めて掲載したので、参照されたい。



第35図 7号土坑、18・19・21～24号ピット

第3章 発見された遺構と遺物

遺物 縄文時代中～後期の土器片10点を図化・掲載した。

後期前葉堀之内1式の深鉢片が5点ある(1～5)。1は底面から0.24～0.31m上から出土した口縁～胴部上位片、2は底面から0.06m上から出土した口縁部片、3は底面から0.26m上から出土した胴部片、4は底面から0.06m上から出土した口縁部片、5は底面から0.18m上から出土した胴部片。

後期初頭称名寺式の深鉢片が2点(6・7)ある。6は底面から0.18m上から出土した口縁部片、7は底面から0.064m上から出土した称名寺Ⅱ式の胴部片である。

これらの他、8は底部から0.24m上から出土した後期前葉の深鉢底部片。9は底部から0.28m上から出土した中期後葉加曾利E3式の深鉢底部片。10は底面直上から

出土した後期前葉の完形の蓋である。

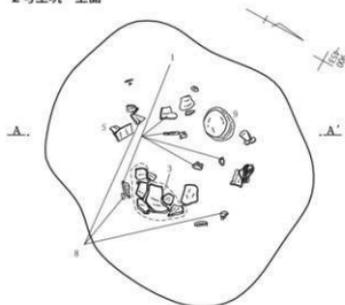
なお、非掲載であるが、埋土中から加曾利E3式土器片が7点、加曾利E4式土器片が3点、称名寺I式土器片2点、称名寺Ⅱ式土器片2点、称名寺式土器片1点、堀之内I式土器片10点、蓋片2点、型式不明の中期後葉～後期前葉の土器片26点が出土している。

所見 用途や機能は不明である。埋土中から多量の縄文時代の土器片が出土した。

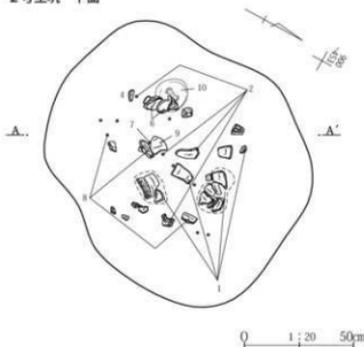
確認面の標高は17.09～10m前後、底部の標高は16.72～74m前後である。しっかりとした掘方を有する。

時期 出土遺物から縄文時代後期前葉堀之内I式期のものと考えられる。

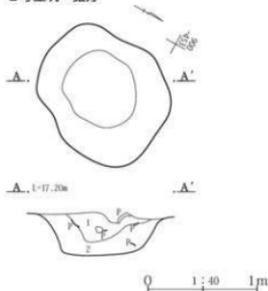
2号土坑 上面



2号土坑 下面



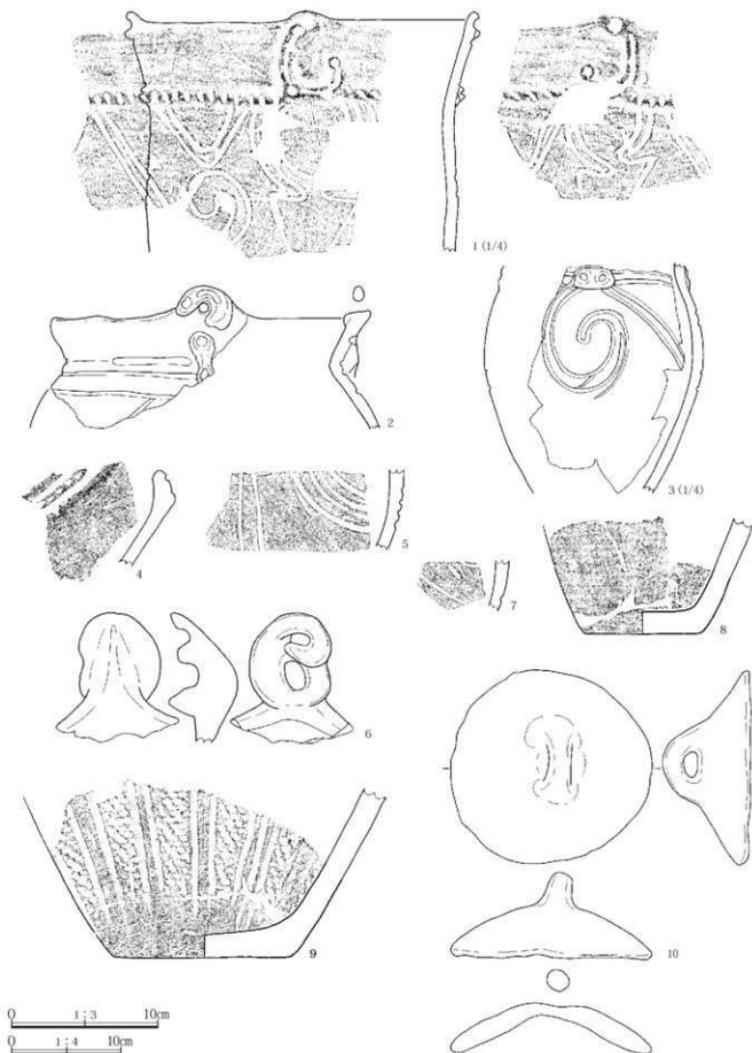
2号土坑 掘方



2号土坑 A-A'

- 1 黒褐色土 (10YR3/2) ローム粒子を1%含む。粘性普通、締まりやや強い。
- 2 暗褐色土 (10YR3/4) 黒褐色土 (10YR3/2) 粒子を5%含む。粘性普通、締まりやや強い。

第37図 2号土坑



第38図 2号土坑出土遺物

第3章 発見された遺構と遺物

(3) 3号土坑(第39~41図、PL.18・19・27・28)

位置 調査区の東寄り。2号井戸の北東側、2号土坑の南西側、4号溝の北側に位置する。X=23897~898、Y=-24452~453。

重複 なし。

主軸方位 N-31°-E。

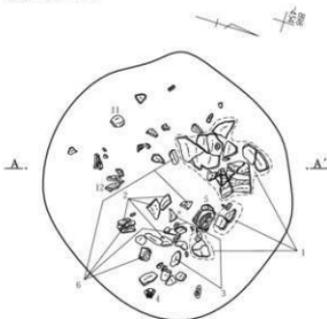
規模 長径1.17m、上幅1.08m、下幅0.37m、深さ0.25m。

平面形状 東西に長い楕円形状を呈する。

断面形状 レンズ状を呈する。

埋土 ローム粒子を約10%程度、径1~5mm程度のロームブロックを約1%程度含む、粘性普通で締まりやや強い黒褐色土主体。底部及び壁側に薄くローム粒子を約1%程度、径1~5mmのロームブロックを約5%程度含む、粘性普通で締まりやや強い灰黄褐色土が堆積している。

3号土坑 上面

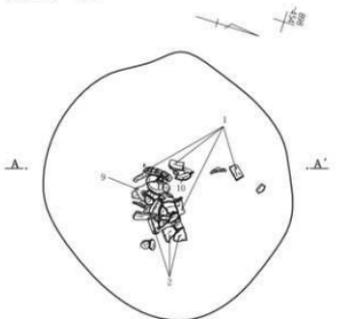


遺物 縄文時代後期初頭称名寺式を中心とした土器10点(1~10)と石器2点(11・12)を回収・掲載した。

称名寺式の鉢片は8点(1~9)出土した。1は底面から0.19m上から出土した称名寺Ⅱ式深鉢口縁部~胴部中位片、2は底面から0.16m上から出土した称名寺Ⅱ式深鉢口縁部~胴部上位片、3は底面から0.16m上から出土した称名寺Ⅰ式深鉢口縁部片、4も底面から0.17m上から出土した称名寺Ⅰ式深鉢口縁部片、5は底面から0.20m上から出土した称名寺Ⅰ式深鉢底部片、6は底面から0.14m上から出土した称名寺Ⅰ式浅鉢口縁部片、7は埋土中から出土した称名寺式深鉢把手片、8は底面から0.16m上から出土した称名寺Ⅱ式深鉢胴部片である。

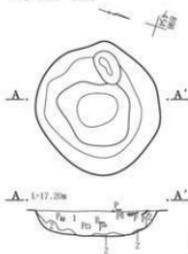
これらの他、蓋が2点(9・10)出土した。9・10は、共に底面から0.07m上から出土した型式不明の後期前葉の蓋である。

3号土坑 下面



0 1:20 50m

3号土坑 掘方



3号土坑 A-A'

- 1 黒褐色土(10YR3/2) ローム粒子を10%、径1~5mmのロームブロックを1%含む。粘性普通、締まりやや強い。
- 2 灰黄褐色土(10YR4/2) ローム粒子を1%、径1~5mmのロームブロックを5%含む。粘性普通、締まりやや強い。

第39図 3号土坑

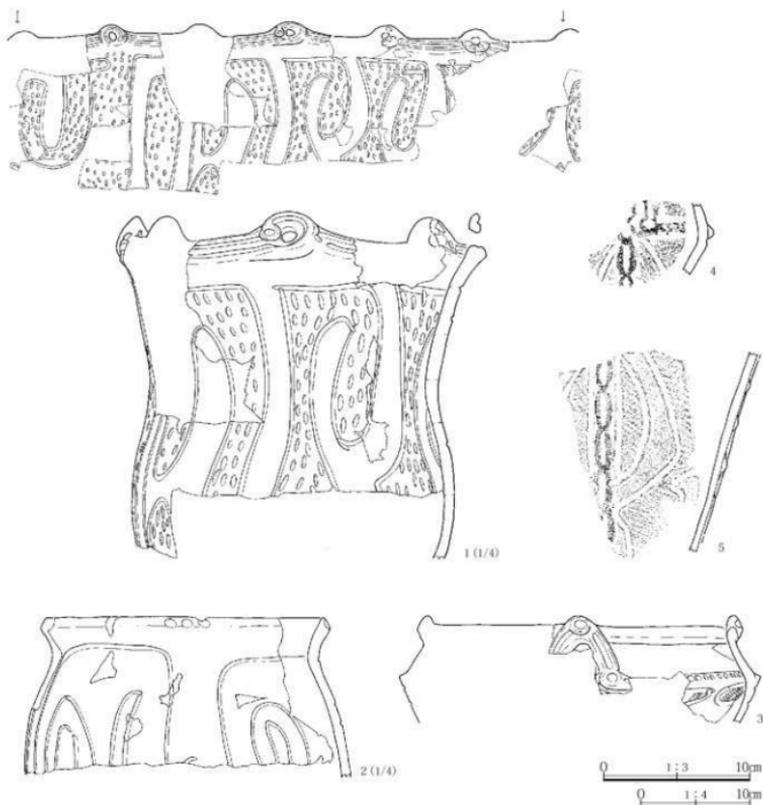
石器は2点を採り上げた。11は底面より約0.13m上から出土した粗粒輝石安山岩製凹石、12は底面直上から出土した粗粒輝石安山岩製石皿左辺上端部片である。

なお、非掲載であるが、埋土中から、加曽利E3式土器片3点、加曽利E4式土器片2点、称名寺I式土器片4点、称名寺II式土器片9点、蓋片1点、型式名不明ながら前期前葉の土器片1点、中期後葉～後期前葉の土器片11点、炭化物片1点などが出土している。

所見 埋土中から大量の縄文時代土器片が出土したが、用途や機能は不明である。

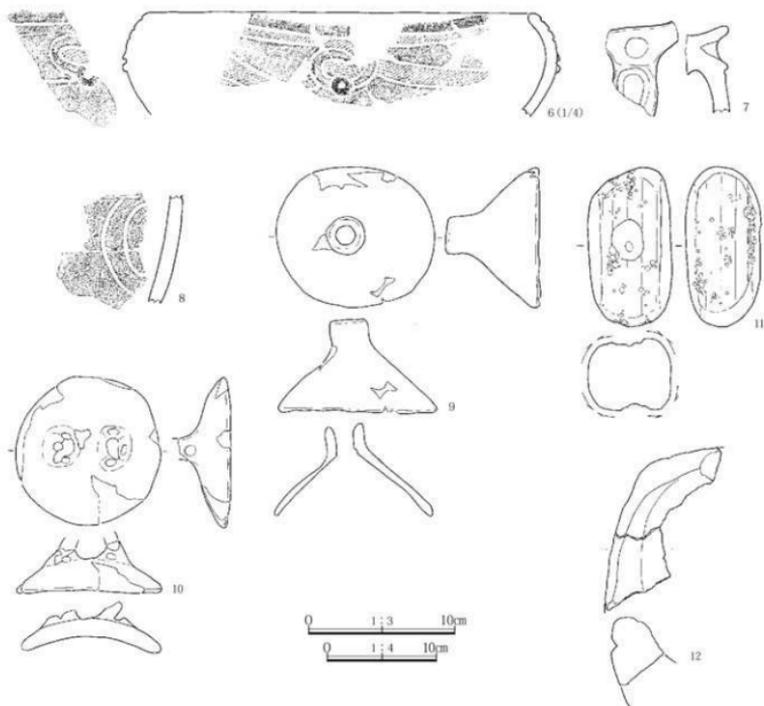
確認面の標高は17.08m前後、底部の標高は16.86～93m前後である。比較的しっかりとした掘方を有する。

時期 出土遺物から縄文時代後期初頭称名寺II式期のものと考えられる。



第40図 3号土坑出土遺物(1)

第3章 発見された遺構と遺物



第41図 3号土坑出土遺物(2)

(4) 5号土坑(第42図、PL.19・28)

位置 調査区の東寄り。3号井戸の南東側、5号溝の南

西側に位置する。X=23899~900、Y=-24440~441。

重複 南端部を1号溝に掘り込まれる。

主軸方位 N-0°。

規模 長径1.23m、上幅1.21m、下幅0.63m、深さ0.22m。

平面形状 不整円形状を呈する。

断面形状 幅が広く薄いレンズ状を呈する。

埋土 粘性普通で締まりやや強い暗褐色土が堆積する。

遺物 埋土中から出土した縄文時代後期初頭称名寺式の鉢片3点を図化・掲載した。1は称名寺式の浅鉢口縁部片、2・3は称名寺Ⅱ式の深鉢口縁部片である。

なお、非掲載であるが、埋土中から加曽利E3式土器片4点、加曽利E4式土器片3点、称名寺I式土器片3点、称名寺Ⅱ式土器片3点、型式名不明の中期後葉～後期前葉の土器片11点が出土した。

所見 用途や機能は不明である。確認面の標高は16.93~98m前後、底部の標高は16.72~76m前後である。

時期 出土遺物から縄文時代後期初頭称名寺Ⅱ式期のものと考えられる。

(5) 6号土坑(第42図、PL.19)

位置 調査区の東寄り。2号溝の西側に隣接し、10号ピットのすぐ東側に近接する。X=23092、Y=-24446~447。

重複 上面を2号竪穴建物に、南端部を1号井戸にそれぞれ掘り込まれる。

主軸方位 N-18°-W。

規模 検出長径0.90m、上幅1.13m、下幅0.97m、深さ0.27m。

平面形状 北側が調査区外に出るため、全容は不明である。検出範囲では南北に長い隅丸長方形形状を呈している。

断面形状 上部を2号竪穴建物によって削平されているため断面は薄く、扁平なレンズ状を呈する。

埋土 径約1～5mm程度のロームブロックを約3%程度含み、粘性普通で締まりやや強い褐色土が堆積している。

遺物 なし。

所見 用途や機能は不明である。確認面の標高は16.84m前後、底部の標高は16.68～75m前後である。検出範囲の中央付近に、径約0.31m・深さ約0.13m程度のほぼ円形状の小規模なピット状の掘り込みが検出された。上面を2号竪穴建物に掘り込まれているため、掘方は浅く、断面は中央部が凹んだ浅い逆台形状を呈している。

時期 埋土の状態から縄文時代のものと考えられる。

2. ピット(第43・44図, PL.20・21・28)

縄文時代のものと考えられるピットは、主に調査区の中央から東側から検出された10～12・14～17・20号ピットの8基のピットである。

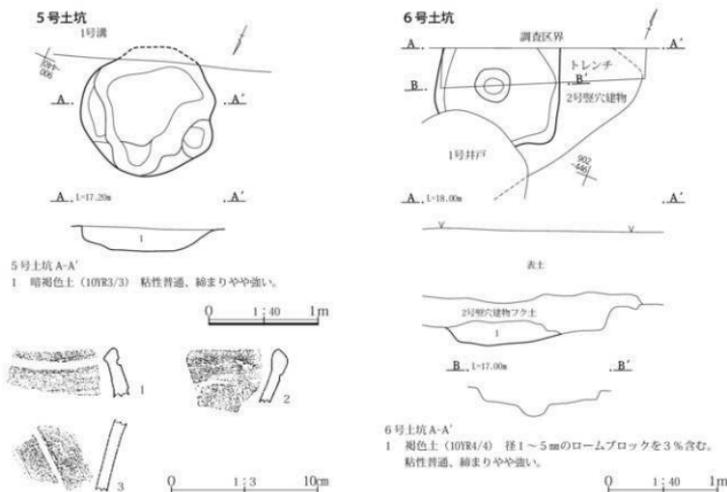
調査区の東端寄りの位置からは10・11号ピットの2基が、調査区中央からやや東寄りの位置からは12号ピットが単独で、調査区の中央付近からは14～17号ピットが、調査区中央から南西に寄った位置から20号ピットが単独でそれぞれ検出された。

また、これらのピットの用途・機能については不明である。

なお、各ピットの詳細については、後掲の第3表ピット一覧表に、全時代のピットを纏めて掲載したので、参照されたい。

12号ピット埋土中からは縄文時代後期初頭称名寺Ⅱ式の深鉢口縁部片が1点(1)出土している。

また、非掲載であるが、10号ピット埋土中から縄文時代中期後葉加曾利Ⅲ3式の土器片が1点、14号ピット埋土中から型式名不明の中期後葉～後期前葉の土器片3点、

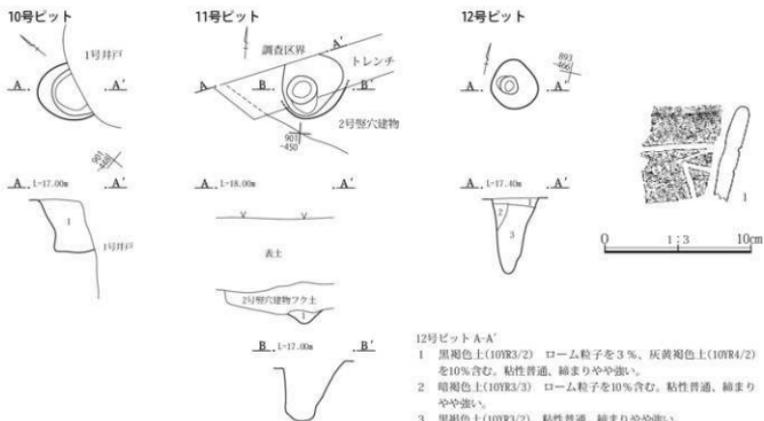


第42図 5・6号土坑と5号土坑出土遺物

第3章 発見された遺構と遺物

16号ピットから縄文時代前期前葉の土器片が1点、17号ピットから縄文時代中期後葉加曽利E4式の土器片が1点、20号ピットから縄文時代前期前葉黒浜式の土器片1

点と型式名不明の前期前葉の土器片1点の計2点がそれぞれ出土している。



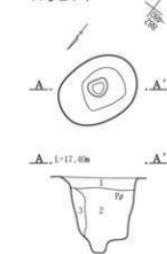
10号ピット A-A'

1 暗褐色土(10YR3/3) 粘性普通、締まりやや強い。

11号ピット A-A'

1 褐色土(10YR4/4) 径1~5mmのロームブロックを3%含む。粘性普通、締まりやや強い。

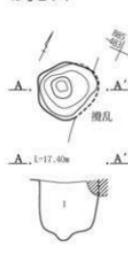
14号ピット



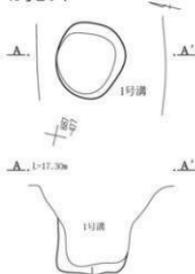
14号ピット A-A'

- 1 黒褐色土(10YR3/2) ローム粒子を5%含む。粘性普通、締まり普通。
- 2 黒褐色土(10YR3/2) ローム粒子を10%、暗褐色土(10YR3/3)を5%含む。粘性普通、締まり普通。
- 3 黒褐色土(10YR3/3) ローム粒子を10%、径1~10mmのロームブロックを20%含む。粘性普通、締まりやや強い。

15号ピット



16号ピット



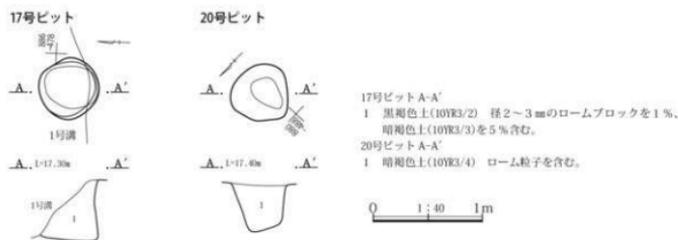
15号ピット A-A'

1 暗褐色土(10YR3/3) ローム粒子を2%含む。

16号ピット A-A'

1 暗褐色土(10YR3/3) ローム粒子を3%含む。粘性普通、締まり普通。

第43図 10~12・14~16号ピットと12号ピット出土遺物



第44図 17・20号ピット

第5節 時期不明の遺構と遺物

調査区の中央から南西寄りの位置から時期不明の8号土坑が検出された。

8号土坑(第45図、PL. 4)

位置 調査区の中央から南西寄りの位置。7号の南側、19号ピットの西側に隣接する。X=23877~879、Y=-24492~493。

重複 なし。

主軸方位 N-8°-W。

規模 長径1.17m、上幅0.91m、下幅0.76m、深さ0.24m。

平面形状 北西-南東方向に長い不整形円形状を呈する。

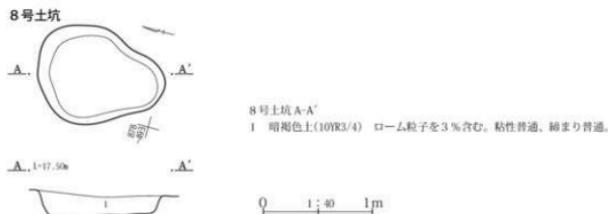
断面形状 掘方は浅く、断面は薄く幅広いレンズ状を呈する。

埋土 ローム粒子を約3%程度含み、粘性・締まり共に普通の暗褐色土が堆積する。

遺物 なし。

所見 用途や機能は不明である。確認面の標高は17.25~30m前後、底部の標高は17.08~10m前後である。

時期 出土遺物がなく、埋土の状態が中・近世、奈良・平安時代、縄文時代いずれとも異なり、時期不明である。



第45図 8号土坑

第6節 遺構外出土遺物

遺構外から出土した遺物について述べる。図化・掲載した遺構外出土の遺物は、縄文時代中期後葉～後期中葉の土器、中・近世陶磁器1点、縄文時代石器3点、近世金属製品1点である。

なお、細かな調整や特徴等については、後掲の第4表遺物観察表に明示してあるので、詳細については参照されたい。

(1) 遺構外出土縄文土器(第46図, PL.28)

遺構外出土遺物の内、縄文時代の土器について述べる。18点を図化、掲載した。縄文時代前期前葉、中期後葉、後期初頭、後期前葉、後期後葉の土器である。

前期前葉の土器は1～3の3点で、1は開山1式の深

鉢胴部片、2・3は共に黒浜式の深鉢胴部片である。

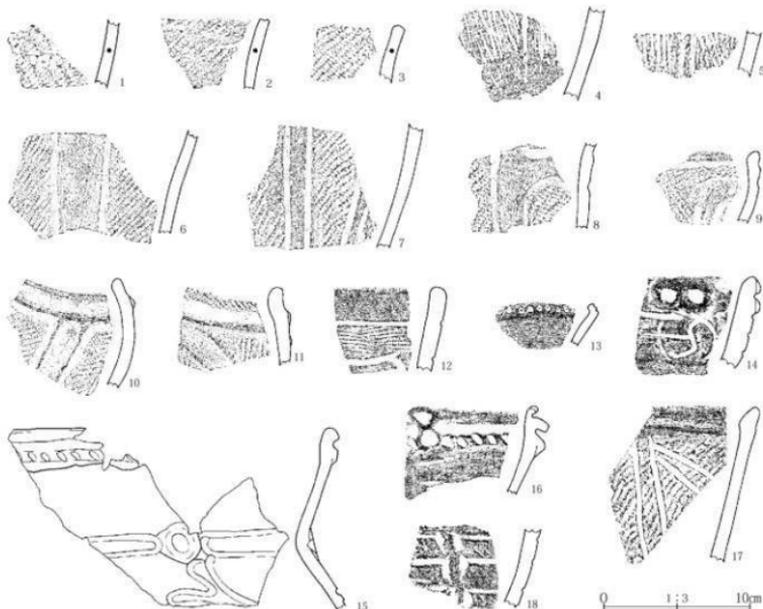
中期後葉の土器は4～11の8点で、4・5は共に加曾利E2式の深鉢胴部片、6・7・8はいずれも加曾利E3式の深鉢胴部片、9・10・11はいずれも加曾利E4式の深鉢口縁部片である。

後期初頭の土器は12・13の2点で、12は称名寺1式の深鉢口縁部片、13は称名寺式の深鉢口縁部片である。

後期前葉の土器は14～17の4点で、いずれも堀之内1式の深鉢である。14・16・17は口縁部片、15は口縁～胴部上位片である。

これらの他、後期中葉の加曾利B2式の深鉢胴部片が1点出土している(18)。

なお、非掲載であるが、遺物収納コンテナ2箱分の縄文土器片が出土している。前期前葉開山1～黒浜式のものと同期後葉～後期前葉加曾利E2式～堀之内1式のものが見られる。



第46図 遺構外出土縄文土器

(2) 遺構外出土中・近世陶磁器(第47図)

遺構外出土遺物の内、中・近世陶磁器は1点(19)を図化・掲載した。中国磁器皿底部1/3片である。底部内面周縁には篋による1重圏線内に篋による草花文が施されている。大宰府条坊XV分類の白磁皿Ⅷ-1b類に該当する。

(3) 遺構外出土石器・石製品(第47図、PL. 28)

遺構外出土の石器の内、石鉄3点を図化・掲載した。20は珪質頁岩製石鉄、完成状態で表裏面とも押圧剥離が全面を覆っているが、左辺側に振れる点で石鉄としては満足できない出来かもしれない。21・22はチャート製石鉄である。21は完成状態で、表裏面とも押圧剥離が覆われているが、やや雑。右辺側中央の剥離が深過ぎたことで、器体のバランスを欠いたものと思われる。22は表面

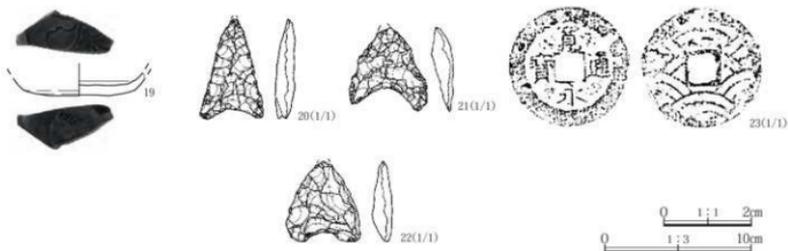
側が全面加工されているものの裏面側は周辺加工のみに止まっており、完成状態か否か疑問が遺る。返し部は丸く、完成直前で廃棄された可能性が大きい。

この他、非掲載であるが、溶結凝灰岩製石鉄1点、チャート製石鉄1点、チャート製石鉄未製品1点、雲母石英片岩製板碑片1点、チャート剥片11点(36.7g)、黒曜石剥片1点(2.3g)、黒色安山岩剥片1点(20.1g)、ホルンフェルス剥片2点(59.7g)等が出土している。

板碑片以外は、いずれも縄文時代の遺物である。

(4) 遺構外出土金属製品(第47図、PL. 28)

遺構外出土金属製品の内、古銭1点(23)を図化・掲載した。寛永通寶(新寛永)で、輪郭は明瞭だが、全体に劣化が見られる。



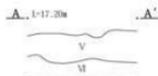
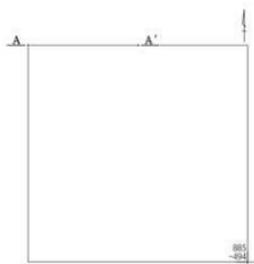
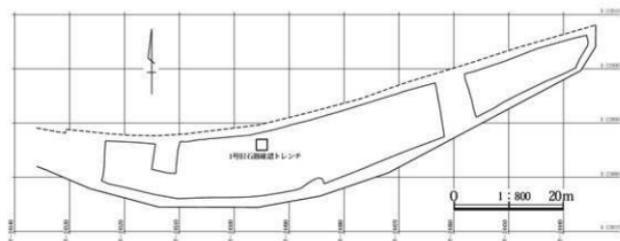
第47図 遺構外出土中・近世陶磁器、石器・石製品、金属製品

第7節 旧石器確認調査(第48図、PL.22)

すべての遺構の調査を終了した後、旧石器時代の遺物の包蔵の有無を確認するために、X=23885、Y=24494か

ら北及西に各2m四方の範囲のトレンチを設定し、確認調査を行った。

最深で、確認面から約0.44m前後まで掘削したが、旧石器の出土は全く見られなかった。



旧石器確認トレンチ A-A'

II 黄褐色ローム(10YR5/8) As-BP 混上、硬質。

III 褐色ローム(10YR4/6) As-BP 混上、軟質。

IV 灰黄褐色ローム(10YR4/2) AT 相当。

V 褐色ローム(10YR4/4) 暗色部。

VI 灰黄褐色ローム(10YR5/2) 粘質。



第48図 旧石器確認トレンチ

第3表 ビット一覧表

ビット 番号	神岡 写真 図版	位置		平面形状	規模(m)			重複	遺物	埋土	主軸方位	時代 備考
		X-23-	Y-24-		長径	短径	深さ					
1	第16図 PL.5	891	464	楕円形	0.35	0.31	0.44			1層は暗褐色土(7.5YR3/3) ローム 粒子を20%含む。粘性普通、締まり 強い。 2層は黒褐色土(7.5YR3/2) 粘性普 通、締まり強い。 3層は暗褐色土(7.5YR3/3) ローム 粒子を50%含む。粘性普通、締まり 強い。	N-20°-W	中・近世
2	第16図 PL.6	902	440	楕円形	0.34	0.29	0.23			1層は黒褐色土(10YR3/2) ローム粒子 を10%含む。粘性普通、締まり普 通。 2層は暗褐色土(10YR3/4) ローム粒 子を50%均質に混じる。粘性普通、 締まり普通。	N-29°-E	中・近世
4	第16図 PL.6	902	442	不整形	0.31	0.29	0.23			黒褐色土(10YR3/2) ローム粒子を 10%含む。粘性普通、締まり普通。	N-11°-W	中・近世
6	第16図 PL.6	902	443	不整形	0.31	0.27	0.37			黒褐色土(10YR3/2) ローム粒子を 10%含む。粘性普通、締まり普通。	N-80°-W	中・近世
9	第16図 PL.6	900・901	443	楕円形	0.20	0.16	0.15			黒褐色土(10YR3/2) ローム粒子を 10%含む。粘性普通、締まり普通。	N-70°-E	中・近世
10	第43図 PL.20	901	447・448	楕円形か	0.40	0.48	0.45	1号井戸に切ら れる	(非掘藏遺物) 加曾利E3土層 片1点	暗褐色土(10YR3/3) 粘性普通、締ま りやや強い。	N-50°-W	縄文時代
11	第43図 PL.20	901	449・450	楕円形か	0.70	0.68	0.59	2号壁穴建物内		1層土(10YR4/4) 径1～5mmの ロームブロックを3%含む。粘性普 通、締まりやや強い。	N-24°-W	縄文時代
12	第43図 PL.20	892	466	楕円形	0.45	0.42	0.70		(掘藏遺物) 称名寺Ⅱ式土 器片1点	1層は黒褐色土(10YR3/2) ローム粒 子を3%、灰褐色土(10YR4/2)を 10%含む。粘性普通、締まりやや強 い。2層は暗褐色土(10YR3/3) ローム 粒子を10%含む。粘性普通、締ま りやや強い。 3層は黒褐色土(10YR3/2) 粘性普 通、締まりやや強い。	N-14°-W	縄文時代
14	第43図 PL.20	882・883	879・880	楕円形	0.75	0.56	0.71		(非掘藏遺物) 中期後葉～後 期前期上層片 3点	1層は黒褐色土(10YR3/2) ローム粒 子を5%含む。粘性普通、締まり普 通。 2層は黒褐色土(10YR3/2) ローム粒 子を10%、暗褐色土(10YR3/3)を 5%含む。粘性普通、締まり普通。 3層は黒褐色土(10YR3/3) ローム 粒子を10%、径1～10mmのロームブ ロックを20%含む。粘性普通、締ま りやや強い。	N-20°-E	縄文時代
15	第43図 PL.21	884	483	楕円形	0.57	0.50	0.55			暗褐色土(10YR3/3) ローム粒子を 2%含む。	N-45°-E	縄文時代
16	第43図 PL.21	886・887	475・476	楕円形	0.69	0.61	0.13	1号溝に切られ る		暗褐色土(10YR3/3) ローム粒子を 3%含む。粘性普通、締まり普通。	N-85°-W	縄文時代
17	第44図 PL.21	885・886	478	ほぼ円形	0.60	0.58	0.56	1号溝に切られ る	(非掘藏遺物) 加曾利E4土層 片1点	黒褐色土(10YR3/2) 径2～3mmの ロームブロックを1%、暗褐色土 (10YR3/3)を5%含む。	N-0°	縄文時代
18	第35図 PL.16	877・878	489・490	不整形	0.49	0.43	0.49			1層は暗褐色土(10YR3/3) 炭化物粒 子を含む。 2層は黒褐色土(10YR2/3) 径1～3 mmのローム粒子を2%、炭化物粒 子、焼土粒子を含む。	N-28°-W	古墳時代
19	第35図 PL.16	878	491・492	楕円形	0.65	0.49	0.18			暗褐色土(10YR3/3) 径1～5mmの ローム粒子を5%含む。	N-44°-W	古墳時代
20	第44図 PL.21	879・880	487	不整形	0.53	0.53	0.44		(非掘藏遺物) 黒沢式土器片 1点、前期前 葉土器片1点	暗褐色土(10YR3/4) ローム粒子を含 む。	N-31°-W	縄文時代
21	第35図 PL.16	878・879	486	ほぼ楕円 形	0.45	0.41	0.35			暗褐色土(10YR3/4) ローム粒子を含 む。	N-90°	古墳時代
22	第35図 PL.17	887	503・504	楕丸(長) 方形か	0.43	0.15	0.64			暗褐色土(10YR3/3) 焼土粒子を含 む。	N-86°-E	古墳時代
23	第35図 PL.17	883・884	491・492	楕円形	0.50	0.42	0.69			暗褐色土(10YR3/3) 粘性やや有り。	N-47°-W	古墳時代
24	第35図 PL.17	882	503	楕円形	0.44	0.41	0.68			暗褐色土(10YR3/4) ローム粒子を含 む。	N-20°-W	古墳時代

第4章 調査成果の整理とまとめ

本遺跡地は、近・現代の宅地造成及び耕作により、大きく削平を受けていたり、攪乱されていたりして、遺構の遺存状態は決して良くは無かったが、縄文時代後期、古墳時代、古代、中・近世の各時代の遺構が検出された。それらの遺構はすべて同じ確認面から検出されている。

1. 中・近世

本遺跡において検出された中・近世の遺構は、調査区の北東端付近から検出された1号柵、調査区の東側半部分から検出された1～6号の6条の溝と1・2・4・6・9号の5基のピットであった。

柵 調査区東端寄りの位置から検出され1号柵は、東西1間×南北2間で、矩形状の平面形態を呈している。形状から見て、内側に存在するものを囲む障壁状の施設と考えざるを得ない。

溝 本遺跡から検出された6条の溝はいずれも中・近世のものと考えられる。いずれの溝においても水流の痕跡は検出することが出来なかった。また、古代、あるいは古墳時代前期、縄文時代後期の溝は、全く検出されなかった。

これらの溝は、概ね調査区の東半部分から検出された。最も長大なのは調査区東半のほぼ全域に亘って検出された1号溝である。調査区の東寄りから検出された3・4号溝は、共に1号溝と主軸方位が比較的類似しており、1号溝に先行する同種の溝と考えられる。

調査区東端から検出された5号溝は、溝幅及び深さに関しては本遺跡から検出された溝のなかで最大規模である。北側から東側へとほぼ90°に屈曲する部分のみが検出され、居館や集落などを区画する環濠の一部であった可能性が想定される。環濠の南西隅部のみが検出されたものと見られる。

ピット 中近世のものと考えられる5基のピットは、いずれも調査区の東半部分から検出された。1号ピットのみが離れた位置から単独で検出され、2・4・6・9号ピットはいずれも調査区東端付近の1号柵周辺から纏まって検出された。これらピットは、掘立柱建物や柵の柱穴を

構成するものではなく、用途・機能は不明である。

まとめ 調査範囲が狭く、遺構数が少ないため、本遺跡における中・近世の土地利用の在り方については不明な点が多いが、調査区のほぼ東半分の位置で検出された長大な1号溝と調査区中央付近において1号溝に南側から接する6号溝以外の遺構は、概ね、調査区の北東側から纏まって検出されている。中・近世においては、調査範囲の東半部分において土地利用が為される傾向が強かったと言えそうである。

出土した中・近世の遺物は極めて僅少であり、遺構の時期を明確に示すような遺物は非常に少なかった。

2. 古代

古代の遺構としては、1・4・10号の3棟の竪穴建物と1～4号の4基の井戸が検出された。出土遺物から奈良・平安時代の遺構と考えられる。古代の遺構も、概ね調査区の東側から纏まって検出されており、10号竪穴建物のみが単独で調査区の西端寄りの位置から検出された。

竪穴建物 検出された古代の竪穴建物3棟は、いずれも調査区北壁に掛かる状態で、建物のごく一部が検出されたに過ぎなかった。調査区西端寄りの位置から竪穴建物の南東隅部のみが検出された10号竪穴建物は、調査時点において、埋土の状態から古代の遺構と判断されたが、出土遺物は古墳時代前期の土器のみであり、遺構の時期決定について疑問が遺る。

その他の古代の竪穴建物についても、土器が出土していないため、年代を絞り込むことは不可能であった。

井戸 検出された古代の井戸は4基で、本遺跡から検出された全ての井戸が古代のものであった。全てが調査区の東寄りの位置から検出された。それぞれ若干の差異は有るものの、規模・形状は比較的類似している。

これら4基の井戸の内、4号井戸のみ古代の土器が出土している。8世紀後半から10世紀前半に至る比較的幅広い時期の土器が含まれている。しかしながら、中心となるのは9世紀第4四半期から10世紀初頭頃のものであ

り、その時期以前に廃絶したものと考えられる。

4号井戸以外の井戸の年代については、古代のものであるものの、正確な時期は不明と言わざるを得ない。まとめ 本遺跡の調査範囲が道路幅に限定されたものとは言え、客観的に見れば、検出された古代の遺構数は少ない。検出された古代の竪穴建物はいずれも調査区北壁に掛かっており、当遺跡地における古代集落は、主に調査対象範囲よりも北側の位置に展開していたものと推測される。

検出されたいずれの竪穴建物も、それらの隅部のごく一部が検出された状態に過ぎないので、規模は全く不明である。また、主軸方位もまちまちであり、集落を構成するに際して、計画的な配置がなされていたとは考えにくい。

出土した古代の遺物もあまり多くはない。

3. 古墳時代

本遺跡において検出された古墳時代の遺構は、2・3・5～9号の竪穴建物7棟、7号土坑、18・19・21～24号のピット6基である。このうち調査対象範囲のほぼ中央から検出された3号竪穴建物のみが古墳時代後期6世紀前半のもの、それ以外の遺構は、古墳時代前期の遺構と考えられる。

本遺跡の調査範囲が道路幅に限定され、客観的に見ても検出された遺構量は全体に多いわけではないものの、古墳時代前期の遺構は、調査範囲のほぼ全域に亘って検出されており、今回の調査範囲においては主たる遺構群である。

古墳時代前期の竪穴建物 検出された古墳時代前期の竪穴建物の多くは調査区の縁辺部から検出されており、ほぼ全容が検出出来た8号竪穴建物においても明瞭なものが検出することが出来なかった。

6棟の竪穴建物は、調査区の東寄りの位置から1棟、調査区の中央部から1棟、調査区の中央から西寄りの位置で4棟が重複して検出された。5号竪穴建物以外の6棟の竪穴建物は北西-南東方向を主軸とし、長径約3～7.5m前後と、ある程度の規格性が認められる。

調査範囲が道路幅に限定されていることもあって、いずれの竪穴建物も、調査区の壁に掛るか、他の遺構によって破壊されており、完存したものは1棟も無かった。

なお、これらの竪穴建物からは古墳時代前期の良好な土器群が出土し、当地における当該期における土器の基準的な資料となるであろう。

古墳時代後期の竪穴建物 先述したように調査対象範囲のほぼ中央から検出された3号竪穴建物のみは、出土した土器の年代観から古墳時代後期6世紀前半のものと考えられる。

1棟が単独で検出されており、竪穴建物の検出状況としては奇異な点がある。

ピット 古墳時代前期のものと考えられるピットは、いずれも調査区の西側から検出された5基のピットである。

調査区の中央から少し西側に寄った位置の南壁際から18・19・21号ピットの3基が、調査区西寄りの6～9号竪穴建物が集中する場所よりもさらに西側から22・24号ピットの2基が検出された。23号ピットは先述した通り6号竪穴建物の南東側を掘り込んだ状態で検出されている。少なくとも23号ピットのみは6号竪穴建物よりも新しいものであることは明確であるが、他の古墳時代前期のピット群と、竪穴建物群や7号土坑との新旧関係ないし同時併存かという点を明らかにすることは出来なかった。

また、これらのピットは、掘立柱建物や柵の柱穴を構成するものではなく、用途・機能についても不明である。**まとめ** 古墳時代前期において、この地には集落的な景観が展開していた様子が窺える。ただ、調査対象地の全域に亘って古墳時代前期の遺構が検出されているとは言っても、この時期のピットは、調査区の西側の部分からのみ検出されているなど、遺構別に若干の粗差が認められる。

遺構の検出件数も決して多いわけではなく、空閑地も大きいので、本遺跡地における古墳時代前期の集落の中心部分も、古代の集落と同様、調査対象範囲外に展開していたものと推測される。また、調査範囲が限定されているため、集落内における竪穴建物の配置が計画的になされていたのか否かという点についても、今回の調査状況では、明確にすることは出来なかった。

なお、古代の竪穴建物よりも古墳時代前期の竪穴建物の方がより多く検出されているにも拘わらず、古墳時代前期の井戸は検出されていない点に疑問が遺る。

4. 縄文時代

縄文時代の遺構として検出されたのは1・3・5・6号土坑の5基の土坑と10・12・14・17・20号の8基のピットである。

すべての土坑は調査区東寄りの位置から轉まって検出された。また、本遺跡から検出された縄文時代のピットの殆どが、調査区の中央部から東側にかけて検出されているが、唯一20号ピットのみが、調査区の中央からやや西側に寄った位置の南側から検出され、他の縄文時代のピットからやや離れた位置にある。

土坑 先述した通り、本遺跡から検出された縄文時代の土坑は5基であり、それらすべてが調査区の東寄りから検出された。概ね径約1m程度の円形ないし不整形形状の平面形状を呈し、深さもほぼ0.1～0.3m程度であり、小型で掘方も浅く、規模・形状も比較的類似している。

遺物が出土したのは2・3・5号土坑で、2号土坑が後期前葉層之内Ⅰ式期、3・5号土坑が後期初頭称名寺Ⅱ式期のものと考えられる。

ピット 縄文時代のピットについても、それらの用途・機能については不明である。遺物が出土したのは12号ピットのみで後期初頭称名寺Ⅱ式の土器片が出土している。概ね、土坑群とほぼ同じ時期のものと考えられる。

まとめ 本遺跡から出土した縄文時代の土器は、遺構外から出土したものを含めて、後期初頭～前葉のものが最も多いが、前期前葉、中期後葉、後期初頭、後期前葉、後期後葉の各時期ものが出土しており、中期後葉～後期前葉のものが主体であった。土器が出土した土坑・ピットの状況からは、それらが縄文時代後期初頭～前葉のものであることが判明した。

調査範囲においては、遺構としては土坑5基とピット8基しか検出されず、竪穴建物など居住施設は検出されなかった。しかしながら、調査範囲内において縄文時代前期前葉と中期後葉から後期後葉に至る土器が出土していることから、調査範囲外にそれらの時期の遺構が存在していた可能性が高いものと考えられる。

今回の調査において検出されたのは、縄文時代の人々の生活域の中核部では無く、周縁部と位置づけることが出来るだろう。

まとめ

本遺跡調査範囲においては、旧石器時代、弥生時代、古墳時代中期の遺構・遺物は全く検出されなかったので、この地においては、人の営為が連続と存続していたというわけではなく、断続的に土地利用がなされていた様子が窺える。

本遺跡からは少量ではあるが、古代の竪穴建物が検出されているが、多くの場所では、通常、古代の集落は古墳時代後期～終末期から連続と継続していることが多いのであるが、本遺跡においては古墳時代前期の集落は存在するものの、それ以降、古墳時代後期6世紀前半の竪穴建物は1棟しか検出されていない。古墳時代後・終末期から奈良・平安時代にかけて、集落が連続と営まれ続けていたわけではなく、集落が断絶する時期が度々存在していたようである。

また、縄文時代については、検出された遺構は土坑とピットのみで、遺構の時期は縄文時代後期初頭～後期前葉の時期に限られているが、その時期のものにとどまらず、縄文時代前期前葉、中期後葉、後期後葉の各時期の土器が出土しており、調査対象範囲外に、それらの時期における人々の営為が展開していたであろうことが推測できる。

第4表 遺物観察表

1号溝

種別 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第1008	1	土師器 杯	埋土 1/5	口 14.6 底 8.4	高 4.2	細砂粒/良好/粗	口縁部は横ナデ、体部は上手がナデ、下平と底部は手持へら削り。	新世紀後半
第1008	2	灰輪陶器 皿	埋土 口縁部～体部片	口 16.6		微砂粒/還元焼/白	口縁部は横ナデ、回転は右回り、築輪方法は刷毛削りか。口縁部は反形。	元々丘1号室式期、9世紀後半
第1008	3	須恵器 甕	埋土 口縁部片			細砂粒/還元焼/黄	口縁部は横ナデ、回転は右回り、口縁部は上方に引き出され、口縁部下に断面三角形の凸部を伴う。	古代
第1008	4	瓦 丸瓦	埋土 上片			細砂粒/還元焼/白	型作り。表面はヘラナデ、裏面は白目焼が残る。上端部面はヘラナデ。	古代
第1008	5	土師器 壺	埋土 胴部1/4	口 20.2		細砂多い/良好/白	口縁内外面にへら描き羽状文(鏡形文)。整形は内外面ともハケメ。	古墳時代前期
第1008	6	土師器 壺	埋土 胴部片			細砂多い/良好/白	胴上位を横沈線で画し、へら描き羽状文(鏡形文)をめぐらす。整形は内外面ハケメのみ、ヘラナデ。7・8と同一体。	古墳時代前期
第1008	7	土師器 壺	埋土 胴部片			細砂多い/良好/白	胴上位を横沈線で画し、3段構成のへら描き羽状文(鏡形文)をめぐらす。整形は内外面ハケメのみ、ヘラナデ。6と同一体。	古墳時代前期
第1008	8	土師器 壺	埋土 胴部片			細砂多い/良好/白	胴上位を横沈線で画し、3段構成のへら描き羽状文(鏡形文)をめぐらす。整形は内外面ハケメのみ、ヘラナデ。6と同一体。	古墳時代前期
第1008	9	土師器 壺	埋土 口～胴部片	口 14.6		白色粗砂多い/良好/白	口縁横ナデ、胴部内面横ミガキ、胴部～胴外面に縦ハケメ、胴部内面はケズリ。	古墳時代前期
第1008	10	土師器 5字甕	埋土 口縁部片	口 15.0		細砂/器内還元/白	口縁丸く、内面に凹線装束の甲用面。胴部外面にケズリのちねりハケメ、胴部内面はナデ。	古墳時代前期
第1108	11	土師器 壺	埋土 底部1/2	底 9.3		チャート細砂/良好/浅黄	内外面ともヘラナデ。底面は木炭痕のちヘラナデ。	古墳時代前期
第1108	12	土師器 壺	埋土 底部	底 7.8		細砂～粗砂/良好/白	外面は粗いミガキ、内面ナデ。底面に木炭痕。	古墳時代前期
第1108	13	土師器 壺	埋土 台座一部欠	口 9.2 脚 9.0	高 7.3 孔 3.2	白色粗砂多い/良好/黄	内外面ともハケメのち胴部外面に縦ミガキ。台付農製作途中からの転用。	古墳時代前期
第1108	14	土師器 壺	埋土 底部1/3	底 9.3		細砂～粗砂/良好/白	胴部内外面ナデのち外面にミガキ。底面はケズリ。	古墳時代前期
第1108	15	縄文土器 浅鉢	埋土 口縁部片			粗砂、輝石/良好	口縁部がくの字状に内陥。帯状沈線による溜り字モチーフを施し、LR織文を充填文とする。	称名寺1式
第1108	16	縄文土器 深鉢	埋土 胴部片			粗砂/良好	地文にLR織文を施し、クラブ字状沈線を重下させる。	堀之内1式
第1108	17	縄文土器 深鉢	埋土 口縁部片			粗砂、輝石/良好	口縁が緩く内湾。口縁下に衝突を伴う内形彫付文。帯状沈線によるモチーフを施し、文様外にLR織文を充填文とする。	堀之内1式
第1108	18	縄文土器 深鉢	埋土 胴部片			粗砂、輝石/良好	沈線による懸垂文を施し、LR織文を縦充填文とする。	加曾利E 3式
第1108	19	縄文土器 深鉢	埋土 胴部片			粗砂/良好	口縁が緩く内湾。帯状沈線による溜り字モチーフを施し、文様外にLR織文を充填文とする。	加曾利E 4式
第1108	20	縄文土器 深鉢	埋土 胴部片			粗砂/ふつ	傾斜縁部をめぐらして口縁部無文を区画、隆線下にLR織文を充填文とする。	加曾利E 4式
第1108	21	残貨 淨懸元瓦	中央からやや東寄り、溝底から0.2m上	外 2.403 内 1.736	厚 2.1	0.133	全体が劣化している。文字は一部つぶれて不鮮明になっているが判読可能。	南宋・淳熙元(1180)年初頭
第1108	22	残貨 甕水通貨	中央からやや東寄り、溝底から0.05m上	外 2.460 内 2.013	厚 2.1	0.128	面は一部劣化により不鮮明。背は部が深く輪、部が明瞭。新貨永。	寛文13(1668)年以降
第1108	23	残貨 甕水通貨	中央からやや東寄り、溝底から0.04m上	外 2.305 内 1.852	厚 2.4	0.142	面、背ともに文字、輪、部が明瞭。新貨永。	寛文13(1668)年以降
第1108	24	砥石 礮砥石	破片	長 7(6) 幅 3(8)	厚 2(9) 重 123.6		表面側は礮面が白濁。縦糸痕を伴う研磨面が形成されている。裏面側には若干縦糸痕のみみられるが、白濁するまでになっていない。縦上端部は研磨されて礮面が形成されている。左右端および下端部を欠損する。	中近世
第1108	25	砥石 礮砥石	破片	長 12(7) 幅 8(3)	厚 2(9) 重 191.6		砥石下半部片。礮面の礮痕は少なく、記された「養生三」の文字は、他の一部と考えられる。	中世
第1108	26	砥石 礮砥石	破片	長 9(1) 幅 7(3)	厚 2(9) 重 189.9		礮身の左辺部破片。表面側には斜行する断面V字状を呈す目皿痕がある以外、梵字・文字類は確認できない。左側縁は研磨された直立気味で、転用された可能性がある。	中世
第1108	27	石臼 上臼	破片	長 11.4 幅 11(0)	厚 8(9) 重 906.7		上臼上端部の口縁破片。機手孔など工を特徴づけるものはないが、標準サイズ(径30cm前後)の6分画の石臼と見られる。	中近世
第1108	28	石臼 下臼	上半部片	長 2(8) 幅 2(2)	厚 0.8 重 3.3		表裏面とも滑らかに磨かれているが、加工途中で器体の下半部を欠く。未製品。	縄文時代

第4章 調査成果の整理とまとめ

3号溝

種別 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第193号 PL-23	1	縄文土器 深鉢	埋土 口縁部破片			細砂/ふつう	帯状沈線によるモチーフを施し、列点を充填施文する。	称名寺Ⅱ式

5号溝

種別 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第148号 PL-23	1	灰輪陶器 皿	埋土 口縁部～体部片	口 12.8		微砂粒/還元焰/灰白	ロクロ整形、回転は右回り。施釉方法は刷毛塗りか。口唇部は外反。	光ヶ丘1号室式期、9世紀後半
第148号 PL-23	2	縄文土器 深鉢	埋土 口縁部破片			細砂/良好	弧状の隆線を垂下させ、LR縄文を充填施文する。	加曾利E 4式
第148号 PL-23	3	縄文土器 深鉢	埋土 口縁部破片			細砂、輝石/ふつう	帯状沈線によるモチーフを描き、沈線間にミガキ調整を施す。	称名寺Ⅱ式
第148号 PL-23	4	縄文土器 深鉢	埋土 口縁部破片			細砂、輝石/良好	帯状沈線によるモチーフを施し、列点を充填施文する。	称名寺Ⅱ式

10号竪穴建物

種別 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第184号 PL-23	1	土師器 鉢	南隣付近南西壁 障床面直上 完形	口 12.7 高 5.3		細砂～粗砂/一 二次的被熱/赤系 焼	内外面ともミガキ、体内部は測線著しく不明。	古墳時代前期
第188号 PL-23	2	土師器 小型鉢	埋土 口縁部片	口 10.6		粗～細砂/還元気 味/黒褐色	内外面ハケメのち粗雑なミガキ。	古墳時代前期

1号井戸

種別 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第149号 PL-23	1	縄文土器 深鉢	埋土 口縁部片			細砂、輝石/良好	舌状の波状口縁。隆部による口縁部楕円状区画を施し、粗縄文を充填施文する。	加曾利E 3式
第149号 PL-23	2	縄文土器 深鉢	埋土 口縁部片			細砂、赤色粒/良 好	沈線による懸垂文を施し、LR縄文を縦充填施文する。	加曾利E 3式
第149号 PL-23	3	縄文土器 深鉢	埋土 口縁部片			細砂/良好	波状口縁、帯状沈線によるモチーフを施し、LR縄文を充填施文する。	称名寺Ⅰ式
第149号 PL-23	4	石鏡 凸基無架脚	埋土 ほぼ完形	長 (1.9) 幅 1.6	厚 0.5 重 1.2	チャート	完成状態。表面側は全面加工、裏面側は周辺加工のみに止まる。	縄文時代

2号井戸

種別 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第20号 PL-23	1	縄文土器 深鉢	埋土 口縁部片			細砂/良好	口縁が短く内折。内折部に横位沈線をめぐらす。	堀之内Ⅰ式

4号井戸

種別 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第22号 PL-24	1	黒色土器 碗	埋土 口縁部～体部片	口 14.6		細砂粒/還元焰/灰 赤/粗	ロクロ整形、回転は右回り。内面色黒処理。内面は体部から口縁部に横方向ヘラミガキ。	10世紀前半
第22号 PL-24	2	土師器 杯	埋土 口縁部～体部片	口 12.0		細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部上半はナデ、下半はヘラ削り。	9世紀第4四 半期～10世紀 初頭
第22号 PL-24	3	土師器 杯	埋土 1/4	口 13.8 高 4.1		細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部上位はナデ、中位は強いナデ、下位と底部はヘラ削り。	9世紀第4四 半期～10世紀 初頭
第22号 PL-24	4	土師器 鉢	埋土 底部片	口 15.2	高 4	細砂粒/良好/橙	底部は手持ちヘラ削り。外面に煤が付着(文字を形成しているわけではない)。	8世紀後半代
第22号 PL-24	5	須恵器 鉢	埋土 1/4	口 15.2 高 5.7		細砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転は右回り。底部切り離し技法不明、高台は貼付が剥落。	9世紀第4四 半期
第22号 PL-24	6	須恵器 杯	埋土 口縁部片	口 18.7		細砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転は右回り。口縁部は外反する。	9世紀第4四 半期
第22号 PL-24	7	土師器 碗	埋土 底部～体部下位 片	底 6.6 台 7.1		細砂粒/良好/赤 い黄橙	ロクロ整形、回転は右回り。底部はヘラナデ、高台は貼付、体部に回転ヘラ削り。	9世紀第4四 半期～10世紀 初頭
第22号 PL-24	8	須恵器 碗	埋土 底部～体部下位 片	底 7.0 台 7.0		細砂粒/還元焰/灰 黄	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転糸切り、高台は貼付。	9世紀第4四 半期～10世紀 初頭

遺物観察表

2号祭穴建物

棟 号 Pl.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第23号 Pl.24	1	縄文土器 深鉢	埋土 口縁部片				細砂、赤色粒、輝石/良好	隆帯による口縁部稍円状区画を施し、R1縄文を充填施文する。	加曾利E 3式	
第23号 Pl.24	2	縄文土器 深鉢	埋土 口辺部片				細砂/良好	沈帯による口縁部稍円状区画、胴部彫垂文を施し、R1縄文を埋位充填施文する。	加曾利E 3式	
第23号 Pl.24	3	磨石 扁平棒状磨	埋土 ほぼ完成形	長 幅	(8.2) 4.8	厚 重	3.5 220	砂岩	左右両側面が最打、摩耗する。特に、右側面の最打摩耗が著しく、裏面には不明な線状磨が生じている。左側面は表裏面とも磨削部の摩耗が明確である。小・上部上端の最打痕も明確。	不明
第23号 Pl.24	4	閃石 石鱗型	埋土 破片	長 幅	(5.0) (6.0)	厚 重	(4.8) 174.3	粗粒輝石安山岩	表面面とも摩耗するほか、アハタ状の最打痕がある。左右両側縁には最打摩耗が著しく、平坦面となる。器体下半部を欠損、被熱破損したものか。	不明

3号祭穴建物

棟 号 Pl.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第25号 Pl.24	1	土師器 杯	北東辺部防南東 寄り床面から 0.08m上 ほぼ完成形	口 高	13.5 4.7			細砂粒/良好/ぶい 黄褐色	口縁部は横ナデ、器体と底部は手持ちへう削り。内面は底中ほどから器体放射状へラミガキ。中辺以西では見えない形跡。	6世紀前半代
第25号 Pl.24	2	土師器 甕	北東辺部防南東 寄り床面から 0.07m上 口縁部→胴部上 半片	口 幅	16.5 23.5			細砂粒/良好/明赤	内外面胴部に輪積み痕が残る。口縁部は横ナデ、胴部はへう削り後底部をナメテ。内面は胴部にへラナデ。	6世紀前半代
第25号 Pl.24	3	土師器 小型甕	北東辺部防南東 寄り床面から 0.07m上 底部→胴部下位	底 径	4.6			細砂粒/良好/明赤 褐色	底部と胴部はへう削り。内面は底部から胴部にへラナデ。底部に粘土塊が付着。	6世紀前半代
第25号 Pl.24	4	土師器 鉢	北東辺部防南東 寄り床面から 0.08m上 1/2	口 径	10.9 14.2	底 高	9.5 8.0	細砂粒/良好/ぶい 黄褐色	口縁部は横ナデ、口縁部から底部はへう削り後口縁部と体部中心にへラミガキ。器面磨滅のため一部単位不詳明。内面は底部から器体放射状へラミガキ、単位不詳明。	6世紀前半代
第25号 Pl.24	5	土師器 1/2	中央部床面直上	口 幅	19.0 25.6	底 高	8.3 31.0	細砂粒・粗砂粒 良好/ぶい黄褐色	内外面胴部に輪積み痕が残る。口縁部は横ナデ、胴部と底部はへう削り、胴部は一部をナデで削り取済する。内面は底部から胴部にへラナデ。	6世紀前半代
第25号 Pl.24	6	土師器 杯	埋土 1/2	口 径	12.8 12.9	高	5.7	細砂粒/良好/明赤 褐色	口縁部は横ナデ、下半部から底部は手持ちへう削り。内面は底中ほどから口縁部に放射状へラミガキ。須恵器産地か、口縁部が直立し、器高が高いことから6世紀前半代か。	6世紀前半代 か
第25号 Pl.24	7	在地形土器 片口鉢	埋土 口縁部辺					白色鉱物粒少量含む/黒	断面中央黒色。器表付着にぶい黄褐色。器表黒色。口縁部は縦く外反し、器体内面は内側に突き出る。残存部内面に磨り目なし。	中世か?
第25号 Pl.24	8	縄文土器 深鉢	埋土 口縁部破片					細砂、輝石/良好	波頂部の環状突起。	称名寺式
第25号 Pl.24	9	縄文土器 深鉢	埋土 口縁部破片					細砂/良好	波頂部の突起。波頂部に環状の突起を付し、沈帯、円形突起を施す。	称名寺式
第25号 Pl.24	10	石核 石核	埋土	長 幅	5 3.4	厚 重	1.6 30.2	チャート	表裏面に作業面を持つ。上下両端の打面から内縁割離して小型割片を剥離するほか、表面側左辺り裏面側右辺りには直交方向の割離がある。	不明

5号祭穴建物

棟 号 Pl.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第26号 Pl.24	1	土師器 小型用	P 2 埋土 1/2	口 高	11.0 7.2			白色細砂多い/良 好/粗	口縁の外縁はハケメのち横ナデ、内面は横ナデのち斜ミガキキ。器体外縁はハケメのち横ミガキ、内面はへラナテ。底面はケズリによるわずかな上げ底。	古墳時代前期
第26号 Pl.24	2	土製品 丸玉	P 2 埋土 完成形	高 幅	1.8 2.0	孔 径	0.5 6.2	細砂少量含む/良 好/周	全体に粗ミガキ。口部未整形。	古墳時代前期
第26号 Pl.24	3	縄文土器 深鉢	埋土 胴部破片					細砂、繊維/ぶつ う	R1縄文を埋位施文する。	黒浜式
第26号 Pl.24	4	縄文土器 深鉢	埋土 胴部破片					細砂、繊維/ぶつ う	R1、無頭R1縄文を羽状施文する。	黒浜式

第4章 調査成果の整理とまとめ

6号彫穴建物

棟号 PL.No.	No.	種別 種類	出土位置 発見層	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第2908	1	土師器 S字裳	中央北壁際付近 床面直上 口→胴部1/4	口 17.3	白色粗～細砂/良 好/黒濁	口唇肥厚し内面に凹線、胴～胴部に横位ケズリのち左下方 向へハケム。ハケム時は時計回り。内面はナデのち粗目の 横位ハケム。	古墳時代前期	
第2908	2	土師器 S字裳	中央北壁際付近 床面直上 口→胴部片	口 11.5	赤濁、白色粗～細 砂/良好/暗濁	口縁下部の段弱く、口唇薄い。胴部外面に横位ケズリのち 左下方へハケム。胴部外面は左上方へハケム。胴部内面は ナデのち粗目の横位ハケム。	古墳時代前期	
第2908	3	土師器 S字裳	中央北壁際付近 床面直上 口→胴部片		白色中～細砂/良 好/暗濁	口縁下部は外方に向き、口唇とがる。内面の段は弱く、 胴～胴部外面に斜ハケムのち頸部下に斜ハケム。胴部 内面はナデのち横位ハケム。	古墳時代前期	
第2908	4	土師器 直口壺	埋土 口縁部無1/2	底 4.5	赤黒濁多い/内面 還元/橙	内外面ハケムのち胴部外面にミガキ。胴部外面に積み上げ 痕と指頭圧痕残す。	古墳時代前期	
第2908	5	土師器 直付甕	中央北壁際付近 床面直上 胴部下位		赤黒濁、白色粗砂 /二次的焼熱/赤濁	ケズリのち内外面ハケム。	古墳時代前期	
第2908	6	土師器 直付甕	埋土 胴結合部		赤黒濁、白色粗砂 /良好/暗濁	外面ハケム。内面ナデか。	古墳時代前期	
第2908	7	土師器 鉢	北東壁際南東寄 り付床面直上 口縁部片	口 21.0	粗砂/良/良好/暗 濁	口縁外面と内面全体にハケム。胴部外面はケズリ。胴部 外面にミガキで仕上げる。内外面に赤彩。	古墳時代前期	
第2908	8	土師器 有孔鉢	埋土 底部	底 5.6	粗～細砂/黒濁/良 好/黒	内外面ハケムのち、表面四縁ケズリ、体内内外面は粗いミ ガキ。	古墳時代前期	
第2908	9	土師器 部台	埋土 1/2	口 8.3 脚 11.5	粗～細砂/良好/に ぶい/赤濁	器受部内外面と胴部外面にミガキ。胴部内面にハケム。胴 部内面を除いて赤彩。	古墳時代前期	
第2908	10	土師器 部台	中央北壁際付近 床面直上 受け部1/4	口 9.0 脚 12.5	高 7.8 孔 1.1	粗砂/良好/暗濁	器受部内外面と胴部外面にミガキ。胴部内面にハケム。胴 部内面を除いて赤彩。	古墳時代前期
第2908	11	土師器 鉢	北東壁際南東寄 り付床面直上 1/4	口 13.6	高 5.5	粗砂/良好/浅黄橙	内外面とも丁寧ミガキ。	古墳時代前期
第2908	12	土師器 高杯	北東壁際南東寄 り付床面直上 口縁部1/4	口 15.5		石英細砂/良好/に ぶい/橙	内外面ミガキ。口と同一個体か？	古墳時代前期
第2908	13	土師器 高杯	北東壁際南東寄 り付床面直上 口縁部1/4	口 14.3		白色細砂/良好/に ぶい/黄濁	器面割線で整形不明。口と同一個体か？	古墳時代前期
第2908	14	土師器 高杯	北東壁際南東寄 り付床面直上 口縁部片	口 16.0		細濁～細砂/良好/ にぶい/赤濁	内外面とも丁寧ミガキ。外面一部にハケム痕残す。	古墳時代前期
第2908	15	土師器 部台	中央北壁際付近 床面直上 胴部1/2		孔 0.9	粗～細砂/良好/浅 黄橙	外面は縦ミガキ、内面はハケム。器受部内外面と胴部外面 に赤彩。	古墳時代前期
第2908	16	土製品 不明	中央北壁際付近 床面直上			白色細砂少量含む /均質、やや軟調 にぶい/橙	上面に竹管による刺突。裏面は整形面なし。円筒状土塊の 破片か。	古墳時代前期
第2908	17	土製品 不明	中央北壁際付近 床面直上			白色細砂少量含む /均質、やや軟調 にぶい/橙	上面に竹管による刺突。裏面は整形面なし。円筒状土塊の 破片か。	古墳時代前期
第2908	18	土製品 瓦玉	南東壁際東付近 床面直上 2/3	幅 2.1	孔 0.4 重 3.0	粗砂少量含む/良 好/暗濁	全体に粗いミガキ。口部未整形。	古墳時代前期
第2908	19	土師器 直口壺	埋土 口縁部片	口 14.0		細濁～粗砂/良好/ 明濁	外面ナデのち縦ミガキ、内面はケズリのち口縁横ナデ。	古墳時代前期
第2908	20	土師器 甕	中央北壁際付近 床面直上 口→胴部中部 1/2	口 16.0		白色粗砂多い/良 好、二次的焼熱組 不明/暗濁	外面ハケムのちミガキ、内面はハケムのち胴部にヘラナデ。	古墳時代前期
第2908	21	縄文土器 深鉢	掘方埋土 口縁部破片			粗砂、繊維/ふつ う	地文に粗紐を施し、口縁部～帯状沈線による波状文をめ ぐらす。	岡山Ⅱ式
第2908	22	縄文土器 深鉢	掘方埋土 胴部破片			粗砂、繊維/ふつ う	粗紐を施す。	岡山Ⅱ式
第2908	23	縄文土器 深鉢	掘方埋土 口縁部破片			粗砂、繊維/ふつ う	LR縄文を横位施文する。	黒沢式
第2908	24	縄文土器 深鉢	掘方埋土 胴部破片			粗砂、繊維/ふつ う	LR、RL縄文を羽状施文する。	黒沢式
第2908	25	縄文土器 深鉢	掘方埋土 胴部破片			粗砂、礫石、繊維 /ふつう	LR、RL縄文を羽状施文する。	黒沢式
第2908	26	縄文土器 深鉢	掘方埋土 胴部破片			粗砂、赤色粘/良 好	仰み隆帯を垂下。帯状沈線によるモチーフを施し、LR縄 文を充填施文する。	称名寺Ⅰ式
第2908	27	縄文土器 深鉢	掘方埋土 口縁部破片			粗砂、礫石/良好	波状口縁。帯状沈線によるモチーフを施す。	称名寺Ⅱ式
第2908	28	石製品？ 不明	埋土	長 4.2 幅 5.6	厚 2.1 14.7	軽石	明褐色の軽石を用いたもので、器体の中央付近に径1cm 弱の孔を穿つ。左辺側を欠いているが、形状は小判型を呈 す。整形痕等は不明。軽石としては畿内軽石に近い。	不明
第2908	29	石塊 未成品	埋土	長 3.5 幅 2.9	厚 1.4 10.7	チャート	表裏面とも割離面が全面を覆う。割離面は裏面側が薄く平 用だが、表面側割離面は粗く、素材割片の厚味を解消できな いまま加工を終えている。	縄文時代

7号形穴建物

棟 No.	種 類	出土位置	計測値	壁土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
第318棟 PL-25	1 土師器 壺	口~頸部	口 17.8	粗砂~粗砂/良好/明焼	口縁上段の内面は内轉気味に開く。内外面ともにミガキ。	東南西部系加飾面型に類似する口縁形状
第318棟	2 土師器 壺	胴部片		粗~粗砂/良好/暗	内外面とも、粗いミガキ。	古墳時代前期
第318棟	3 土師器 壺	口縁部片	口 15.8	粗砂多い/良好/不い/焼	口縁内面ハケメ、外面は横ナデ。	古墳時代前期
第318棟 PL-25	4 縄文土器 深鉢	埋土 胴部破片		腐蝕、繊維/ぶつ う	粗織を施す。	簡山Ⅱ式

8号形穴建物

棟 No.	種 類	出土位置	計測値	壁土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考	
第338棟 PL-25	1 土師器 壺	埋土 胴~底部	底 8.7	粗砂多い/片面に 黒色/不い/赤焼	内外面ともハケメのち、外面は不定方向のミガキ、内面は平ナデ。底面はミガキで、輪高各状の上げ底。	古墳時代前期	
第338棟 PL-26	2 土師器 直口壺	南隣西面壁際床 面から0.22m上 完形	口 15.0 底 13.7 底 4.5	高 17.8 粗砂/良好 二次焼熟/明焼	内外面ハケメのち、口縁~外部外面は斜~横儀、口縁内面は横ミガキ。底部と周辺にケズリ。内部内面はナデ。	古墳時代前期	
第338棟 PL-26	3 土師器 小型用	掘方埋土 口縁部一部欠	口 11.2	高 10.5 粗~粗砂/二次焼 熟/暗赤焼	口縁内外面~外部外面に横ミガキ。内部内面は横ハケメのちヘラナデを粗いミガキ。底面はわずかな平底。	古墳時代前期	
第348棟 PL-26	4 土師器 壺	南隣西面壁際床 面から0.02m上 完形	口 13.2 底 4.7	高 19.2 粗織~粗砂/良好/ 不い/暗	口縁外面横ナデ、内面横ハケメ、外部外面ハケメのち横ヘラナデ、内面ヘラナデ。底面はケズリで不安定な平底。外部外面3か所に横ナデ。	古墳時代前期	
第348棟 PL-26	5 土師器 小甕	床下土坑P3底 部 完形	口 10.0 底 3.8	高 8.8 粗~粗砂/良好/ 不い/暗	口縁外面横ナデ、内面ハケメ。外部外面の上半はハケメを粗し、下半にケズリ。内部内面は全体に横ナデ。底面ケズリ。	古墳時代前期	
第348棟 PL-26	6 土師器 壺	南隣西面壁際床 面から0.02m上 完形	口 18.5	高 16.3 粗~粗砂/底二次 焼熟/暗焼	内外面ともハケメのち、横ミガキで仕上げる。底部周辺にはケズリ粗を粗し。外部内面側に淡褐色色付帯。内部内面中位に平の塊水ライン。	古墳時代前期	
第348棟	7 土師器 直口壺	南隣西面壁際床 面から0.3m上 底部片	底 3.4		外面ケズリのちミガキ、内面ヘラナデ。底面はケズリで小さな上げ底。	古墳時代前期	
第348棟 PL-26	8 土師器 器台	北西壁際中央付 近床面直上 完形	口 9.2 脚 12.4	高 8.3 孔 0.8	粗織砂/良好/赤灰	器受部内面にハケメ残し、内外面は横儀主体のミガキ。器受部の外面は横ミガキ、内面はハケメ。器受部は横ナデ。器受部内面を腐し赤灰。	古墳時代前期
第348棟 PL-26	9 土師器 器台	南隣西面壁際床 面から0.24m上 完形	口 8.2 脚 10.3	高 8.0 孔 0.7	粗織砂/良好/赤灰	内外面とも丁寧なヘラミガキ。器受部内面にハケメ残す。器受部内面を除いて赤灰。8と同円	古墳時代前期
第348棟 PL-26	10 土師器 器台	北隣付近壁際床 面直上 完形	口 8.5 脚 9.7	高 8.6 孔 0.8	粗~粗砂/良好/赤 灰	器受部の内外面は横ミガキ。器受部外面は横ミガキ。器受部外面にハケメ直残す。器柱部内面はヘラケズリ。器柱部内面はハケメのち横ナデ。器柱部内面を除いて赤灰。	古墳時代前期
第348棟 PL-26	11 土師器 S字鉢	南隣西面壁際床 面から0.04m上 完形	口 10.0	高 10.7 粗砂/良好/暗 暗焼	2段目が直立気味のケズリ縁。底面は粗い上げ底。口縁横ナデ。外部外面は横ケズリで粗織ミガキ。内部内面は横ケズリのち粗い斜ミガキ。外部外面は炭化物吸着。内部内面粗織。	古墳時代前期	
第348棟 PL-26	12 土師器 高杯	南隣西面壁際床 面から0.65m上 完形	口 14.2 脚 10.1	高 12.0 粗~粗砂/良好/ 不い/暗	口縁横ナデ、杯部外面ハケメ、器柱部内面ヘラケズリ。基部内面はハケメ残す。杯部内面と器柱部内面に横ミガキ。	古墳時代前期	
第348棟 PL-26	13 土師器 高杯	掘方出土床下土 坑底部 完形	口 13.8 脚 10.1	高 12.0 赤織砂多い/良好/ 不い/黄焼	杯部上半と器受部の外面にハケメを粗し、杯部内外面と器柱部外面にミガキ。器柱部内面はケズリのち粗いミガキ。	古墳時代前期	
第348棟 PL-26	14 縄文土器 深鉢	埋土 胴部破片			細砂、赤色粘/良 好	蛇行隆帯を垂下させ、縦位沈線を充填施す。	加賀川E2式
第348棟 PL-26	15 縄文土器 深鉢	埋土 胴部破片			細砂、赤色粘/良 好	帯状沈線によるモチーフを施し、LR織文を充填施す。	称名寺1式
第348棟 PL-26	16 縄文土器 深鉢	埋土 胴部破片			細砂、輝石/良好	帯状沈線によるモチーフを施し、LR織文を充填施す。	称名寺1式
第348棟 PL-26	17 縄文土器 深鉢	埋土 胴部破片			細砂、赤色粘、輝 石/良好	帯状沈線によるモチーフを施し、LR織文を充填施す。	称名寺1式
第348棟 PL-26	18 縄文土器 深鉢	埋土 胴部破片			細砂/良好	帯状沈線によるモチーフを施し、両点を充填施す。	称名寺Ⅱ式
第348棟 PL-26	19 縄文土器 深鉢	埋土 胴部破片			細砂、輝石/良好	帯状沈線によるモチーフを施す。	称名寺Ⅱ式
第348棟 PL-26	20 砥石 切り砥石	埋土 ほぼ正形	長 8.5 幅 6.2	厚 3.9 重 222	砥沢石	三面使用。右側面に断面V字状を呈する深い横位の溝2条があるほか、縦位の深い溝1状がありこれが表面側にも続き、新形を意味した可能性も否定できない。左辺側の分割面には部分的に磨削面がある。	

第4章 調査成果の整理とまとめ

9号彫穴建物

棟 No.	種 類	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考		
第348回 PL.26	1 土製品 丸瓦	彫穴建物南隅付 近縁方底面直上 完形	高 幅	1.7 1.9	孔 重	0.4 6.1	細砂少量含む/良 好/周	全体に粗いミガキ。孔口部未整形。	古墳時代前期
第348回 PL.26	2 土製品 丸瓦	彫穴建物南隅付 近縁方底面直上 完形	高 幅	2.1 2.1	孔 重	0.4 7.8	細砂少量含む/良 好/周	全体に粗いミガキ。孔口部未整形。	古墳時代前期

2号土坑

棟 No.	種 類	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考		
第38回 PL.27	1 縄文土器 深鉢	底面から0.24~ 0.31m上 口縁~胴上位置	口	(31.2)			細砂、赤色粘、輝 石/ふつつ	仰み隆帯をめぐらして口縁部無文部を区画し、口唇部の小 突起からJ字状隆帯を垂下。胴部文様は帯状沈線によるJ 字状、V字状、顕先状モチーフを描き、文様外に底面刺突 を充填施す。	堀之内1式
第38回 PL.27	2 縄文土器 深鉢	底面から0.06m 上 口縁部片	口	(20.5)			細砂/良好	口縁部でくの字状に外屈。口唇部に環状突起。突起下に 8の字状貼付文を付す。屈曲部下に沈線によるモチーフを 描く。	堀之内1式
第38回 PL.27	3 縄文土器 深鉢	底面から0.20m 上 胴部片					細砂/良好	口縁部でくの字状に外屈。屈曲部に横位帯状沈線をめぐら し、横位の8の字状貼付文を付す。屈曲部下に帯状沈線よ る斜位、J字状モチーフを描く。	堀之内1式
第38回 PL.27	4 縄文土器 深鉢	底面から0.06m 上 口縁部片					細砂、輝石/ふつ つ	口縁部が短く内折。内折部に刺突を伴う帯状沈線をめぐら す。	堀之内1式
第38回 PL.27	5 縄文土器 深鉢	底面から0.18m 上 胴部片					細砂、輝石/ふつ つ	縦位、弧状の沈線を施す。	堀之内1式
第38回 PL.27	6 縄文土器 深鉢	底面から0.18上 口縁部片					細砂/ふつつ	波頂部の突起。内面に8の字状の突起を付す。	称名寺式
第38回 PL.27	7 縄文土器 深鉢	底面から 0.064m上 胴部片					細砂、輝石/良好	帯状沈線によるモチーフを施し、列点を充填施す。	称名寺B式
第38回 PL.27	8 縄文土器 深鉢	底面から0.24m 上 底部片	底	8.0			細砂、輝石/ふつ つ	無文。縦位のミガキ調整見られる。	後期前葉
第38回 PL.27	9 縄文土器 深鉢	底面から0.28m 上 底部片	底	12.0			細砂、輝石/良好	沈線による懸垂文を施し、後部LR縄文を縦位充填施す。 無文部、底面、内面ミガキ整形。	加曾利E3式
第38回 PL.27	10 縄文土器 蓋	底面直上 完形	長 高	13.7 6.0			細砂/良好	横位の横みを付す。横位のナブ面顯著。	後期前葉

3号土坑

棟 No.	種 類	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考		
第40回 PL.27	1 縄文土器 深鉢	底面から0.19m 上 口縁~胴中位	口	31.0			細砂/良好	口縁が短く内折。口唇部に6単位と思われる環状突起を付し、 内折部突起部に帯状沈線をめぐらす。胴部文様は帯状 沈線によるJ字状などの幾何学モチーフを描き、文様外に 列点を充填施す。縦位にモチーフを配しているが、 一部に乱れが見られる。	称名寺B式
第40回 PL.27	2 縄文土器 深鉢	底面から0.16m 上 口縁~胴上位置	口	(25.2)			粗砂/良好	口縁が短く外反し、口縁部が短く内折。内折部に内形刺突 を3個連ねる。胴部文様は帯状沈線を基調とした幾何学モ チーフを描く。	称名寺B式
第40回 PL.27	3 縄文土器 浅鉢	底面から0.16m 上 口縁部片	口	(21.0)			細砂、輝石/良好	口縁部でくの字状に内屈。口唇部の小突起からハの字状隆 帯を垂下。屈曲部に斜み隆帯をめぐらし、下位の文様帯に 縦位楕円状モチーフを描き、LR縄文を充填施す。口 唇部凹状。	称名寺1式
第40回 PL.27	4 縄文土器 深鉢	底面から0.17m 上 口辺部片					細砂、輝石/良好	口縁部がくの字状に内屈。弧状隆帯を付す。	称名寺1式
第40回 PL.27	5 縄文土器 深鉢	底面から0.20m 上 底部片						4と同一個体。縦位短沈線を伴う低平な隆帯を垂下、帯状 沈線による幾何学モチーフを施し、LR縄文を充填施す。	称名寺1式
第41回 PL.28	6 縄文土器 浅鉢	底面から0.14m 上 口縁部片					粗砂/良好	口縁が短く内屈。帯状沈線によるJ字状モチーフを施し、 斜位の帯状沈線で連続させるようだ。沈線間にLR縄文を 充填施す。J字の下端に刺突を伴う貼付文を付す。内面横 位のミガキ整形。	称名寺1式
第41回 PL.28	7 縄文土器 深鉢	埋土 把手					細砂、輝石/良好	円形刺突、楕円状沈線を施す。	称名寺式

遺物観察表

種 類 No.	種 類 器 種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第41図 PL.28	8 縄文土器 深鉢	底面から0.16m 上 製部破片			細砂、輝石/良好	帯状沈線によるモチーフを施す。 称名寺Ⅱ式
第41図 PL.28	9 縄文土器 蓋	底面から0.07m 上 ほぼ完形	長 10.8 幅 2.6	高 6.5	細砂、白色粘/良 好	円筒状のつまみを付す。縦位のナデ粗磨。内面横位のナ デ整形、部分的にミガキ整形。 後期前葉
第41図 PL.28	10 縄文土器 蓋	底面から0.13m 上 つまみ破損	長 10.3		細砂/良好	つまみ下部に3個の円形凹突を施す。横位のナデ整形。 後期前葉
第41図 PL.28	11 滑石 棒状橋脚陶器	底面から0.13m 上 ほぼ完形	長 10.9 幅 5.8	厚 重 5.1 440.2	粗粒輝石安山岩	蒙サイズで厚味がある。表面面とも摩耗するほか、窪み穴 がある。右側面は平坦だが礫本来の形状。左側面の厚材は 著しい。 縄文時代 著しい。
第41図 PL.28	12 石皿 有縁	底面直上 左辺上端部片	長 (11.2) 幅 (7.9)	厚 重 5.1 193.7	粗粒輝石安山岩	石材縦は粗く軽い。黒色多孔質で、加工は容易かもしれな い。 縄文時代

5号土坑

種 類 No.	種 類 器 種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第42図 PL.28	1 縄文土器 深鉢	埋土 口縁部片			細砂/良好	口縁部がくの字状に内屈、帯状沈線をめぐるす。 称名寺Ⅱ式
第42図 PL.28	2 縄文土器 深鉢	埋土 口縁部片			細砂、輝石/良好	帯状沈線によるモチーフを施し、列点を充填施文する。 称名寺Ⅱ式
第42図 PL.28	3 縄文土器 深鉢	埋土 口縁部片			粗砂/良好	帯状沈線によるモチーフを施し、歯状刻突を充填施文す る。 称名寺Ⅱ式

12号ピット

種 類 No.	種 類 器 種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第43図 PL.28	1 縄文土器 深鉢	埋土 口縁部破片			細砂/ふつう	帯状沈線によるモチーフを施す。 称名寺Ⅱ式

遺構外

種 類 No.	種 類 器 種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第46図 PL.28	1 縄文土器 深鉢	表土 製部破片			細砂、礫砂/ふつ う	ループ縄文を横位施文する。 陶山Ⅰ式
第46図 PL.28	2 縄文土器 深鉢	表土 口縁部破片			細砂、礫砂/ふつ う	LR縄文を横位施文する。 黒浜Ⅱ式
第46図 PL.28	3 縄文土器 深鉢	表土 口縁部破片			細砂、礫砂/ふつ う	LR、RR縄文を羽状施文する。 黒浜Ⅱ式
第46図 PL.28	4 縄文土器 深鉢	表土 製部破片			細砂/良好	器系文Rを縦位施文し、沈線による懸垂文を施す。 加曾利E 2式
第46図 PL.28	5 縄文土器 深鉢	表土 製部破片			細砂、赤色粘/良 好	器系文Rを縦位施文し、沈線による懸垂文を施す。 加曾利E 2式
第46図 PL.28	6 縄文土器 深鉢	表土 製部破片			細砂/良好	沈線による懸垂文を施し、RR縄文を縦位充填施文する。 加曾利E 3式
第46図 PL.28	7 縄文土器 深鉢	表土 製部破片			細砂、輝石/良好	沈線による懸垂文を施し、RR縄文を縦位充填施文する。 内面ミガキ整形。 加曾利E 3式
第46図 PL.28	8 縄文土器 深鉢	表土 製部破片			細砂、輝石/ふつ う	沈線による懸垂文、U字状、逆U字状モチーフを施し、 RR縄文を縦位充填施文する。 加曾利E 4式
第46図 PL.28	9 縄文土器 深鉢	表土 口縁部破片			細砂/良好	口縁が短く内湾、帯状沈線による逆U字状モチーフを描き、 文様外にLR縄文を充填施文する。 加曾利E 4式
第46図 PL.28	10 縄文土器 深鉢	表土 口縁部破片			細砂/良好	表状口縁で口縁が短く内湾、隆線をめぐるして短斜な口縁 部無文帯を区画、帯状の隆線を弧状に垂下させ、文様外に RR縄文を充填施文する。 加曾利E 4式
第46図 PL.28	11 縄文土器 深鉢	表土 口縁部破片			細砂/良好	表状口縁で口縁が短く内湾、隆線をめぐるして短斜な口縁 部無文帯を区画、帯状の隆線を弧状に垂下させ、文様外に RR縄文を充填施文する。 加曾利E 4式
第46図 PL.28	12 縄文土器 深鉢	表土 口縁部破片			細砂/ふつう	帯状沈線によるモチーフを施し、LR縄文を充填施文する。 称名寺Ⅰ式
第46図 PL.28	13 縄文土器 深鉢	表土 口縁部破片			細砂、輝石/良好	口縁が短く内折。内折部に円形凹突をめぐるす。 称名寺Ⅰ式
第46図 PL.28	14 縄文土器 深鉢	表土 口縁部破片			細砂/ふつう	口縁下に横位8の字貼付文を付し、下に横S字文を配す。 縦之内Ⅰ式

第4章 調査成果の整理とまとめ

種 図 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 現存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考		
第46図 PL.28	15	縄文土器 深鉢	表土 口縁～胴上位破片				細砂/良好	頸部でくの字状に外屈。頸部に刺突を伴う円形貼付文を付し、横長楕円状の沈線をめぐる。以下、沈線によるモチーフを施す。口縁外面を肥厚させ、肥厚部に横位沈線、下部に刺突めぐる。	堀之内1式	
第46図 PL.28	16	縄文土器 深鉢	表土 口縁部破片				細砂/良好	15と同一。肥厚部に8の字貼付文を付す。	堀之内1式	
第46図 PL.28	17	縄文土器 深鉢	表土 口縁部破片				細砂/良好	口縁内面肥厚。地文にLR縄文を施し、帯状沈線によるモチーフを細く。口縁部ミガキ調整による幅狭無文帯。	堀之内1式	
第46図 PL.28	18	縄文土器 深鉢	表土 胴部破片				細砂/良好	横位多段の沈線、対弧文を施す。	加曾利B2式	
第47図 PL.28	19	中国磁器 白磁皿	表土 底部1/3	底	3.7		灰白	底部内面周縁部による1重歯輪内に窪による草花文。内外面施釉後に底部外面回転磨り。大宰府桑坊XV分類の白磁皿Ⅴ-1b類	12世中葉～後葉	
第47図 PL.28	20	石罫 四基無茎罫	表土 完形	長 幅	(2.3) 1.5	厚 重	0.5 1.1	珪質頁岩	完成状態。表裏面とも押圧割離が全面を覆う。左辺側に貼れる点で、石罫としては満足できない出来かもしれない。	縄文時代
第47図 PL.28	21	石罫 四基無茎罫	表土 完形	長 幅	(2.0) 1.8	厚 重	0.5 1.2	チャート	完成状態。表裏面とも押圧割離で覆われているが、やや種。右辺側中央の割離が深過ぎたことで、器体のバランスを欠いたものと思われる。	縄文時代
第47図 PL.28	22	石罫 四基無茎罫	表土 ほぼ完形	長 幅	(1.9) 1.7	厚 重	0.5 1.3	チャート	完成状態？表面側は全面加工、裏面側は周辺加工のみに止まる。返し部は丸く、完成直前で焼成された可能性が大。	縄文時代
第47図 PL.28	23	銭貨 寛永通寶	表土 完形	外 内	2.803 2.039	厚 重	0.163 2.8		新寛永。四文銭21枚。面、背ともに文字、輪、郭は明確だが全体に劣化が見られる。	寛文13(1668)年以降

写真図版



1 調査区東側全景(西から)



2 調査区西側全景(北西から)



1 1号溝西側全景(東から)



2 1号溝東側、3・4号溝全景(西から)



3 1号溝 A-A' 断面(東から)



4 1号溝 B-B' 断面(東から)

中・近世



1 3・4号溝断面(東から)



2 2号溝全景(西から)



3 2号溝断面(南から)



4 5号溝全景(西から)



5 5号溝全景(南から)



6 5号溝B-B'断面(北西から)



7 6号溝全景(東から)



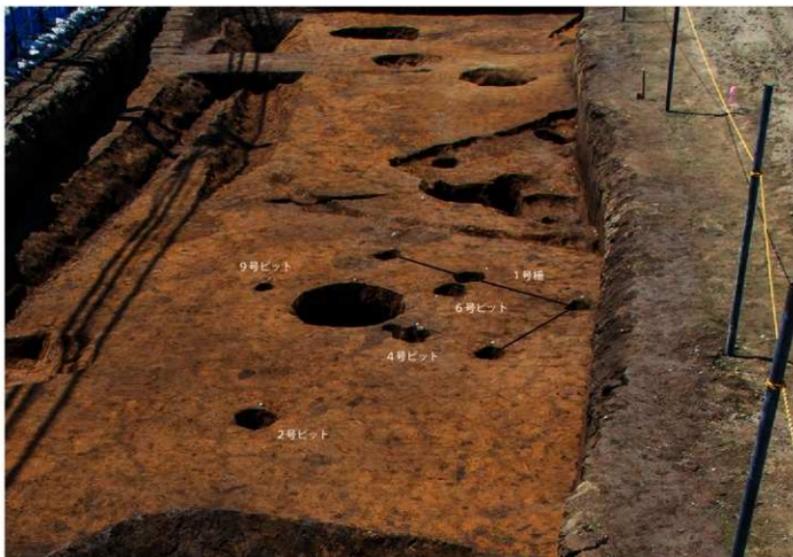
8 6号溝断面(南から)



1 8号土坑全景(西から)



2 8号土坑断面(西から)



3 1号柵、2・4・6・9号ビット全景(東から)



4 1号柵 P1 全景(南東から)



5 1号柵 P1 断面(南東から)



1 1号柵 P 2 全景(南東から)



2 1号柵 P 2 断面(南東から)



3 1号柵 P 3 全景(南から)



4 1号柵 P 3 断面(南から)



5 1号柵 P 4 全景(南から)



6 1号柵 P 4 断面(南から)



7 1号ビット 全景(北から)



8 1号ビット 断面(北から)



1 2号ビット全景(南から)



2 2号ビット断面(南から)



3 4号ビット全景(南から)



4 4号ビット断面(南から)



5 6号ビット全景(南から)



6 6号ビット断面(南から)



7 9号ビット全景(南から)



8 9号ビット断面(南から)

古代



1 1号竪穴建物掘方全景(北から)



2 1号竪穴建物断面(南から)



3 4号竪穴建物掘方全景(北東から)



4 4号竪穴建物断面(北西から)



5 10号竪穴建物全景(南から)



6 10号竪穴建物掘方全景、断面(南から)



7 10号竪穴建物遺物出土状況(南から)



1 1号井戸全景(南から)



2 1号井戸断面(南西から)



3 2号井戸全景(東から)



4 2号井戸断面(東から)



5 3号井戸全景(南から)



6 3号井戸断面(南東から)



7 4号井戸全景(北から)



8 4号井戸断面(南から)



1 2号竪穴建物掘方全景(南西から)



2 2号竪穴建物断面(南から)



3 2号竪穴建物P1断面(南東から)



4 3号竪穴建物遺物出土状況(北西から)



5 3号竪穴建物遺物出土状況近景(北西から)



1 3号竪穴建物全景(北西から)



2 3号竪穴建物断面(南西から)



3 3号竪穴建物掘方全景(北東から)



4 3号竪穴建物P1断面(北西から)



5 3号竪穴建物P2断面(北西から)



1 5号竪穴建物掘方全景(北から)



2 5号竪穴建物A-A'断面(南東から)



3 5号竪穴建物P 2断面(西から)



4 5号竪穴建物焼土坑(東から)



5 5号竪穴建物焼土坑B-B'断面(西から)



1 6号竪穴建物全景(南東から)



2 6号竪穴建物掘方全景(南東から)



3 6・7号竪穴建物A-A'断面(南から)



4 6号竪穴建物遺物出土状況(東から)



5 6号竪穴建物P1断面(南西から)



1 6号竪穴建物P 2 全景(南から)



2 6号竪穴建物P 3 全景(南西から)



3 7号竪穴建物全景(南から)



4 7号竪穴建物掘方全景(南から)



5 7号竪穴建物P 1 全景(南から)



1 8号竪穴建物全景(北西から)



2 8号竪穴建物遺物出土状況(北西から)



3 8号竪穴建物掘方全景(北西から)



4 8・9号竪穴建物A-A'断面(北西から)



5 8・9号竪穴建物B-B'断面(北東から)



1 8号竪穴建物P1全景(北西から)



2 8号竪穴建物P2全景(北西から)



3 8号竪穴建物P3全景(南から)



4 8号竪穴建物P4全景(南東から)



5 9号竪穴建物掘方全景(北西から)



1 7号土坑全景(南東から)



2 7号土坑断面(南東から)



3 18号ビット全景(北から)



4 18号ビット断面(北東から)



5 19号ビット全景(北から)



6 19号ビット断面(北から)



7 21号ビット全景(北から)



8 21号ビット断面(北から)



1 22号ピット全景(南から)



2 22号ピット断面(南から)



3 23号ピット全景(南東から)



4 23号ピット断面(南東から)



5 24号ピット全景(南から)



6 24号ピット断面(南から)



7 調査状況(南東から)



1 1号土坑全景・断面(南から)



2 2号土坑遺物出土状況上面(東から)



3 2号土坑遺物出土状況下面(東から)



4 2号土坑完掘全景(東から)



5 2号土坑断面(東から)



6 3号土坑遺物出土状況上面(東から)



7 3号土坑遺物出土状況下面(東から)



8 3号土坑完掘全景(東から)



1 3号土坑断面(東から)



2 3号土坑断面(東から)



3 5号土坑全景(北から)



4 5号土坑断面(北から)



5 6号土坑全景(南から)



6 6号土坑断面(南から)



7 3号土坑作業状況(東から)



1 10号ピット全景(南西から)



2 10号ピット断面(南西から)



3 11号ピット全景(南から)



4 11号ピット断面(南東から)



5 12号ピット全景(南から)



6 12号ピット断面(南から)



7 14号ピット全景(北西から)



8 14号ピット断面(北西から)



1 15号ピット全景(南から)



2 15号ピット断面(南から)



3 16号ピット全景(南から)



4 16号ピット断面(西から)



5 17号ピット全景(北から)



6 17号ピット断面(西から)



7 20号ピット全景(北西から)



8 20号ピット断面(北西から)



1 谷部基本土層(北から)



2 台地部基本土層(北から)



3 旧石器確認トレンチ全景(南から)



4 旧石器確認トレンチ断面(南から)



5 調査区西端部遺構確認面(北から)



6 調査区西端部東側トレンチ(北から)



7 調査区西端部西側トレンチ(北から)

1号溝



21(1/1)

22(1/1)

23(1/1)



24

25

26

27

28(1/1)

3号溝

5号溝

10号竪穴建物



1号井戸

2号井戸



1・3・5号溝、10号竪穴建物、1・2号井戸出土遺物

PL.24

4号井戸



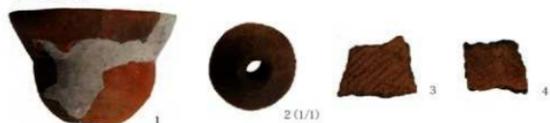
2号竪穴建物



3号竪穴建物

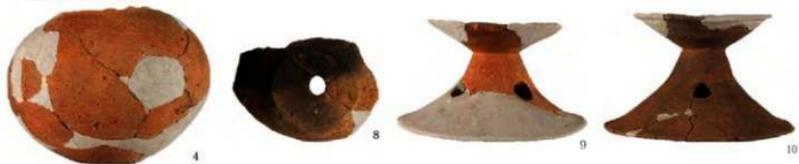


5号竪穴建物



4号井戸、2・3・5号竪穴建物出土遺物

6号竖穴建物



8号竖穴建物



7号竖穴建物



PL.26

8号竖穴建物



8・9号竖穴建物出土遺物

2号土坑



1 (1/4)



2



3 (1/4)



4



5



6



7



8



9



10

3号土坑



1 (1/4)



2 (1/4)



3



4



5

PL.28

3号土坑



5号土坑



12号ビット



遺構外出土縄文土器



遺構外出土石器・金属



3・5号土坑、12号ビット、遺構外出土遺物

報告書抄録

書名ふりがな	かみえぐろいせき
書名	上江黒遺跡
副書名	(一)今泉館林線(上江黒工区)社会資本総合整備(防災・安全)(交安・重点)事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	—
シリーズ名	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	717
編著者名	高島英之
編集機関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20230316
作成法人ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住所	群馬県渋川市北橘町下箱田784-2
遺跡名ふりがな	かみえぐろいせき
遺跡名	上江黒遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんおうらぐんめいわちかみえぐろちない
遺跡所在地	群馬県邑楽郡明和町上江黒地内
市町村コード	10522
遺跡番号	0019
北緯(世界測地系)	36° 12' 56.53"
東経(世界測地系)	139° 33' 43.17"
調査期間	20210801-20210930
調査面積	1,244.560
調査原因	道路建設
種別	集落
主な時代	中・近世、古代、古墳時代、縄文時代
遺跡概要	中・近世-柵1+溝6+ピット5+中近世土器+石製品+古銭/古代-竪穴建物3+井戸4+土師器+須恵器/古墳時代-竪穴建物7+土坑1+ピット6+土師器/縄文時代-土坑5+ピット8+縄文土器+石器
特記事項	良好な状態で出土した古墳時代前期の土器群
要約	<p>上江黒遺跡は、邑楽郡明和町上江黒地内、東北自動車道館林インターチェンジの南西約1.5km、標高約18mの利根川旧河道左岸の自然堤防上に立地している。遺跡地は近・現代の宅地造成及び耕作により、削平を受けていたが、縄文時代、古墳時代前期及び後期、古代、中・近世の各時代の遺構が検出された。</p> <p>中・近世の遺構は、1基の柵、6条の溝、5基のピットが検出された。また、調査区東端付近からは、屋敷等の彫刻と考えられる箱塚状の大型の溝も検出された。古代の遺構は、3棟の竪穴建物と4基の井戸が検出された。竪穴建物はごく一部が検出されたに過ぎず、詳細は不明である。集落としては疎らな建物配置であった。古墳時代の遺構は7棟の竪穴建物、1基の土坑、6基のピットが検出された。主に古墳時代前期のもので、土器群が良好な状態で出土した。縄文時代の遺構は、5基の土坑と8基のピットが検出された。縄文時代前期前葉、縄文時代中期後葉～後期前葉の土器が出土しており、その時期の遺構と考えられる。いずれの時代においても検出された遺構数は然程に多いわけではなく、調査対象地は集落の中心部分では無く、縁辺部分であったと考えられる。また、この地においては縄文時代以来、人の営為が連続と継続していたというわけではなく、縄文時代、古墳時代前期、古代、中近世と断続的に土地利用がなされていた様子が覗えた。</p>

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第717集

上江黒遺跡

(一)今泉館林線(上江黒工区)社会資本総合整備(防災・安全)(交安・重点)
事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

令和5(2023)年3月15日 印刷

令和5(2023)年3月17日 発行

編集・発行／公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555 群馬県渋川市北碓町下箱田1784番地2

電話(0279)52-2511(代表)

ホームページアドレス <http://www.gunmaibun.org/>

印刷／株式会社開文社印刷所
